奥尻島青苗遺跡

1981

奥尻町教育委員会

奥尻島青苗遺跡

— 山本台地・三浦地点の住宅建築に係わる記録保存の発掘調査報告 —

1981

奥尻町教育委員会

例　言

1. 本書は北海道奥尻郡奥尻町字青苗435番地に所在する，青苗遺跡の記録保存の発掘調査報告書である。
2. 本調査は，昭和55年度文化財保存事業補助金の交付を受け，奥尻町の道営事業として，昭和55年6月9日に着手し，昭和56年3月31日をもって完了した。
3. 調査にあたって，下記の方がたから指導助言を頂いた。北海道教育庁社会教育部文化課・藤本英夫・竹田輝雄・千葉英一，文化庁文化財保護部記念物課・波貝・毅・北海道埋蔵文化財センター・中村福彦・大沼忠春，駒沢大学・河野本道。
4. 調査班の構成は，日本考古学協会員・佐藤忠雄が担当者となり，奥尻町嘱託遺跡調査員・佐藤芳子・山田　勝が調査員となり，岡山あけみが補佐した。
5. 本書の執筆は佐藤忠雄・佐藤芳子・山田勝・岡山あけみが分担し，佐藤忠雄が編集した。
6. 遺物の実測，トレースは主に山田　勝・岡山あけみ，遺物の写真撮影は佐藤雅彦があたった。
7. 石質鑑定は工業技術院地質調査所北海道支所・山口昇一・久保和也氏に，花粉分析は北海道開拓記念館・山田悟郎氏に，動物遺体の種名同定については，札幌医科大学第2解剖学教室・西本豊弘氏に依頼した。

目　　次

例　言

Ⅰ．発掘調査の概要

1.発掘調査に至るまでの経緯……1
2.青苗遺跡の立地と概要……1
3.発掘区と調査の方法……4

Ⅱ．層　位

1.青苗遺跡の標準土層……4
2.発掘区の層序と文化層……4

Ⅲ．遺　構

1.焼土と配石……8
2.石組み……12
3.弧状溝……15
4.竪　穴……15

Ⅳ．遺　物

1.第１文化層の出土遺物……16
1）土　器……16
2）土製品および石製品……40
3）鉄器および鉄製品……40
4）鉄　滓……41
5）動物遺体……42
2.第２文化層の出土遺物……46
1）土　器……46
2）石　器……53

Ⅴ．花粉分析……66

Ⅵ．まとめ……70

参考文献……72

挿図目次

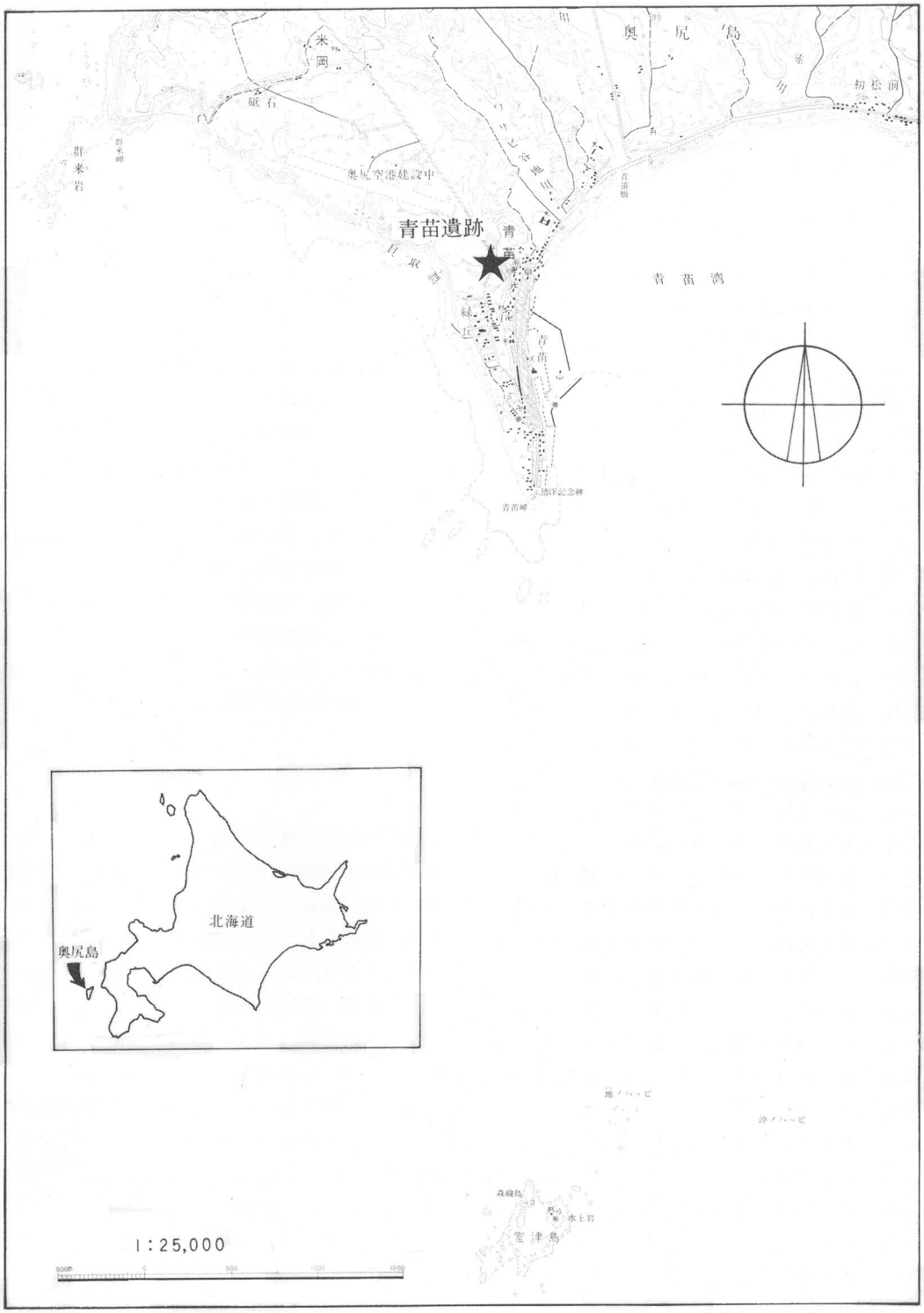
第１図　青苗遺跡の位置図
第２図　遺跡周辺の地形図……4
第３図　発掘区の概念および土層断面実測の位置図……6
第４図　発掘区の土層断面実測図……6
第５図　Ｃ－３区　焼土址　(1)　実測図……9
第６図　C·D-4，C·D-5区　焼土址　(2)　実測図……10
第７図　C·D-4，C·D-5区　配石と遺物の出土状況実測図……7
第８図　第１文化層生活址面の遺構実測図……11
第９図　第２文化層生活址面の柱穴群実測図……13
第10図　C·D-1区　石組み実測図……14
第11図　出土遺物　第１文化層の土器　(1)　実測図……31
第12図　出土遺物　第１文化層の土器　(2)　実測図……32
第13図　出土遺物　第１文化層の土器　(3)　実測図……33
第14図　出土遺物　第１文化層の土器　(4)　実測図……34
第15図　出土遺物　第１文化層の土器　(5)　拓影図……35
第16図　出土遺物　第１文化層の土器　(6)　拓影図……36
第17図　出土遺物　第１文化層の土器　(7)　拓影図……37
第18図　出土遺物　第１文化層の土器　(8)　拓影図……38
第19図　出土遺物　第１文化層の土器　(8,9)　拓影図……39
第20図　出土遺物　第１文化層の土製品，石製品実測図……43
第21図　出土遺物　第１文化層の鉄器，鉄製品実測図……44
第22図　出土遺物　第１文化層の鉄滓実測図……45
第23図　出土遺物　第２文化層の土器　(1)　拓影図……51
第24図　出土遺物　第２文化層の土器　(2)　拓影図……52
第25図　出土遺物　第２文化層の石器　(1)　実測図……60
第26図　出土遺物　第２文化層の石器　(2)　実測図……61
第27図　出土遺物　第２文化層の石器　(3)　実測図……62
第28図　出土遺物　第２文化層の石器　(4)　実測図……63
第29図　出土遺物　第２文化層の石器　(5)　実測図……64
第30図　擦文土器の文様，形態分類模式図……65

表目次

第１表　第１文化層の実測土器一覧表……22
第２表　第１文化層の拓影土器一覧表……23
第３表　第２文化層の拓影土器一覧表……49
第４表　第２文化層の実測石器一覧表……60
第５表　花粉分析表……69

図版目次

第１図版　青苗遺跡の遠景
第２図版　発掘区の全景
第３図版　C-7区　配石と遺物の出土状態
第４図版　B-2区　配石と遺物の出土状態
第５図版　C-4区　配石と遺物の出土状態
第６図版　C-3区　配石と遺構　(1)
第７図版　C-7区　配石と遺構　(2)
第８図版　C-5区　配石と遺構
第９図版　C-3区　焼土址，遺物の出土状態
第10図版　C-3区　焼砂岩の出土状態
第11図版　C･D-1区　石組みの出土状態
第12図版　C･D-1区　南の石組み，遺物の出土状態
第13図版　B-3区　土器の出土状態　(1)
第14図版　B-3区　土器の出土状態　(2)
第15図版　EN区　鉄滓の出土状態
第16図版　E-6区　粘土塊の出土状態
第17図版　B-1区　奥尻ロームＡ層，遺物の出土状態
第18図版　B･C･D･E-3･4区　奥尻ロームＢ層検出の柱穴
第19図版　完掘後の発掘区と弧状溝　(1)
第20図版　完掘後の発掘区と弧状溝　(2)
第21図版　出土遺物　第１文化層の土器　(1)
第22図版　出土遺物　第１文化層の土器　(2)
第23図版　出土遺物　第１文化層の土器　(3)
第24図版　出土遺物　第１文化層の土器　(4)
第25図版　出土遺物　第１文化層の土器　(5)
第26図版　出土遺物　第１文化層の土器　(6)
第27図版　出土遺物　第１文化層の土器　(7)
第28図版　出土遺物　第１文化層の土器　(8)
第29図版　出土遺物　第１文化層の土器　(9)
第30図版　出土遺物　第１文化層の土製品および石製品
第31図版　出土遺物　第１文化層の鉄器および鉄製品
第32図版　出土遺物　第１文化層の鉄滓
第33図版　出土遺物　第１文化層の石組みに伴う動物遺体
第34図版　出土遺物　第１文化層の動物遺体
第35図版　出土遺物　第２文化層の土器　(1)
第36図版　出土遺物　第２文化層の土器　(2)
第37図版　出土遺物　第２文化層の石器　(1)
第38図版　出土遺物　第２文化層の石器　(2)
第39図版　発掘区から検出された花粉



第１図　青苗遺跡の位置図

Ⅰ．発掘調査の概要

1　発掘調査に至るまでの経緯

青苗遺跡は，道々奥尻島線青苗市街・奥尻空港間の道路整備事業に伴って，昭和51年より同53年にわたり，函館土木現業所より委託を受けて，奥尻町が発掘調査を実施したところである。本遺跡のもつ価値については，擦文文化期唯一の本格的貝塚が存在することで，つとに研究者間に関心がもたれていた。その発掘調査においても，骨角器を含む大量の遺物を出土し，周辺の貝塚台地に大鍛冶址，円形小貝塚，湧水溜，山本台地の投棄溝からは線刻画土器，多数の刻印のある土器等，有機的に関連する遺構の存在も確認された。

このことから，未発掘区域の早急な保存対策を，関係諸機関から強く要望され，町当局も具体的に検討を始めようとしていた矢先，該地に住宅を建築したいとの連絡が教育委員会にあった。

昭和54年，土地所有者からの連絡に対し，教育委員会は，そこが埋蔵文化財の包蔵地であることを説明し，整地，建築予定の一時停止を申し入れ，了解を取り付けた。町教育委員会は，早速，町当局に経費一部負担の措置を求める一方，道教育庁社会教育部文化課と協議をもち，その指導を得て，昭和55年度文化財保存事業補助金交付申請の手続きをとった。その後同年６月，千葉英一文化財保護主事が，当該遺跡の分布範囲確認調査に来町し，当時，同町東風泊遺跡を発掘調査中の佐藤忠雄，山田　勝が同行して，現地の状況を説明した。調査の結果，発掘調査予定地830m²全域に，擦文土器，貝殻文土器の出土と竪穴住居の壁と見られる遺構の一部を認めた。

昭和55年４月補助金交付の内示があり，発掘調査決定の運びとなった。この間，当時者間に意志の疎通を欠く点があり，多少の紆余曲折はあったが，理解に努められた地主の三浦氏と御協力を頂いた関係者各位に感謝の意を表したい。（佐藤忠雄）

2．青苗遺跡の立地と概要

奥尻島は北海道渡島半島の西海岸，江差町より約61km西方の日本海上にある環海の離島である。島の緯度は極東の絵図澗岬・東経139度33分45秒，極西の清次郎歌岬・東経139度24分12秒，極南の青苗岬・北緯42度３分，極北の稲穂岬・北緯42度15分８秒で，大きさは東西11km，南北27km，周囲84km，面積143.886m²の広さである。島の平面観は南北に長辺をもつ三角形状を呈している。奥尻海峡をはさんだ島の対岸は瀬棚，久遠，爾志，桧山に面しており，北端の稲穂岬と久遠の帆越岬とは約18kmで最も近く接している。奥尻海峡は対馬暖流が北上し，年間の約半分を西，西南西，南西の風が吹いている。その荒天時に航行する船舶にとって，島の東側，とくに奥尻港沖，青苗湾沖は絶好の避難海域となり，北海道西日本海諸島の中で利尻港につぐものとして知られている。

地形は海岸段丘の発達が顕著で，島の側面観は全般に低平に見える。これらの段丘は瀬川秀良によって1)神威山Ⅰ面（標高580～520m），2)神威山Ⅱ面（同500～400m），3)青苗Ⅲ面（同400～360m），4)フケ歌沢面（同260～240m），5)松江Ⅰ面（同200m），6)松江Ⅱ面（180m），7)赤石面（同160～100m），8)米岡面（同100～80m），9寺屋敷面（同60～50m），10)青苗岬面（同４m）に区分されている[1)]。これらの成因については，渡辺光によるシーソー的な間歇隆起運動，鈴木醇らによる撓曲を伴う隆起運動が述べられている。

島の最高地点は中央部西海岸寄りの海抜584.5mの神威岳で，その北には勝間山427.7m，球島山369.7mがある。東南方向では海抜523.9mの無名の高地から，さきの各段丘が比較的平担な面を展開している。海岸線は一般に屈曲が少なく，西海岸は山が迫り，急峻な崖となっている処が多い。北東南の海岸線は，稲穂岬や青苗川右岸台地を取り巻くように広い階段状の段丘面があり，いたる処に海蝕崖が見られる。

河川は中央山地を水源とし，段丘を開折して海に流入しているが，その地形から瀑布となって落ちるものが多い。主な河川では北の大岩生川，ガロ川，東の白水川，球浦川，仏沢一号川，塩釜川，釣懸川，鳥頭川，恩顧歌川，小倉川，カ沢川，兄カ沢川，深歌川，ラント川，赤川，青苗川，ワサビ谷地川があり，西では藻内川，ホヤ石川，神威脇川がある。このうちの最長は青苗川の8,475mである。

岬では尖頭状に細長く突出した北の稲穂岬と南の青苗岬が最大で，東岸には崖ノ岬，弁天岬，赤石岬，山ノ岬，弥右衛門岬があり，西岸には群来岬，ホヤ石岬，清次郎岬，クズレ岬，穴潤岬，北国岬，蚊柱岬，磯谷岬などがある。これらの中には岬と呼べないような小さなものも含まれているが，弁天岬のように，かって弁財船二艘が掛ったという良好な船掛潤を擁しているものもある。

湾については西岸の幌内湾と南の青苗湾，それに東岸の東風泊・赤石岬間の弓状湾入がある。弓状の湾入は他にも数ヶ所見られるが，潜在岩礁があったり，船がかりが悪かったりして，船舶の係留には不向きである。

このような地形的，気象的条件は島の居住適地が何処であるかを自ずと限定する。今日の主要市街地は神威脇を除き，すべて東南の海岸にあり，西北海岸は数軒単位の集落が4～5ヶ所見られるだけである。こうした制約は遺跡の分布にも現われており，すべてが現在の集落と重複しているといってもよい程である。

文献史上で奥尻島に関する記事が現われるのは，大嶺雄謹の「松前山法源寺禅刹縁記」寛文9年（1669年）が最古である。その中で若狭の僧，随芳が縁戚にあたる武田信広を慕って蝦夷地に渡航の折難船し，本島の西海岸に漂着したとあるが，これより先の享徳3年（1454年）に武田信広主従が南部大畑より上ノ国に向う途中難船し，ハマシマイ（初松前）に漂着したというアイヌの口碑がある。こうした偶発的なことでなく，最初から直接的な目的をもって来島したのは，享禄2年（1529年）頃から毎年冬期より春の鰊漁期まで，オットセイの出稼にきていたアイヌの記録が最も古いものだろう。

古地図に奥尻島が登場するのは，元和年間の作製といわれる，ド・アンジェリスの地図の〝オクシリ〟が最初で，寛文7年（1667年）佐々木又兵衛らの「蝦夷松前図」に〝ヲクシリ〟，享保5年「（1720年）新井白石「蝦夷志」の附図になって，今日の〝奥尻〟の名称が用いられている。これら三葉の地図の中では，寛文7年のものが現形に近い。

奥尻島の遺跡調査は，昭和6年，深瀬春一による青苗野，大寺屋敷の踏査で，満徳寺横の小丘において貝塚を発見し「奥尻島紀行」と題して『旅と伝説』に発表したのが嚆矢である。その後昭和24年8月，宮下正司ら江差高等学校郷土研究部による青苗市街地墓地附近および青苗貝塚の発掘，翌25年，札幌西高等学校郷土研究部による墓地附近，貝塚の発掘と島内の遺跡パトロールが行われ，千畳，米岡，赤石，仏沢，東風泊，海栗前，松江に遺跡を確認している。昭和27年には東京大学理学部人類学教室の鈴木　尚らによる青苗貝塚の発掘と地層の研究があり，昭和29年8月，国立科学博物館の依頼を受けた函館市立博物館の石川政治・千代　肇・深瀬真澄らによる奥尻島貝塚の調査があった。これらの成果については，鈴木和夫「奥尻島調査概報」，西川政治「奥尻島貝塚の調査概報」，千代　肇「北海道奥尻島遺跡調査概要」とそれぞれ報告している[2)]。なかでも千代の報文は短期間の調査にも拘らず貝塚の出土遺物に検討を加え，貝塚のほぼ全容が明らかにされ，擦文文化

期における唯一の本格的貝塚として注目された。それが楔機になったと思われる発掘調査が昭和31年8月，早稲田大学・桜井清彦，杉山荘平，市立函館博物館・千代　肇らによって実施された。成果は桜井清彦によれば，総じて同一内容であるが，擦文文化の終末を知る上に又とない内耳土器（内耳部分）の出土は特筆に価した。桜井はそれを介して貝塚形成の時期を鎌倉時代から室町時代と推定し，本州北部東北地方との密接な関係を示唆した[3]。

青苗遺跡は奥尻島の南端，青苗岬の基部にある。(第1図）遺跡の分布範囲は，青苗墓所前三又路を中心として半経250m一帯で，標高24～30mの寺屋敷段丘の緩斜面と標高18～24mの急斜面に，千畳遺跡，千畳2遺跡，カベ山遺跡，青苗貝塚遺跡があり，貝塚台地裾の西本願寺附近より東に100m，北250mで，青苗岬段丘・標高5m～7mに青苗2貝塚遺跡の拡がりがある。これらの各地点を総括して青苗遺跡群と呼んでいる。なお，寺屋敷段丘面と青苗岬段丘面の遺跡は立地面からも，今後分離した方がよいだろう。

青苗貝塚遺跡は西本願寺北側の寺屋敷段丘の急斜面にある。台地の遷急点から東南の斜面にかけて貝層が存在する。この地点はかっての発掘調査が集中した箇所で，道路より東に奥まった附近の貝層は寸断され，あるいは煙滅している。貝塚に擦文土器，骨角器，鉄器を包含し，貝層下の再堆積層に円筒上層・下層式土器，最下層の奥尻ローム層から縄文早期・前期の貝殻文，絡条体圧痕文土器等を出土する。貝塚の北側，標高24m～28mに貝塚台地地点がある。貝塚と一連のものであるが，道々奥尻島線の左右の道路際と三又路付近にかけて擦文文化期の鉄の製錬遺構，小鍛冶址，木枠を囲った湧水溜，小貝塚などの生産址が発見されている。また東南の畑地に崖縁を取り巻くように，凡そ1mほどの高さと幅をもつ土畳状のものが見られ，30m×25mほどの窪地になっている。昭和6年の深瀬の報文にある「住居址は貝塚の直上にあって，幅約20間，奥行15間の土畳によって取り囲まれている。」であろう。住居址かどうか確認されていないが，最上層の覆土に大量の擦文土器を包含している。貝塚台地の南端から南西60m～130mの崖際に筆者らが，山本台地・懸崖地点と呼ぶ地点がある。後背地は畑地で西へ40mの幅員で，北に向う標高28mの等高線が町道に接するまでの東の緩斜面に小貝塚，墳墓，投棄溝等が認められた。なお本地点は昭和50年3月，北海道教育委員会・高橋稀一，上ノ国教育委員会・松崎水穂らの分布調査で発見された。墓所前三又路地点は旧千畳遺跡，千畳2遺跡，カベ山遺跡を包括した地点である。

青苗2貝塚は西本願寺門前にある続縄文文化の貝塚である。現表面に粉化した貝殻が一面に散布して見られる。層序は，Ⅰ層厚20cm，黒色を呈する渡島大島a火山灰の腐植土層である。Ⅱは層厚約5cmで黄白色の乙部層で火山灰層，Ⅲが層厚30～40cmの混土貝層，貝層は海砂a層で黒味を帯びている。恵山式土器，石器を出土する。本地点一帯は東風泊遺跡の土層構成と近似しており，より下層に縄文後期の包含層の存在が予測される。これより北50mの旧雪印乳業工場跡地付近の畑地に恵山式土器，骨角器を出土する箇所があり，別に崖下近くで擦文土器多数を出土したといわれる地点がある。

千畳遺跡は青苗墓所前三又路地点一帯をいう。奥尻空港の滑走路の東，35mの等高線が青苗湾に面する懸崖に向って減高する緩斜面に，縄文文化前期，中期の遺跡が濃密に分布する箇所が幾つか確認されている。高所にある耕地では円筒上層，下層式土器の大型破片の表面採集が容易であり，かっては畦地に石核，石杵，半月状打製石器がまとめられていた。包含の状態は殆んどが再堆積ローム層に押し込んだようにあり，それは青苗中学校裏の舌状台地（通称カベ山）に向うもの，墓所の中心を通っているもの，貝塚台地，山本台地に向う大きな流れとなっている。この流れは再堆積層の分布範囲と一致しており，奥尻ローム層を掘り込んで構築された竪穴，ピット等を覆っている。以上の青苗2貝塚を除く各地点の一部は，道路改良工事に伴い，筆者らが昭和51年～53年におよんで発掘調査を実施し，多くの成果を得ている[4]。（佐藤芳子・佐藤忠雄）

注.

1) 瀬川秀良　1972　「北海道奥尻島南部の海岸段丘」『北海道教育大学紀要』第２部Ｂ所収
2) 千代　肇　1956　「北海道奥尻島遺跡調査概報」『考古学雑誌』第41巻第２号所収
3) 桜井清彦　1958　「北海道奥尻町青苗貝塚について（第１次調査概報）」『古代』27所収
4) 佐藤忠雄　1979　『奥尻島青苗遺跡』(図版編)単行

3　発掘区と調査の方法

発掘区の大きさは，東辺49ｍ，西辺52ｍ，北辺17ｍの横長の台形で，面積は858.5㎡，これから高圧電柱設置部分18㎡を除いた840.5㎡が実質発掘面積である。（第２図）

青苗遺跡内での発掘区の位置は，さきに述べた山本台地発掘区と，ほぼ平行している。発掘区の北東角は，道々のコンクリート擁壁の天端から17.5ｍ，東南角は26ｍの距離にあり，山本台地・投棄溝の北端グリットCW－1からは僅か８ｍしか離れていない。

調査の方法は，発掘区を一辺を４ｍの正方形で区切る，グリット方式を用いた。各グリットの符号は，西北角を基点として，東にＡ～Ｅ，南に１～12とした。この交叉によってできるメッシュは，Ａ－１，Ｅ－１，Ａ－12，Ｅ－12区というように呼ばれる。（第３図・第２図版）（佐藤芳子）

II．層　位

1　青苗遺跡の標準土層

1976年，青苗貝塚発掘調査のさい，山田忍により，墓所前三叉路北で確認された。[1] 青苗遺跡は貝塚，貝塚台地，墓所前三叉路東，南，西，北の各地点を総括した名称であって，土層構成は各地点の地形に即して様相を異にしている。

標準土層の層序は，表層より，1)渡島大島a．A層（OSa.A），2)渡島大島a．C層（OSa.C），3)乙部層(A)C層，4)乙部層C層，5)渡島大島b．A層（OSb.A），6)駒ヶ岳e．A層（Ko.eA），7)駒ヶ岳e.C層（Ko.eC），8)渡島大島白ハンＡ層（OS.白ハンＡ），9)奥尻ロームＡ層，10)奥尻ロームＢ層，11)奥尻ロームＣ層となっている。

これら８種類の新期火山灰層と３種類の古期ローム層は，海成段丘である寺屋敷面の上部構成員であるが，これに地点によって，縄文海進期の気候変動による，奥尻ローム層を削剝流動して生成された再堆積層が加えられる。再堆積層は奥尻ローム層にのり，下半部はＣ層，上半部は腐植を含含むＡ層となっている。

遺跡包含層は渡島大島ｂ．Ａ層に擦文期のもの，再積堆Ａ，Ｃ層に縄文前期，中期初葉のもの，奥尻ロームＡ層に縄文中期中～未葉のもの，奥尻ロームＢ層に縄文早期中～未葉，前期初葉のものを出土する。

2　発掘区の層序と文化層

発掘区の土層は表層よりⅠ～Ⅷ層を数える。発掘区内は全面耕土されており，西辺は高さ２ｍほどの防風土手を築くために，プラオをかけて採土が行われ，耕土下は直ちに基盤土層となっている。また，東辺にも溜池を造成するさい，付近の粘質土壌の盛土がなされているなど，プライマリーな層位を観察できない部分がある。層位の傾向として，西から東へ下る約3°の地傾斜による土壌の流

動が見られ，西に薄く，東に厚い堆積を示している。ほぼ良好な状態を保っているのは，B，C列である。

Ⅰ層　腐植を含む灰褐色の砂土で，奥尻島全島の地表を被覆する。渡島大島ａ火山灰層で，層厚は15cm前後である。

Ⅱ層　淡橙色の砂土で，噴出源の確認されていない火山灰層である。乙部町付近に厚く堆積していることから，乙部層と命名されている。

Ⅲ層　黒色で腐植に富む軽い火山灰土壌で，層厚は５cm強と薄く，欠層するところもあり，注意しないと見落す。青苗貝塚調査のとき，山田　忍により，渡島大島ｂ火山灰層であることが確認された。

Ⅳ層　黄橙色の砂土で，上部は黒色で腐植に富む壌土となっている。駒ヶ岳ｅ火山灰層であるが，奥尻島は分布の末端にあたり，層厚は６cm弱である。

Ⅴ層　黒色で頗る腐植に富む壌土である。小さな白色の班点状火山灰が疎らに見られる。渡島大島白ハン層である。

Ⅵ層　黒色で腐植に富む埴土の奥尻ロームＡ層である。層厚20～30cm。

Ⅶ層　にぶい黄橙色，ところによって褐色に近い埴土の奥尻ロームＢ層である。D，E列南寄り付近一帯はグライ化が進んでいる。これは南辺沿にい懸崖に向う，再堆積層生成時の古流路があり，降雨があると水が停滞するためである。層厚30cm。

Ⅷ層　黄橙色の埴土で，奥尻ロームＣ層である。

以上の観察結果は，当初，予測していた再堆積層の介在もなく，標準土層と同一である。(第４図)

文化層はⅢ層の渡島大島ｂ火山灰層と，Ⅵ層の奥尻ロームＡ層の２層がある。以後，前者を第１文化層，後者を第２文化層と呼ぶ。第１文化層は焼土，配石，組石などの遺構を伴って擦文土器を出土する。第２文化層は縄文早期，前期の遺物を，混然とした状態で出土する。（佐藤忠雄・山田勝）

注.

1) 山田　忍　1978　「青苗遺跡の土層構成と遺跡の関連について」『青苗遺跡発掘調査概報』所収

Ⅲ．遺　　構

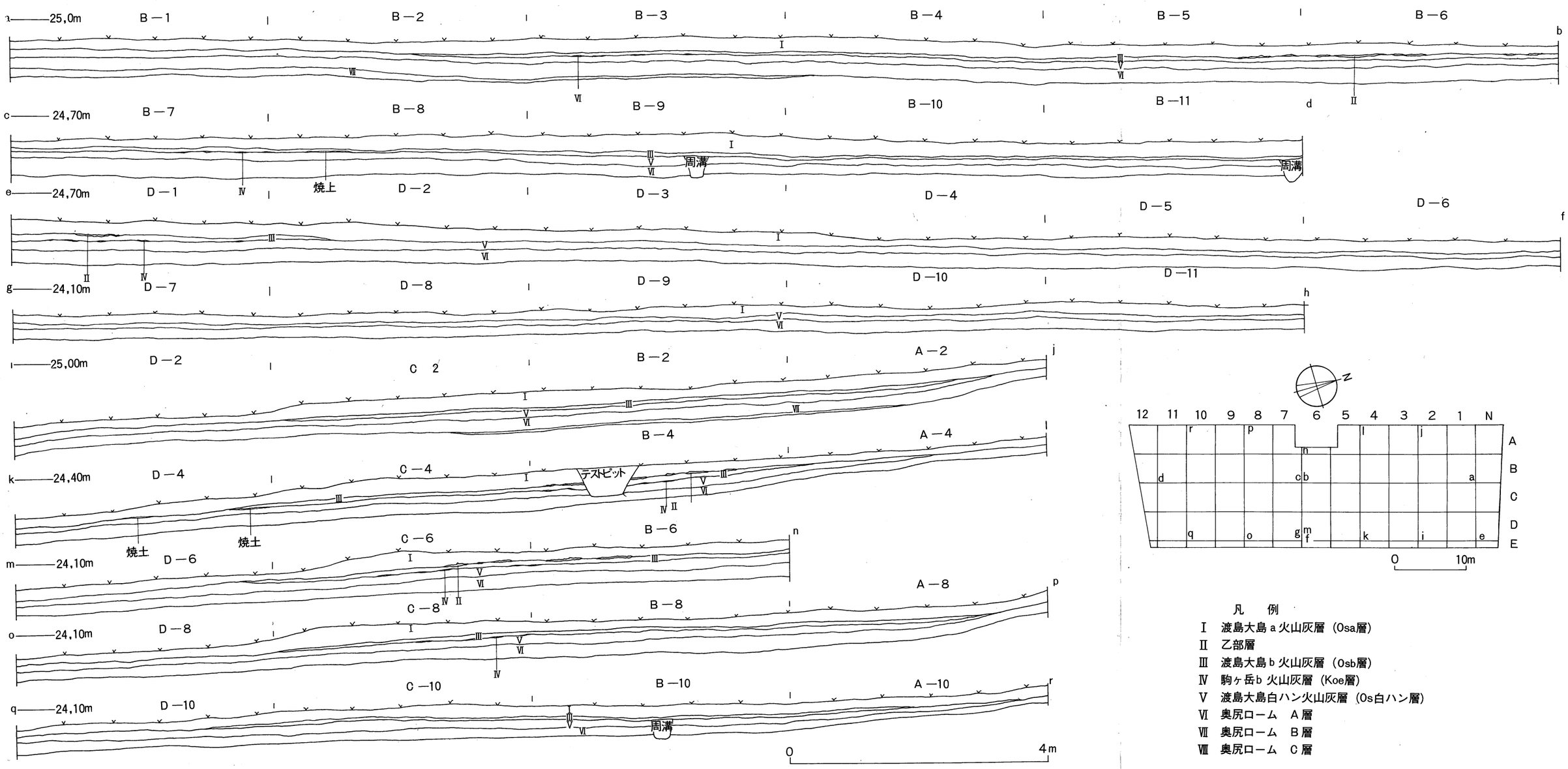
1　焼土と配石

第１文化層には，短棒状の小石を平らに敷詰めた小ブロックが，Ｂ－２区に２ヶ所，Ｃ－３区１ヶ所，Ｃ－５区２ヶ所，Ｃ－７区に１ヶ所検出された。不完全なものを含めると10ヶ所以上あったものと見られる。また同型の小石が，発掘区のほぼ全面に散在していることから，かっては相当数のブロックがあったものと推定できる。

短棒状石は泥岩製が多く，角が落ちて丸味を帯びているので，河床礫の中から，適当な大きさのものを，選別したものと思われるが，また，なかには長楕形の扁平な石を，瀬戸内技法のように刺身切りする打割手法で，25mm前後の一定の厚さに，意識的に作出したものもある。大きさについては，長さ70mm～100mm，幅18mm～40mm，厚さ14mm～35mmが普通である。(第3･6･7･8図版)

ブロックの形は不定形で40cm×50cmほどの広さをもち，その付近に20cm～30cm前後の平石が配置され，大小の焼土が付帯している。

第２図　遺跡周辺の地形図

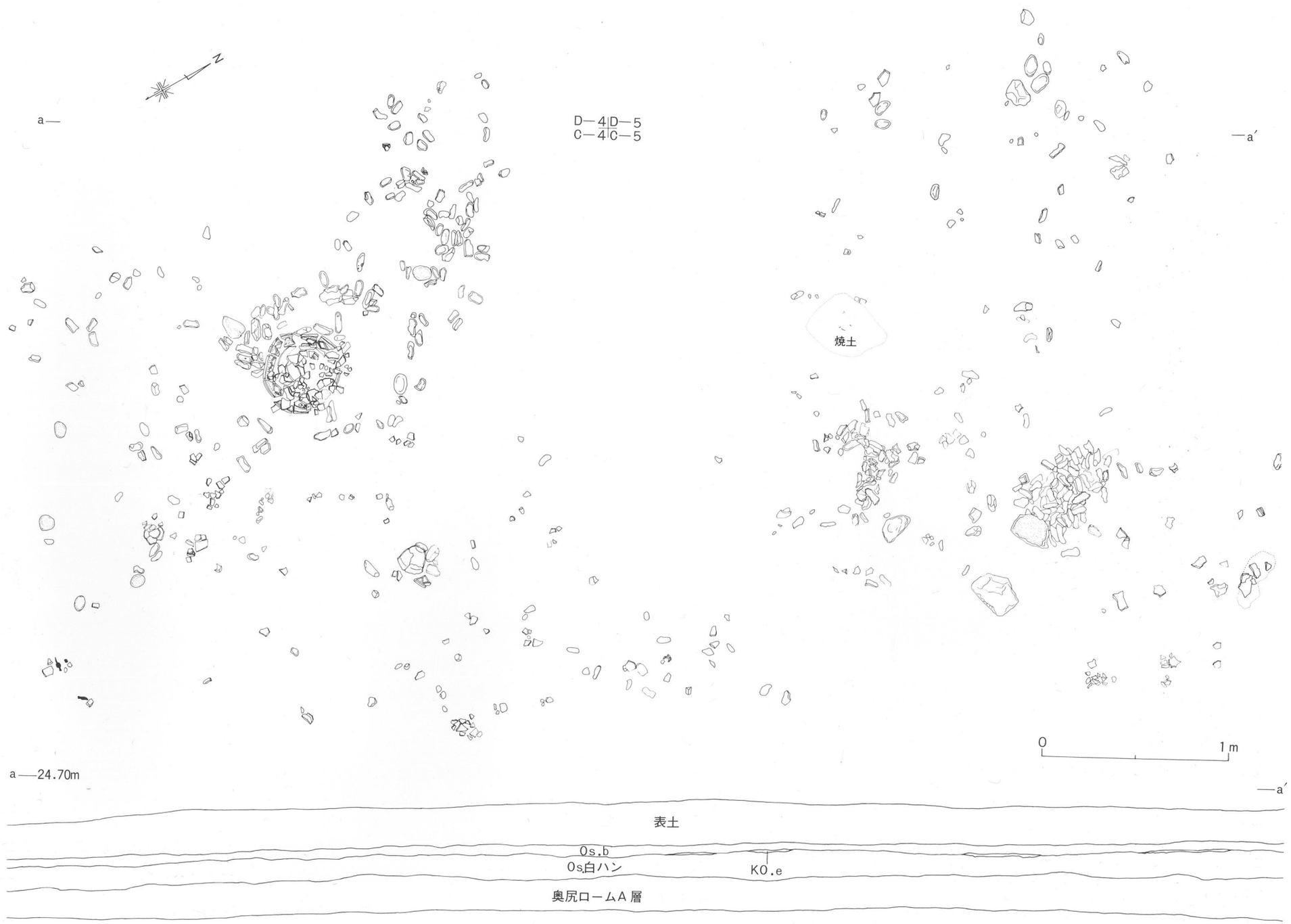


第４図　発掘区の土層断面実測図

凡　例

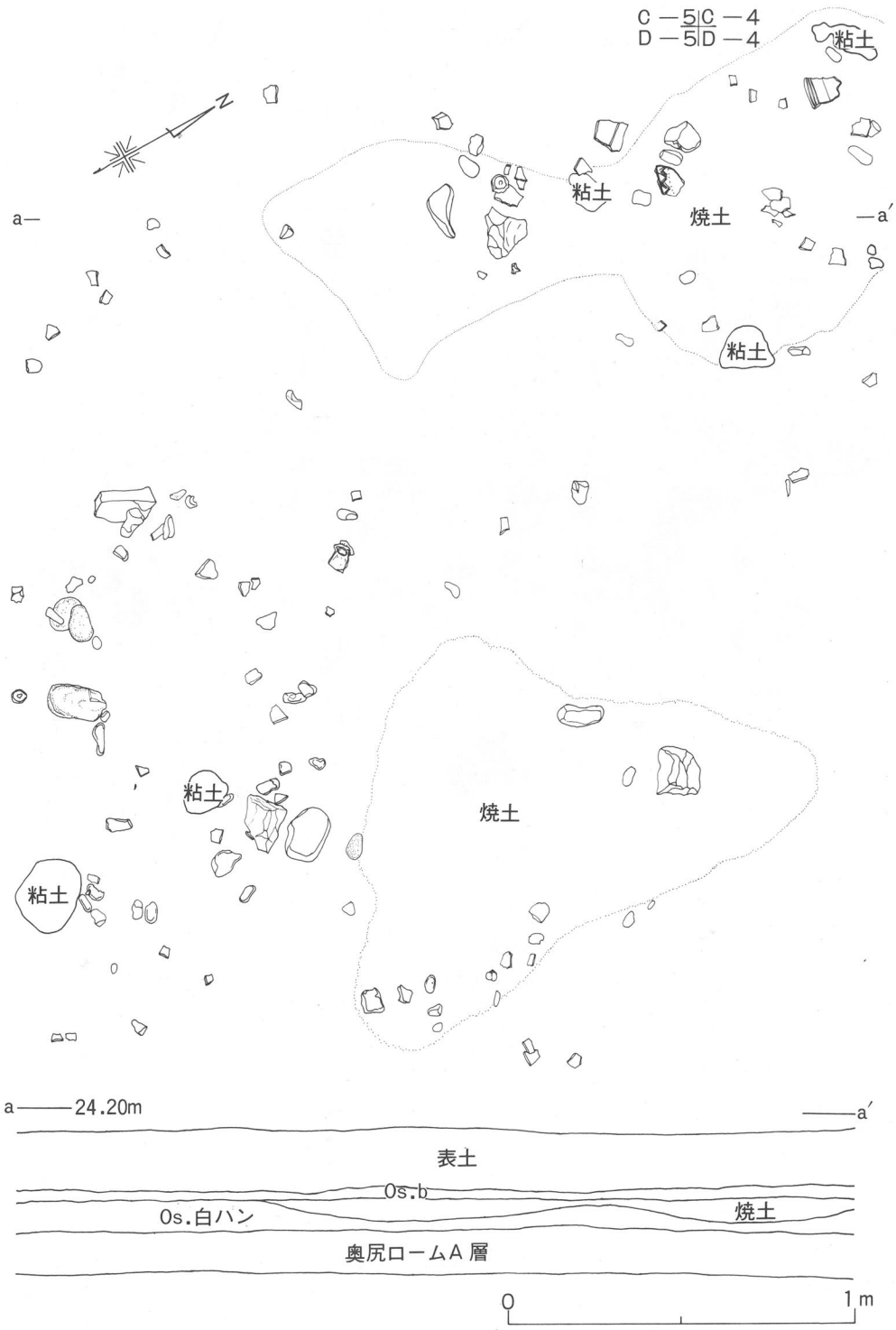
Ⅰ　渡島大島ａ火山灰層（Osa層）
Ⅱ　乙部層
Ⅲ　渡島大島ｂ火山灰層（Osb層）
Ⅳ　駒ヶ岳ｂ火山灰層（Koe層）
Ⅴ　渡島大島白ハン火山灰層（Os白ハン層）
Ⅵ　奥尻ローム　Ａ層
Ⅶ　奥尻ローム　Ｂ層
Ⅷ　奥尻ローム　Ｃ層

第３図　発掘区の概念および土層断面実測の位置図

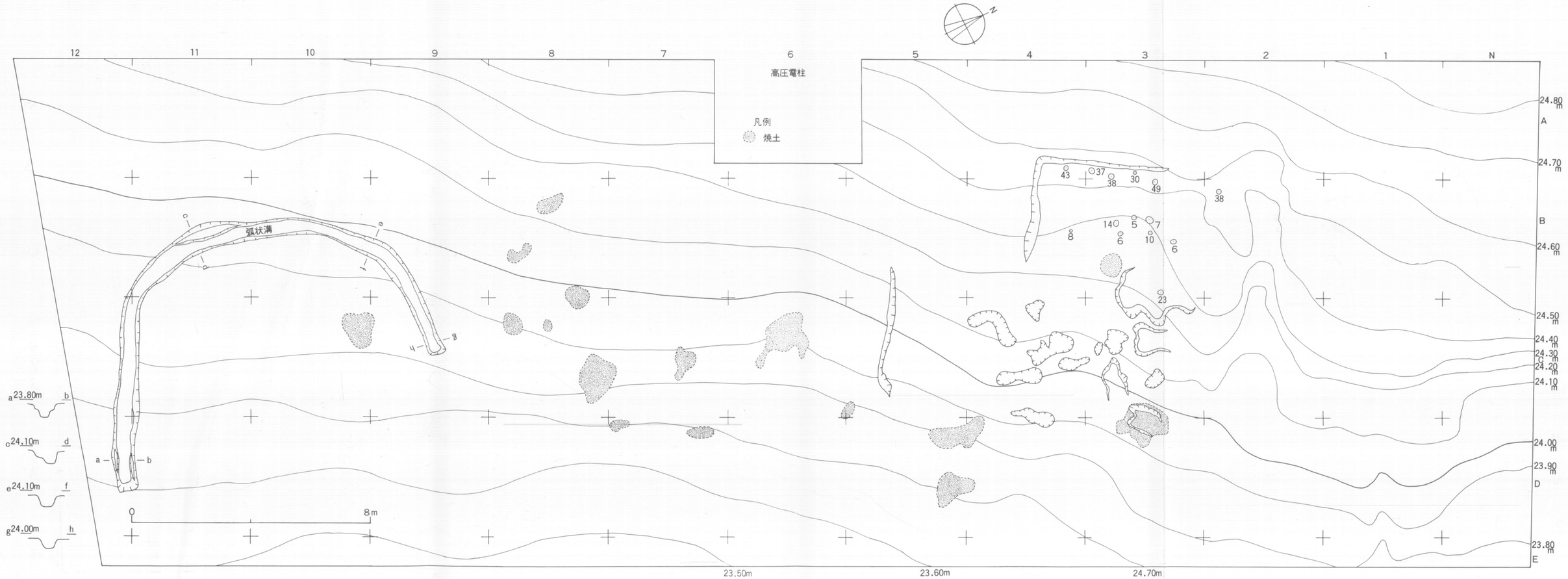


第７図　C,D—４，C,D—５区　配石と遺物の出土状況実測図

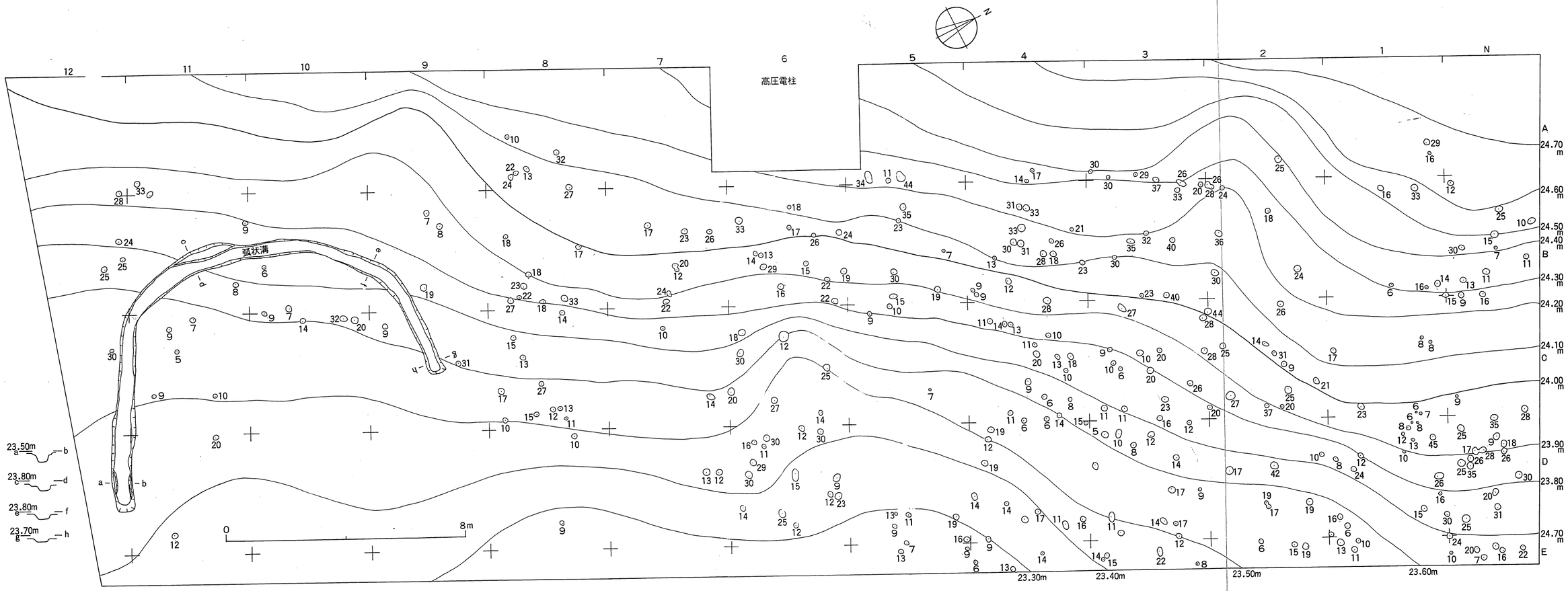
第5図　C－3区　焼土址（1）実測図



第6図　C・D－4，C・D－5区　焼土址（2）実測図



第８図　第１文化層生活址面の遺構実測図



第９図　第２文化層生活址面の柱穴群実測図

焼土の拡がりは，100cm×150cmから30cm×50cmと様ざまで，その周辺から，魚骨，獣骨が焼け，あるいは粉末化し，めり込んだ状態で出土する。また広範囲の焼土の近くには，大低，直径10cm～30cmの白色粘土塊が１～２個置かれている。（第５・６図，第16図版）

焼土の断面はレンズ状であり，広範囲焼土は10cm～15cmの厚さで，赤橙色を呈している。小範囲の焼土でも厚さは１cmを測る。こうした状態は，可なりの高温と相当時間の燃焼が行われたものと解釈でき，その目的は，土器の焼成，鉄の溶解，鍛造などに自ずと限定されてくる。

溶滓，いわゆるスラッグと鉄滓が，(1)Ｃ・Ｄ－１区，(2)Ｃ・Ｄ－３・Ｄ・４区，(3)Ｄ－８・Ｂ・Ｃ・Ｄ－９・Ｃ－10・Ｄ－11区の３ヶ所に集中的に出土する。(1)は塊状の鉄滓230ｇ，溶滓435ｇと羽口を出土した。溶滓の分布から，或いは(2)のものかも知れない。(2)は焼土を取巻いて鉄滓360ｇ，溶滓1225ｇと羽口を出土した。溶滓は小石大のものが殆んどで，分布は鉄滓出土グリッドに濃く，円状に広がり，外縁になるにつれ薄くなる。(3)は鉄滓960ｇ，溶滓593ｇと羽口破片３点を出土した。これらの出土遺物は，何れも焼土とは重複しない。

(2)の焼土はＣ・Ｄ－３区にある。ここでは他の焼土には見られない，土器を投棄したと考えられる現象がある。土器は７個体分が，小片となって，焼土上面にのる。個々は比較的まとまった状態にあり，部分的接合は容易である。しかし，全形を推しうるのは２例のみで，それとて背面を大きく欠き，他は，すべて胴部下半を欠失している。（第11図・第21図版５・７，第12図・第22図版11・19，第13図・21・29，第23図版29，第14図・第24図版37・38）

焼土の平面は，赤銅色に焼けた砂岩，57cm×24cm×８cm・30cm×25cm×７cm・35cm×25cm×10cmの大きさのものが３個あり，火足が北・東・南の方向に延び，十字に似た形をしている。断面はレンズ状で，厚さ13cm，最深部は奥尻ローム層に達する。中央西寄りが少し盛り上っている。（第５図・第９・10図版）

2　石　組　み

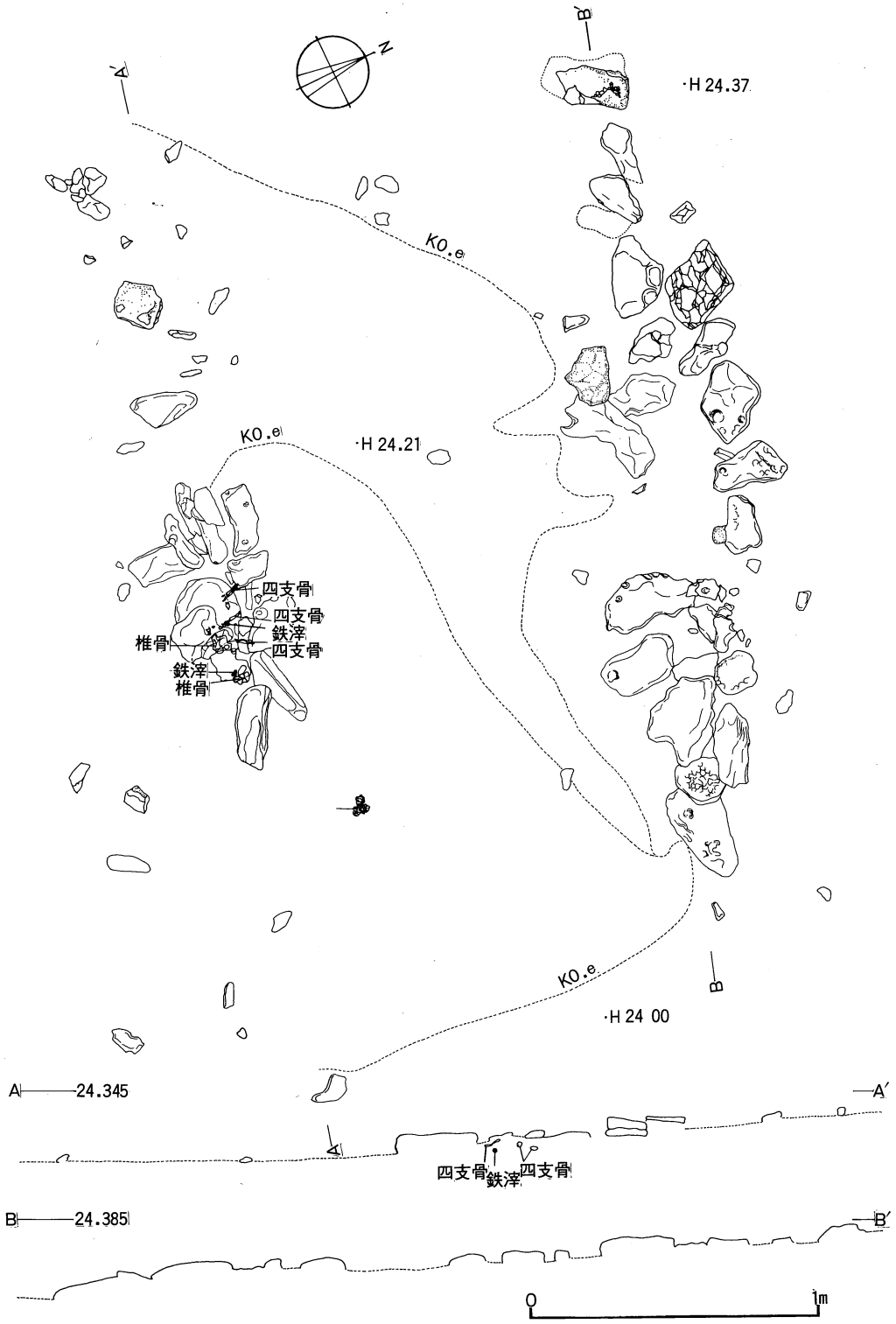
Ｃ・Ｄ－１区に，１ｍの間隔をたもって平行に並ぶ，長方形であったと思われる，二つ石組みがある。北寄りのものは，ほぼ，原形を止めていると見られるが，南のものは，部分的に石組みが残っている。石は大きさ30cm×20cm×10cm前後の凝灰質シルト岩で，２段に重なるか，寄り合っている。

北寄りの石組みは，長軸を大略，東西にとり，長さ２ｍ90cm，幅70cmである。石組みの下は，渡島大島の白ハン層であるが，より腐植に富み，強い黒色を呈している。検出当初，土壙墓と考え，落ち込みに注意を払ったが，顕著な形跡は認められなかった。しかし，石組み下の駒ヶ岳ｅ層が欠失しているので，若干，削り取られていることは確かである。遺物の出土はない。(第10図・第11・12図版）

南寄りの石組みは，多分，２ｍ程度の長さがあったのではないかと思われるが，石組みとなって残っている部分は，長さ１ｍ，幅50cmである。石組み下に，アシカの椎骨２，四支骨３，椎骨２，ともに小片と，小鉄滓２を出土した。壙の掘り込みはない。

南の石組みは，出土遺物から，どのような性格をもつものか判断しかねるが，北のものについては，隣接する山本台地発掘区のＣ－11区で検出された墳墓と，長軸方位，石組みの状態，土壙を掘らないなど共通する点が少なくない。そのＣ－11区では，硬玉製勾玉，切子玉，水晶製平玉，ガラス玉に腰刀を伴った人骨がしている。

また，石組み近くのグリッドから，土製鏡，土製玉などを出土しているので，墳墓あるいは祭祀といったことに関係する遺構である可能性は断ち切れない。



第10図　C・D-1区　石組み実測図

3　弧　状　溝

発掘区の南側に弧状の溝がある。溝はＣ－９区の中央を起点にして，Ｂ－９区に入り，Ｂ－10区の中央を横切って，Ｂ・Ｃ－11・12区の交点までを弧状に，Ｃ・Ｄ－11・12の交点上を直線的に掘り上げた。延長19.8ｍのものである。溝の断面は，口の広いＵ字状で，２ヶ所に壁の上部に崩れが見られる。深さは白ハン層より50cm～60cmあるが，掘り込みは第１文化層からであろうから，６cmほど上積みされることになる。溝底は奥尻ロームＣ層に達しており，その中の充塡土は掘り上げられた各土壌が，流れ込んだ状態にある。上部は多年草の根茎がはびこり，下位は保水性が高く，グライ化し，粘着性の強い凝集状態になっている。

溝内からの出土遺物は，Ｂ－11区溝底から台付浅鉢形土器1個体が出土した。底部にｈ類の刻印をもっている。（第31図版42ｂ）

この溝の弧内，Ｃ－10区に焼土があり，周辺から大型深鉢形土器，台付浅鉢形土器，坏形土器，勾玉の石製模造品，把手，羽口，鉄滓などを出土しているが，溝と鍛治址を結ぶ手立てとなるものとは考えられない。住居の周溝ではないかとも思われ，精査したが，柱穴はなかった。目的・用途については祭祀的可能性が強いもののように思う。

4　竪　穴

Ａ－３・４区とＢ－３・４区の西南に，竪穴の壁と思われる，Ｌ形の落込みが検出された。Ａ列では奥尻ローム層まで土層が攪乱されていたが，部分的に乙部層が残存していたので，輪郭は明瞭に認められた。柱穴は西壁に沿って４個，東の焼土近くに６個ある。柱穴の大きさは10 cm～ 25 cmで，円形あるいは楕円形である。壁の高さは15cm前後で，北と東の端は漸次うすくなり消える。地傾斜を考慮したのであろう[1)]。壁長：東西３ｍ50cm，南北４ｍ50cm。（第８図）

遺物が壁面近くに，比較的まとまった状態で出土した。大型深鉢１，中型深鉢２，台付浅鉢３，坏形1個体である。これは小単位の１セットと見てよいだろう。（第12図・第22図版８・10，第13図・第23図版27，第14図・第24図版33・35・39）

Ｃ－３・４・５区に不規則な楕円状，曲線状の落込みが入り込んでいる。底面はローム層に達するものもある。充填土は大島白ハン層で，遺物は出土しない。焼土に関連するものかも知れない。

（佐藤忠雄）

注

1) 水平を求めて高い部分を削土したもので，竪穴とするより，掘立式住居とした方がよいかも知れない。

Ⅳ．遺　物

1．　第１文化層の出土遺物

1)　土器

第１文化層から出土した，擦文土器の総数は 17187 点で，42個体が完全或いは一部復元できた。

本遺跡から出土した擦文土器の器形は，鉢形，台付浅鉢形，坏形，壺形，甕形，椀形の７種に大別できる。この中で，鉢形土器は，便宜上，口縁部形態が外反，外傾等の変化を明確に判別できる，高さ20cm以上のものを大型深鉢土器，20cm～10cmまでのものを中型深鉢形，10cm以下のものを小型深鉢形とした。中鉢形土器は，底部より口縁までが，直線状に外傾するものと，半球状の脹らみをもっものである。直線状のものは，僅かに外反傾向を示すものも含まれる。半球状のものは，台付浅鉢形の半球状の鉢部（坏部）をもつものと近似する。台付浅鉢形土器は、脚のない坏形土器に包括されるもので，底部の形状は，明らかに脚付坏形土器への移行形態として把えうるものであるが，深鉢形，中鉢形土器底部の成形・整形等に，共通する点もあり，一応，この種のものを分離した。坏形土器は，半球状の坏部をもつものである。壺形土器は，胴部中央に最大径をもつ，提灯形のものと，最大径が胴部下半にあるものの２種がある。甕形土器は，胴部が俵形をした短頸のものである。以上のうち，各部位を計測しうる個体は少なく，凡その傾向が判る程度である。以下に拓影土器 128 点を加えて観察する。各形態は第30図に示した記号で表わす。

大型深鉢形土器

器高：口径は0.8～1.0，器高：胴部最大径1.09～1.23，器高：底径2.48～3.29で，高さの割りに口径の広い，胴部に張りをもった，底の小さな土器といった，器形が窺える。これを更に，変化の多い口縁部形態と口縁部と口頸部との角度についてみると，口縁には，弱く外傾するａが４例，ゆるく外反するｃが４例，強く外反するｄが７例，弱く内反するｅが７例，頸部から一度ゆるく外傾してから立上りを見せ，また，ゆるく外傾するといった３段に変化するｇが４例ある。頸部との角度は 124°～ 155°であり，150°前後に集っている。口唇形態は角状のものと，その面取りしたものが多く，底部は平底で，やゝ括れて立ち上るのが普通であるが，揚げ底気味のものも少なくないようである。

文様は１例を除き，全例，口縁部に施文されている。形態は箆状工具で，口縁上部にのみ沈線を周らすもの，下部にのみ周らすもの，口縁幅を区切るように，上下に施されるもの，上・下部間に各様の短刻線による文様を描出している。横走の沈線文ａは２条から５条で，３条が多く，殆んど口縁上部に段状に施文される。下部には１条から２条のものが見られるが，１条のものは，口縁部と頸部の区切りのようである。この沈線文ａは，箆状工具―薄い板状の―を従位にするか，横位に用いるかで，異った条痕が生じる。工具を立てれば深さがで，比較的はっきりした条ができるが,工具を横にねかし，腹を使ったものは，深さが下方に偏向した，ルーズな段状となる。この手法は、古い時期のものに顕著に見られる。この沈線文と併用，あるいは単独に，刺突文Ｂ・Ｇ・Ｊのような，施文具を従位，斜位に突いた円形，楔形，また，それを押引いて作出したと思われるＤ～Ｉが施文される。

短刻線による文様は，短線がｃのように，連続しない鋸歯状文ｄ～ｇで，３本単位が最も多く，４本単位がそれに次ぐ。

口縁部の上半に文様帯を設けているものがある。この種のものは，ｇ・ｈ・ｉの口縁をもつものに多く見られる。なお，この口縁形態については，先きに３段に変化すると述べたが，明らかに頸部として分離した方がよいｈのタイプもあるが，ｇなどは口縁の一形態とした方が妥当であり，その変化としてｈ，ｉを取扱うことにした。Ｄ―９・Ｃ―12区出土の例から推して，器高に対する口縁幅の比

は大きく，通常のものの２倍はあるものと思われる。

大型深鉢型土器は，口縁形態，文様形態，文様帯から，次のような分類ができる。なお，拓影土器のうち，明確に判断のできないものは除外した。

1) ｄの口縁形態で，口縁幅（文様帯）を区画せず口縁部上半にのみ，横走沈線文を施すもの。（第11図・第21図版５・７，第15図・第25図版５）

2) ａ・ｃ・ｄ・ｅの口縁で，口縁幅を区画し，口縁部上半，あるいは上半・下半の双方に横走沈線文を施すもの。（第11図・第21図版３・４・６，第15図・第25図版９・10・11・12）

3) ａ・ｄ・ｇの口縁形態で，口縁上部と半ばに横走沈線文を施したもの。つまり，下の沈線文が，口縁幅の半ば近くにある，狭い文様帯を区画しているものをいう。（第11図・第21図版１・２，第15図・第25図版13）

4) ｅの口縁形態で，口縁部上半に沈線文を施し，下半に刺突文Ｊを周回させたもの。（第12図・第22図版12）

5) ｄ・ｅの口縁形態で，口縁上半に横走沈線文を周回させ，下半に至る口縁幅一杯に，当該擦文土器の主体的文様要素である，鋸歯状文ｄ・ｅを施したもの（第16図・第26図版29・30・31・32）

6) ｄの口縁形態で，口縁部上半に横走沈線文のみ，あるいは刺突文Ｊを複合させ，下半に横走沈線文，または刺突文Ｊを施文した上・下間に鋸歯状文ｅ・ｆのあるもの。（第13図・第23図版23）

7) ｄの口縁形態で，口縁部上半に横走沈線文を周らし，口縁幅の半ばに，刺突文Ｇを横帯させ，その間に鋸歯状文ｆを施したものである。口縁幅に対して，約½の狭い文様帯を特徴とする。（（第13図・第23図版22，第17図・第27図版55・56・59・60・65）

8) ｇの有段口縁で，上部口縁の上半と下半に横走沈線文を周らし，上・下間に鋸歯状文ｆを施文したもの。第16図・第26図版45・47は，その典型的なものである。

9) 有段口縁ｇ・ｈの上部口縁に，8)の文様に刺突文Ｆ・Ｉが加わったもの。（第13図・第23図版28，第17図・第27図版54・61）

10) ｆの口縁形態で，文様帯が胴部上半に及んでいるもの。口縁上半に刺突文Ｍ・Ｊと横走沈線文，下半に刺突文Ｂを周回し，その間に鋸歯状文ｄを施す。胴部上半に縦位の短刻線をともなった，大柄の矢羽根状文Ｏがあり，下限が横走沈線文で区切られているもの。（第13図・第23図版24）

中型深鉢形土器

器形，文様面で，大型とそう大きな変化はない。口唇部は角がやゝ丸味を帯びたｂと，内面を大きく面取りしたｃが多く，ａ，ｅ，ｈ，ｇ例が若干ある。そのなかで，角形ａの上平面に，１条の沈線がみられる口唇ｈは，口縁の形態が直線的で，外傾するａ，口唇が内反的で外傾するｅに婁々見受けられる。口縁部はｅの形態が約40％，外傾するａ，ｂが25％，外反するｃ，ｄが35％を占める。

口縁部文様は，口縁部上半に３条～４条の沈線文を周らすものが多く，下半部では頚部との区切りに，１条～２条施文されているのが普通である。上・下半間の文様は，２本～３本単位の短刻線で描出した鋸歯状文ｄ・ｅと，２本～３本単位のＸ状文ｉ・ｊを横列させている。稀にａ・ｂ・ｍが施文される。また，第16図・第26図版43にみられる，「小」状に引掻かれなものが１例ある。

器高：口縁部は，大型と同様，口縁部形態により区々である。器高：口径は0.7～0.82で，大型より一段と指数が小さくなるが，器高：底径や口縁部と頚部の角度などは，大略同じである。

中型深鉢形土器の口縁形態，文様形態による分類は，概ね，大型土器に準じている。

1) ａ・ｃ・ｄの口縁形態で，無文のもの。（第15図・第25図版１・２・３・４・19）

2) 帯状の狭い口縁幅をもつ，ｃの口縁形態で，横走沈線の施されているもの。一般にスリムな体部に連続する。中型，小型に多い。（第15図・第25図版16・21・24）

3)　大型の1)に同じ。（第12図・第22図版８・10，第15図・第25図版23）
4)　大型の2)に同じ。（第12図・第22図版９・11，第15図・第25図版６・７・８・14・15・18・27・28）
5)　大型の5)に同じ。（第16図・第26図版29・30・31・32・34・44，第17図・第27図版52・53は刺突文ｃが，口縁上部に加わったもの。）
6)　大型の6)に同じ．刺突文にC・F・G・H・I・Lの形態が加わる。（第16図33・42・43・46・48，第17図・第27図版50・51・57・58・63・64・66）
7)　大型の7)に類似するが，文様帯がやゝ広い。（第17図・第27図版55）
8)　文様形態ｌを施文したもの。（第16図・第26図版37・38・40，同一個体）従位の短刻線ｂを平列させたもの。（第16図・第26図版36）鋸歯状文の谷に「ハ」状文を付したｍの施されているもの。（第16図・第26図版49）

これらは，これまでの青苗遺跡の調査においても出土しているが，数量は少なく，断片的なもので，本遺跡の擦文土器の主体文様である鋸歯状文の様態に影響を与えるものではない。出土状況から，隣接地からの混入も考えられるので一括した。

9)　ｅの口縁形態で，口縁部上半に横走沈線文と刺突文Ｇを施し，下半に横走沈線文，あるいは刺突文G・Ｊを周回させ，上・下間にX状文ｉ・ｊ・Ｋのあるもの。（第17図・第27図版67・68・69）

この種の文様形態は，中型深鉢形，台付浅鉢形に，ほぼ等量に見られるが，土器総体の中での出現瀕度は低い。しかし，施文的発想が鋸歯状文の変化でなく，69の例のように，短刻線を交叉させるということを前提としている点に留意する必要がある。

小型深鉢型土器

器高：口径の指数は中型に近いが，底径との指数は大きい。口唇形態にb・c・eと，器内に張り出し気味の角丸のものがある。口縁部はc・d・e・fの４形態で，文様形態は口縁部上半に2条～４条の横走沈線文を施すだけの簡略なものである。１例ではあるが，笹地を表わす地図記号「小」に似た文様が，引掻かれているものがある。中型深鉢形43と同じ例である。（第16図・第26図版39）

口縁・文様形態により，２分類できる。

1)　大型の1)に該当するもの。（第12図・第22図版16，第13図・第23図版20，第15図・第25図版20・25・26）
2)　中型の2)に該当するもの。（第15図・第25図版17・26，第16図・第26図版39）

中鉢形土器

口縁部が直線状に外傾するａと（第12図・第22図版17，第13図・第23図版21），半球状に近い脹らみのｂ（第12図・第22図版18）の２種がある。口縁部形態の分類は，台付浅鉢形のものを適用する。

17・21は口縁部上半に，１条～２条の横走沈線を施したものである。底部を欠いているが，既存の資料から器高：口径0.7～0.8，器高：底径1.7前後，口径：底径2.0～2.3前後が標準である。器高：口径比は中型深鉢形と変らないが，底径が大きく，より安定している。

18は口縁形態ｂで，半球状に近い鉢形である。底部が括れ，やゝ揚底になっている。器高：口径0.67，器高：底径1.23，口径：底径1.82．前例と異なるのは，底径が器高に極めて接近していること，底径が口径の½を超えている点で，比は小型深鉢形に近似する。台付浅鉢形との対比では，台付の平均値が，器高：口径0.44，器高：底径1.22，口径：底径2.79で，器高：底径がほぼ同比であるほかは，何れも，可なり掛離れた数値を示してている。これは，当然のことながら，本例の口径:器内深が1.44，台付の坏深2.59で，容量にも大きな違いを見せている。

17，18，23の３例の各比は，中型深鉢形と小型深鉢形の中間におかれるものであり，どちらかというと坏よりは鉢形に入れた方がよいだろう。

台付浅鉢形土器

口唇部の形態は，ｃが48％で過半数を占め，深鉢形に多かったｂは23％しか見られない。ａ，ｅは各13％，ｈはａタイプの口縁に１例ある。口縁部はａ～ｄの４形態がある。ａは台部より直線的に外傾するもの。ｂは台部より内反状に立上るものであり，ｃはｂの上半部を弱く外傾させたもの，ｄはｂの上半部を一度，垂直近く立ててから，直線状に外傾あるいは外反させたものである。出現瀕度はｃが40％で最も多く，ｄが33％，ｂが20％で，ａは７％に過ぎない。底部の形態は，括れが強く，約90％がやゝ揚底か，揚底気味になっている。このような器形の各部位の比をみると，器高：口径0.44，器高：底径1.22，口径：底径2.80，口径：坏深2.59，器高：坏深1.13である。通常，擦文土器における高坏形の凡その比は，器高：口径0.52，器高：底径1.40，口径：底径2.70，口径：坏深2.80，器高：坏深1.50――時期，形態を考慮しない――であり[1]，本遺跡のものは，一般に器高に対して口径・底径が大きく，坏深のあることが分る。なお，坏深の数値の開きは，台部が未発達だということもあるが，台部に深く窪む作りのものが多いからでもある。（第14図・第24図版31・32を除く）また，台付浅鉢形土器は，台部からの器の立上りによって，大きく２種に区分できる。１類・器の立上りが35°～40°で，口径：坏深の指数が3.0以上のもの，２類・40°～48°で，指数が2.4～2.6のもの。つまり，1)は体部から口縁に椀状に広がるもので，2)は鉢状に広がるものである。

文様形態は，深鉢形土器と同様，口縁部上半に２条～４条の横走沈線文がみられ，下半には横走沈線文，刺突文を単独に，あるいは併用している。刺突文Ｇの多用が目立つ。上・下間では半数近い47％にｂ～ｇの鋸歯状文，10％にｈ～ｊのＸ状文が施されている。また，上半と下半にのみ横走沈線文と刺突文を施したものが20％あり，上半に横走沈線のみ施したものが16％あるが，拓影図示しなかったものを入れると，10：２の割合で後者が圧倒的に多い。稀少例に鋸歯状文の谷間に短刻線ｂを引いたもの，（第18図・第28図版89・92）ｈを挟んだもの，（第18図・第28図版84）細かな引掻痕と鋸歯状文ｃを，部分的に描出したもの，（第18図・第28図版77）がある。

以下は，器の立上りによって区分した，２種を口縁部，文様形態から分類したものである。

１類

1) 口縁形態ｂで，口縁部上半と下半に横走沈線文を施しているもの。（第14図・第24図版31・32・33）33は小型であるが，同型の35の例とでは，口径：坏深が2.7：2.3で，指数に明らかな相違を示しており，本類に属する。

２類

1) 口縁形態ａで，口縁上半に横走沈線文，直下に鋸歯状文ｅを施したもの。小型土器である。（第14図・第24図版35・38）

2) 口縁形態ｂで，口縁上・下半に横走沈線文を周回し，上・下間にＸ状文ｊを施したもの。（第18図・第28図版78）同94は下半に刺突文Ｇを，同81は上・下間に鋸歯状文ｅと下半に刺突文Ｏを施文した例である。

3) 口縁形態ｃで，口縁部上半あるいは上・下半に，横走沈線文のみを施文するもの。（第18図・第28図版70・71・72・74）本遺跡が立地する山本台地では，これまでの調査で，形態ｂをも含めた，この種のものが，台付浅鉢形の約半数を占めることが，明らかにされている。本調査で，復元された個体はなかったが，出土量は極めて多かった。第14図・第24図版41は口縁部上・下間に横走沈線文・刺突文Ｇを周回し，上・下間に鋸歯状文ｅを施文したもので，40の例は下半に沈線文がなく，上・下半の刺突文Ｇ・Ｈを各２段とした例である。この外に第18図・第28図版79・80のようなＸ状文ｊ，同91の鋸歯状文ｅ・刺突文ｃの文様がある。

4) 口縁形態ｄでは，口縁部上半に横走沈線文，下半に刺突文Ｈを周回し，上・下間に鋸歯状文ｅを施文したものである。（第14図・第24図版39）このほか，拓影資料のなかに，横走沈線文のみ，

それに上・下半の一方，あるいは双方に刺突文A・C・G・N・M・Kを伴った鋸歯状文e～gを加えたものと，X状文を加えたもの，刺突文G・Kのみを，上・下半に施文したものがある

胴部・底部の刻印

台付浅鉢形土器の底面と胴部に，刻印のある底部が21点出土した。第30図に示したように，a～iの9種に分類される。

a) 刻線が周縁に達する十字。（第19図・第29図版110・111）

b) X状に交叉するもので，刻線が周縁に達するもの。（第19図・第27図版13・15・16・17・18・19）と，中央に小さく刻まれるか，周縁に達しないものがある。（同112・114・120・121）

c) 十字状刻線の従線の上部中程に，直角に右折する短線のあるもので，やゝ揚底の窪みの部分に刻まれている。（第19図・第29図版122・126）

d) 十字の交点から，右上の角を3分した上の部分に，短線を派生させたもの。（第19図・第29図版123）

e) 周縁に達する従線のほぼ中央から，左右45°の方向に，2本の短線を分枝させたもの。（第19図・第29図版125）

f) 十字の交点から，左上と右下の角を，ほぼ2分して，それぞれに短線を分枝したもの。（第14図37）

g) 周縁に達する従線を3分した点から，上の左右，下の左右45°方向に，短線を分枝させたもの。（第19図・第29図版127）

h) gの従線を2本，分枝線を3本単位にしたもの。（第24図版42b）

i) 格子目状の刻線のあるもの。（第19図・第29図版28）

胴部に施文されたのが1例ある。第14図34で，刻印はb)である。また，例外的なものとして，大型深鉢形の底面にb)の刻印が認められるものがある。（第13図・第23図版24）

本調査以前の青苗遺跡からは，58個体分の刻印のある底部が出土しており，河野本通により，22種類に分類されている。[2] これで，新資料として，a)・c)・d)・i)の4種が追加される。

椀形，浅鉢形（台付浅鉢形）土器の底面に，刻印のある例は，江差町法華坂，乙部町元和8遺跡，小平町オピラウシュペツ遺跡，天塩町豊富遺跡から出土している。そのうち，元和，法華坂のものが土器の器形，刻印の状態から，本遺跡のものと近似する。恐らく同時期のものであろう。豊富の例は器形，伴出土器の文様等から，青苗より時間的に下るものと見られ，刻印の形態などから，オピラウシュペツよりも新しいと思われる。オピラウシュペツの例は，刻印のある土器底面の写真から推して，短刻線の交叉や分枝は，基本的に青苗の類型に属するものと考えられるが，主線と対照的に短線を配置するなどの変化が見られる。また，器形面でも口縁形態，坏部と台部の作りは，青苗のものと全く変らない。相違する点は，台部の底面が顕著な揚底となり，高坏化しているものが見受けられることと，伴出した深鉢形土器の文様形態が，本調査で新しいものとした，第13図24の土器と共通する要素――胴部の矢羽根状文，それを従割りする直線――をもっているが，青苗の主体である鋸歯状文が認められないことなどである。簡潔にいって，青苗より新しいが，台付より高坏への推移体系を縦軸に，刻印を地縁的横軸とした場合，青苗とは発系的線上で把えられるといえるだろう。

土器底面の刻印のほかに，胴部あるいは底部の外面に，刻印様のものを施文した例がある。本調査でも胴部にX状のもの1点，口縁部に小状のもの2点，連続山形1点があり，以前の調査でも坏形土器底部近くに，X状・楔状1点が出土している。同類は天塩町川口基線遺跡にもみられる。これらの中で，土器底面の刻印と同義的に考えられるのは，X印を例にとれば，単一型のパターンを展開させないものがそうであり，X印を反覆，連続したり，刺突文のような異なる要素が組み入れら

図番号	図版番号	遺物番号	器形	色調	出土区	層位	出土レベル(m)	口唇部形態	口縁部形態	底部形態	口縁部文様形態 上	口縁部文様形態 中	口縁部文様形態 下	胴部文様形態	口縁幅(mm)	文様幅(mm)	調整痕	高さ(mm)	口径(mm)	胴最大幅(mm)	底径(mm)	高さ/口径	高さ/口縁幅	高さ/胴最大幅	高さ/底径	口径/底径	口縁部と頸部の角度	備考
第11図－1	第21図版－1	9861	大型深鉢	暗赤褐色	C－10	Ⅲ	23.70～23.85	d	c	BⅠ	a・4		a・2		55	55	p	280	275	227	－	1.02	5.09	1.23	－	－	155°	CO.多量付着(口縁部内面)
2	2	9123	〃	にぶい黄褐色	C－8	〃	23.70～23.95	c	d	－	a・3		a・2		40	40	b，s	－	263	215	－	－	－	－	－	－	152°	
3	3	1038	〃	にぶい橙色	A－10	〃	24.05～24.30	b	d	BⅡ	a・3		a・1		45	45	s	216	246	190	87	0.88	4.80	1.14	2.48	2.83	150°	CO.付着(口縁部内面)
4	4	15801	〃	にぶい褐色	D－10	〃	23.50～23.70	b	a	AⅢ	a・2		a・1		30	30	b，s	215	213	185	76	1.01	7.17	1.16	2.83	2.80	150°	CO.付着(胴部外面)
5	5	12365	〃	〃	D－3	〃	23.70～23.95	b	d	－	a・2				45	20	s	－	260	200	－	－	－	－	－	－	160°	
6	6	5342	〃	にぶい黄褐色	C－N	〃	23.80～24.05	b	e	CⅢ	a・3		a・1		40	15	s	205	257	212	82	0.80	5.13	0.97	2.50	3.13	153°	
7	7	12213	〃	灰黄褐色	D－3	〃	23.70～23.95	a	d	－	a・3				30	12	b，s	－	283		－	－	－	－	－	－	145°	CO.多量付着(口唇内周)
第12図－8	第22図版－8	2408	中型深鉢	明黄褐色	B－3	〃	24.20～24.45	d	e	BⅢ	a・2				35	15	b，s	190	250	182	78	0.76	5.43	1.04	2.44	3.21	153°	
9	9	9081	〃	灰褐色	C－8	〃	23.70～23.95	c	d	BⅠ	a・2		a・1		35	35	b	136	166	132	54	0.82	3.89	1.03	2.52	3.07	150°	
10	10	2397	〃	にぶい黄褐色	B－3	〃	24.20～24.45	b	e	AⅢ	a・2		a・1		19	19	b，s	114	164		64	0.70	6.00	－	1.58	2.56	165°	CO.少量付着(口縁部外面
11	11	12442	〃	赤褐色	D－3	〃	23.70～23.95	a	a	－	a・2				26	15	b	－	168		－	－	－	－	－	－	147°	
12	12	9922	大型深鉢	明褐色	C－10	〃	23.70～23.85	a	e	BⅠ	a・3		J		50	50	s	276	302	233	82	0.91	5.52	1.18	3.29	3.60	125°	CO.付着(内)
13	13	14947	壺	橙色	D－3	〃	23.50～23.70	b	d	AⅠ	a・2				45	15	b，s	316	180	278	125	1.76	7.02	1.14	2.53	1.44	110°	
14	14	7542	〃	にぶい黄橙色	C－5	〃	23.80～24.15	a	b	－	a・2				35	10	s	－	148	155	－	－	－	－	－	－	125°	
15	15	2386	坏	にぶい褐色	B－5	〃	24.20～24.45	h	b	－	a・1				10	10	b	－	81		－	－	－	－	－	－	°	
16	16	10644	小型深鉢	にぶい黄褐色	C－12	〃	23.70～23.85	c	e	AⅠ	a・3				15	10	b，s	76	110		53	0.69	5.07	－	1.43	2.08	160°	
17	17	2513	小型深鉢	灰褐色	B－4	〃	24.15～24.40	a	a	－	a・2				27	15	s	－	150		－	－	－	－	－	－	170°	
18	18	13411	中鉢	にぶい黄褐色	D－6	〃	23.55～23.75	c	b	BⅢ	a・3				22	15	b	76	113		62	0.67	3.45	－	1.23	1.82	°	
19	19	12399	甕	橙色	D－3	〃	23.70～23.95	b	d	AⅠ	a・1		a・1		26	26	b，s	145	115	120	80	1.26	5.58	1.21	1.81	1.44	136°	
第13図-20	第23図版-20	9411	小型深鉢	にぶい褐色	C－8	〃	23.70～23.95	b	d	－	a・3				20	12	b，s	－	133	105	－	－	－	－	－	－	151°	
21	21	6735	中鉢	〃	C－3	〃	23.95～24.25	a	a	－			a・1		10	10	s	－	100		－	－	－	1.15	－	－		
22	22	2412	大型深鉢	灰褐色	B－3	〃	24.20～24.45	e	d	CⅠ	a・4	f	G		44	44	b，s	262	302	227	82	0.87	5.95	－	3.20	3.68	145°	CO.付着(頸部外面)
23	23	7429	〃	赤褐色	C－4	〃	23.90～24.15	a	d	－	a・3 G	P	J		72	72	s	－	360	275	－	－	－	－	－	－	124°	
24	24	5577	〃	にぶい赤褐色	C－N	〃	24.05～24.45	b	e	BⅠ	M，a・1，J	J，d	B	O，a・1	55	118	b，s	266	296	244	92	0.90	4.84	1.09	2.89	3.22	153°	底部刻印b有り
25	25	3225	坏	にぶい黄褐色	B－6	〃	24.00～24.25	b	b	AⅠ							b	35	60		40	0.58	－	－	0.88	1.50		
26	26	10153	〃	灰黄褐色	C－11	〃	23.70～23.85	c	b	AⅠ							b，s	46	96		46	0.48	－	－	1.00	2.09		
27	27	2417	〃	にぶい橙色	B－3	〃	24.20～24.45	c	b	－							b，s	41	82		37	0.50	－	－	1.11	2.22		油脂痕(内)
28	28	11767	大型深鉢	にぶい褐色	D－2	〃	23.80～24.05	h	g	－	a・4	f	a・2，G		94	55	b，s	－	305		－	－	－	－	－	—	127°	
29	29	12683	外耳土器	橙色	D－4	〃	23.60～23.95	－	－	－							b，s	－	－		－	－	－	－	－	－		
30	第23図版-30	7061	台付浅鉢	褐色	C－4	Ⅲ	23.90～24.15	b	a	BⅢ	a・1			J	10	20	s	45	81	36	40	0.56	1.25	2.25	2.03	1.13	油脂痕(口縁内面)	
第14図-31	第24図版-31	13213	〃	〃	D－6	〃	23.55～23.75	b	b	BⅢ	a・3		a・1		30	30	s	56	149	55	47	0.38	1.02	2.71	3.17	1.19		
32	32	15999	〃	黒褐色	D－11	〃	23.50～23.70	c	b	AⅠ	a・3		a・1		27	27	b，s	67	167	50	55	0.40	1.34	3.34	3.04	1.22		
33	33	2316	〃	にぶい褐色	B－3	〃	24.20～24.45	c	b	BⅢ	a・2				13	13	b，s	44	105	52	39	0.42	0.85	2.02	2.69	1.13		
34	34	7136	〃	灰褐色	C－4	〃	23.90～24.15	c	b	CⅢ	a・6	f			45	45	b，s	80	182	60	74	0.44	1.33	3.03	2.46	1.08	胴部刻印b	
35	35	2398	〃	にぶい橙色	B－3	〃	24.20～24.45	c	a	BⅢ	a・3	e，j	B		27	27	b，s	59	118	52	51	0.50	1.13	2.27	2.31	1.16		
36	36	7212	〃	にぶい黄褐色	C－4	〃	23.90～24.15	h	a	CⅢ	a・3	f	G		35	35	s	77	186	64	69	0.41	1.20	2.91	2.70	1.12		
37	37	12266	〃	にぶい黄橙色	D－3	〃	23.70～23.95	b	b	BⅢ	a・3	e	G		27	27	b，s	75	168	58	69	0.45	1.29	2.90	2.43	1.09	底部刻印f	
38	38	12193	〃	黒褐色	D－3	〃	〃	b	a	－	a・3	f			27	27	b，s	－	165	－	－	－	－	－	－	－		
39	39	2365	〃	にぶい褐色	B－3	〃	24.20～24.45	c	d	CⅢ	a・2	e	H		27	27	b，s	71	162	55	65	0.44	1.29	2.95	2.49	1.09		
40	40	10044	〃	灰褐色	C－11	〃	23.70～23.85	c	c	CⅢ	a・2，G，H	e	G，H		27	27	b	73	160	47	63	0.46	1.55	3.40	2.54	1.16		
41	41	9079	〃	にぶい黄橙色	C－8	〃	23.70～23.95	b	c	CⅢ	a・4，G	e	G		27	27	s	73	173	60	66	0.42	1.22	2.88	2.62	1.11		
－	42	17011	〃	にぶい黄褐色	B－11	溝底	23.85～24.05	c	b	CⅠ	a・3		a・1		23	23	b	75	149	65	57	0.50	1.15	2.29	2.61	1.32	底部刻印h	

第Ⅰ表　第Ⅰ文化層の実測土器一覧表

れたものは，特殊な別の意味をもつものかも知れない。

こうした刻印のある台付浅鉢形，高坏形土器を出土する遺跡は，いまのところ，北海道の日本海沿岸に偏在している。青森県下北地方にも類例の出土があると仄聞するが，未だ確認していない。これは台付浅鉢形土器の出自に係わる問題でもある。

刻印のもつ意味については，アイヌ文化の中で，食器や漆器に彫られた，所有印である「シロシ」や祖系を表現した「イトクパ」に似るが，現段階で刻印とを積極的に結び付ける根拠はない。

坏形土器

復元されたのは，第12図・第22図版の15，第13図版・第23図版25・26・27・30の５個体である。断片的な口縁部資料の中には，杯形のものと思われるものが13点ほどあるが，不確実であり除外した。

口唇形態は角状のａ，または角丸のｂである．口縁形態は直状に外傾するａ，内反状のｂとあるが，球状のものもある。口縁部の文様は２例に見られる．15の横走沈線文のあるものと，横走沈線文と刺突文Ｊを施した30である。底部は括れが少なく，平らである。27は台部と体部が連続している。27の口縁部に１ヶ所，30に２ヶ所，対の貫通孔がある。この両者の内面には，油脂様の焼痕が付着している。なお30の内面全体に刺突文Ｊが描かれている。

壺形土器

Ｃ―10区とＣ―５区より１個体出土した。口唇は角丸，口縁形態はｄで外反する。胴部は下半部がやや痩せるが，全球体状である。底部は平坦で弱く括れる。文様は口縁部上半に２条の横走沈線文が周らされている。器面の調整は，頚部および底部付近を篦で，他を刷毛によっている。器厚は４～５㎜で薄く，いわゆる紐造りによる成形である。色調は橙色で焼成はよい。もう１例は口唇が角形，口頚部より強く外傾する口縁をもつ。体部の下半に最大径がある。文様は口縁部上半に横走沈線文が施される。底部を欠失している。色調はにぶい黄橙色で，内外面に篦と刷毛目の調整痕が見られる。（第12図・第22図版13・14）

出土土器の中で，色調が橙色を呈するものは，他に甕形土器，外耳土器，坏形土器，（第13図27）深鉢形土器（第11図３）各１個体ある。拓影土器の中にも第15図21・27のような橙色を呈するものが数点ある。これらは概して，擦文的でない器形のものである。

甕形土器

Ｄ―３区の焼土址から出土した１例である。口唇は角丸で，口縁部は強く外反する。体部は俵状に脹らむ。底部は括れがない。文様は口縁部上半に横走沈線文が１条施され，体部の境いに篦により段差がつけられている。胴部に縦位の刷目による調整痕がみられる。色調は橙色である。（第12図・第22図版19）

外耳土器

Ｄ―４区と一部Ｄ―３区の焼土周辺より，外耳と底部が断片的に出土した。口唇は角丸，口縁部は短かく，強く鍔状に外反する。底部の側面観は卵形状の円底，器口は楕円形である。把手の外耳部は篦けずり，器内に横位の刷毛目の調整痕がある。色調は橙色。（第13図・第23図版29）

（佐藤忠雄）

注

1) 藤本　強　1972　「常呂川下流域の擦文土器について」『常呂』Ｐ419～420より筆者が算出した。

2) 河野本通　1981　「擦文式土器底部の刻印について」『奥尻島青苗遺跡』（本文編）

第２表　第１文化層の拓影土器一覧表

図番号	図版番号	遺物番号	器形	部位	色調	出土区	層位	出土レベル(m)
第15図－1	第25図版－1	2852	中型深鉢	口縁部～胴部	灰褐色	B－6	Ⅲ	24.00～24.25
2	2	12137	〃	〃	にぶい褐色	D－3	〃	23.70～23.95
3	3	2860	〃	〃	にぶい赤褐色	B－6	〃	24.00～24.25
4	4	12573	〃	口縁部	にぶい褐色	D－4	〃	23.64～23.90
5	5	8535	大型深鉢	〃	〃	C－7	〃	23.70～24.00
6	6	6671	中型深鉢	〃	〃	C－3	〃	23.95～24.25
7	7	12880	〃	〃	灰褐色	D－5	〃	23.60～23.85
8	8	6428	〃	〃	褐灰色	D－2	〃	24.05～24.30
9	9	16558	大型深鉢	口縁部～頸部	にぶい赤褐色	E－4	〃	23.65
10	10	13164	〃	〃	明赤褐色	D－6	〃	23.55～23.75
11	11	12135	〃	〃	にぶい橙色	D－3	〃	23.70～23.95
12	12	3597	〃	口縁部	〃	B－8	〃	23.95～24.15
13	13	2828	〃	口縁部～頸部	灰褐色	B－6	〃	24.00～24.25
14	14	11737	中型深鉢	口縁部	黒褐色	D－2	〃	23.80～24.05
15	15	4873	〃	口縁部～頸部	にぶい赤褐色	B－12	〃	23.85～24.00
16	16	9057	〃	〃	灰褐色	C－8	〃	24.70～23.95
17	17	4436	小型深鉢	〃	にぶい赤褐色	B－11	〃	23.85～24.05
18	18	2308	中型深鉢	口縁部	橙色	B－3	〃	24.20～24.45
19	19	3438	〃	口縁部～頸部	灰褐色	B－7	〃	24.00～24.20
20	20	12146	小型深鉢	〃	〃	D－3	〃	23.70～23.95
21	21	1831	中型深鉢	〃	橙色	B－2	〃	24.20～24.45
22	22	707	小型深鉢	〃	明赤褐色	A－6	〃	24.30
23	23	6994	中型深鉢	〃	灰褐色	C－4	〃	23.90～24.15
24	24	13911	〃	口縁部	灰黄褐色	D－7	〃	23.50～23.70
25	25	11329	小型深鉢	口縁部～胴部	にぶい橙色	D－1	〃	23.85～24.10
26	26	6681	〃	〃	灰褐色	C－3	〃	23.95～24.25
27	27	1295	中型深鉢	口縁部	橙色	B－N	〃	24.45～24.65
28	28	7948	〃	〃	〃	C－6	〃	23.75～24.00
第16図-29	第26図版-29	8523	大型深鉢	〃	灰褐色	C－7	〃	23.70～24.00
30	30	7955	〃	〃	にぶい黄橙色	C－6	〃	23.75～24.00
31	31	1831	〃	口縁部～頸部	〃	B－2	〃	24.20～24.45
32	32	1846	〃	〃	黒褐色	B－2	〃	〃
33	33	4927	中型深鉢	口縁部	〃	B－12	〃	23.85～24.00
34	34	3440	〃	〃	灰黄褐色	B－7	〃	24.00～24.20

口唇部形態	口縁部形態	口縁部文様形態			口縁幅(mm)	文様幅(mm)	調整痕	備考
		上	中	下				
c	d				25		b, s	CO少量付着(内, 外)
b	d				27		b, s	CO微量付着(外)
c	a				26		b, s	CO少量付着(外)
h	a				—		b, s	CO微量付着(外)
e	a	a.2			70	10	b, s	
e	e	a.3			—	15	b, s	CO少量付着(口唇外周)
a	e	a.3		a.2	40	40	s	CO多量付着(内, 外)
b	d	a2			50	22	b, s	
e	d	a.4		a.1	45	43	b, s	CO付着(内)
b	a	a.3			60	20	b, s	補修孔(径3mm)
a	c	a.3		a.1	45	45	s	CO微量付着(内)
e	e	a.3			45	13	b, s	CO付着(内)
b	g	a.4		a.3	80	55	b, s	CO少量付着(外)
h	e	a.4		a.2	50	50	b, s	CO多量付着(内)
e	e	a.2			37	14	b, s	CO付着(内, 外), 補修孔(径4mm)
c	c	a.3			34	15	s	
e	f	a.3			18	7	s	
e	d	a.4			35	24	b	
g	c				40	26	s	CO微量付着(外), 補修孔(径5mm)
b	e	a.2			18	9	s	
b	e	a.3		a.1	30	30	s	
c	d	a.4			28	15	b	CO微量付着(内)
c	d	a.4			46	20	b, s	〃
h	a	a.3	a.1		40	25	b, s	
c	c	a.2			35	10	b, s	CO付着(内)
e	c	a.2	a.1		27	14	s	
c	e	a.3		a.1	46	46	b	
h	g	a.2	a.2		51	23	b, s	補修孔(径4mm)
h	e	a.5	d		—	—	s	
b	e	a.5	d		—	—	b, s	
b	c	a.3	e		65	40	b, s	
a	e	a.4	e		60	60	b, s	
b	e	a.4	d	a.1	40	40	b, s	CO付着(内, 外)
a	e	a.4	c		44	36	b	CO微量付着(外)

図番号	図版番号	遺物番号	器形	部位	色調	出土区	層位	出土レベル(m)
第16図-35	第26図版-35	12911	大型深鉢	口縁部～頸部	黒褐色	D－5	Ⅲ	23.60～23.85
36	36	16260	中型深鉢	口縁部	褐灰色	E－1	〃	23.80
37	37	2424	〃	〃	にぶい褐色	B－4	〃	24.15～24.40
38	38	2430	〃	〃	灰褐色	B－4	〃	〃
39	39	16562	小型深鉢	口縁部～胴部	にぶい褐色	E－4	〃	23.65
40	40	7462	中型深鉢	口縁部	灰褐色	C－5	〃	23.80～24.15
41	41	1857	大型深鉢	〃	にぶい赤褐色	B－2	〃	24.20～24.45
42	42	73	〃	〃	にぶい褐色	A－1	〃	24.60～24.85
43	43	16655	中型深鉢	〃	灰褐色	E－5	〃	23.80
44	44	10536	〃	〃	にぶい赤褐色	C－12	〃	23.70～23.85
45	45	12155	大型深鉢	口縁部～頸部	にぶい橙色	D－3	〃	23.70～23.95
46	46	4913	中型深鉢	〃	灰褐色	B－12	〃	23.85～24.00
47	47	15454	大型深鉢	〃	褐色	D－9	〃	23.50～23.70
48	48	14839	中型深鉢	口縁部～頸部	にぶい褐色	D－8	〃	〃
49	49	1870	〃	〃	灰褐色	B－2	〃	24.20～24.45
第17図-50	第27図版-50	5249	〃	口縁部	黒色	C－N	〃	24.05～24.45
51	51	5250	〃	〃	〃	C－N	〃	〃
52	52	12885	〃	〃	にぶい黄褐色	D－5	〃	23.60～23.85
53	53	13844	〃	口縁部～頸部	暗赤褐色	D－7	〃	23.50～23.70
54	54	1953	大型深鉢	口縁部～胴部	にぶい橙色	B－12	〃	23.85～24.00
55	55	5796	中型深鉢	〃	灰黄褐色	C－1	〃	24.10～24.45
56	56	10536	大型深鉢	〃	にぶい褐色	C－12	〃	23.70～23.85
57	57	9942	中型深鉢	口縁部	灰褐色	C－9	〃	23.70～23.90
58	58	4439	〃	〃	にぶい赤褐色	B－11	〃	23.85～23.05
59	59	6396	大型深鉢	〃	灰黄褐色	C－2	〃	24.05～24.30
60	60	6693	〃	〃	灰褐色	C－3	〃	23.95～24.25
61	61	9845	〃	口縁部～胴部	にぶい橙色	C－10	〃	23.90～23.85
62	62	1297	〃	口縁部	灰褐色	B－N	〃	24.45～24.65
63	63	12912	中型深鉢	〃	にぶい赤褐色	D－5	〃	23.60～23.85
64	64	15952	〃	口縁部～頸部	〃	D－11	〃	23.50～23.70
65	65	12140	大型深鉢	〃	灰褐色	D－3	〃	23.70～23.95
66	66	10599	中型深鉢	〃	暗赤褐色	C－12	〃	23.70～23.85
67	67	9009	〃	口縁部	にぶい赤褐色	C－8	〃	23.70～23.95
68	68	12920	〃	〃	〃	D－5	〃	23.60～23.85

口唇部形態	口縁部形態	口縁部文様形態 上	中	下	口縁幅(mm)	文様幅(mm)	調整痕	備考
c	e	a.4	f	a.2	58	58	b	ＣＯ付着(外)
c	e	a.3	b		—		b	
f	e	a.4	m		—		b	ＣＯ付着(外)
			ℓ		—		b	
f	c	a.3			30	15	b，s	
e	e	a.4	m		—	—	b，s	ＣＯ微量付着(内)
b	e	a.3	e		45	45	b，s	
c	a	a.5	f	a.1	54	54	b，s	
c	c	a.4	e	a.2	45	45	b，s	
		a.3	c		—	—	b	
e	h	a.3	e	a.1	41	41	b，s	ＣＯ多量付着(内)
b	b	a.4	e		45	45	b，s	ＣＯ付着(内，外)
a	g	a.4	e	a.2	44	44	b，s	ＣＯ付着(外)
a	e	a.3	n	a.3	30	30	b，s	ＣＯ付着(内，外)
b	d	a.4	o		40	40	b，s	ＣＯ微量付着(内)
b	a	a.1，B	d	a.2	53	53	b，s	ＣＯ多量付着(内，外)
b	a	a.1，B	d	a.2	46	46	b，s	〃
e		a.5，G	e		—	—	b，s	ＣＯ付着(内)
e	e	a.4，B	e		50	50	b，s	ＣＯ多量付着(内)
	f		e	a.3，G	—	—	b，s	ＣＯ微量付着(内)
b	d	a.2	f	A	50	35	b，s	ＣＯ多量付着(内)
h	b	a.4	f	a.1，I	92	60	b，s	ＣＯ少量付着(口唇外周)
b	e	a.4	d	a.2，J	—	—	b，s	ＣＯ多量付着(口唇外周，内)
a	a	a.2，J	e		—	—	b，s	ＣＯ付着(外)
h	a	a.3	f	a.2，G	—	52	b，s	ＣＯ微量付着(口唇外周)
e	h	a.4，F	e	E	52	52	b，s	ＣＯ少量付着(外)
c	i	a.3，F	e	a.2，E	50	46	b，s	
c	e	a.3，D	e	D	56	56	b，s	
f	a	a.5，E	e	a.2，E	48	48	b，s	ＣＯ多量付着(内)
c	d	a.4，H	e	G	45	45	b，s	〃
b	g	a.4	e，j	a.2，C	56	56	b，s	ＣＯ微量付着(外)
c	c	a.3，C	e	C	45	45	b，s	
b	e	a.4，G	j		—	—	b，s	
b	e	a.4，G	j	G	53	53	b，s	補修孔(径４mm)

図番号	図版番号	遺物番号	器形	部位	色調	出土区	層位	出土レベル(m)
第17図-69	第17図版-69	6421	中型深針	口縁部～胴部	暗赤褐色	C－2	Ⅲ	24.05～24.30
第18図-70	第18図版-70	12165	台付浅鉢	〃	にぶい褐色	D－3	〃	23.70～23.95
71	71	12168	〃	〃	にぶい黄橙色	D－3	〃	〃
72	72	9851	〃	〃	褐灰色	C－10	〃	23.70～23.85
73	73	10612	〃	〃	灰黄褐色	C－12	〃	〃
74	74	12895	〃	〃	にぶい赤褐色	D－5	〃	23.60～23.85
75	75	1314	〃	〃	暗赤褐色	B－N	〃	24.45～24.65
76	76	12168	〃	〃	橙色	D－3	〃	23.70～23.95
77	77	12260	〃	〃	にぶい赤褐色	E－1	〃	23.80
78	78	7059	〃	〃	黒褐色	C－4	〃	23.90～24.15
79	79	4453	〃	〃	灰黄褐色	B－11	〃	23.85～24.05
80	80	10574	〃	〃	にぶい黄橙色	C－12	〃	23.70～23.85
81	81	13177	〃	〃	にぶい褐色	D－6	〃	23.55～23.75
82	82	2866	〃	口縁部	にぶい赤褐色	B－6	〃	24.00～24.25
83	83	13180	〃	〃	黒褐色	D－6	〃	23.55～23.75
84	84	12908	〃	〃	にぶい黄褐色	D－5	〃	23.60～23.85
85	85	2578	〃	口縁部～頸部	灰黄褐色	B－5	〃	24.05～24.40
86	86	8576	〃	口縁部	にぶい黄褐色	C－7	〃	23.70～24.00
87	87	1900	〃	口縁部～胴部	明黄褐色	B－2	〃	24.20～24.45
88	88	171	〃	口縁部	〃	A－2	〃	24.45～24.75
89	89	2869	〃	〃	黒褐色	B－6	〃	24.00～24.25
90	90	11130	〃	口縁部～胴部	にぶい黄褐色	D－1	〃	23.85～24.10
91	91	7522	〃	〃	黒褐色	C－5	〃	23.80～24.15
92	92	13187	〃	口縁部	〃	D－6	〃	23.55～23.75
93	93	10615	〃	〃	灰黄褐色	C－12	〃	23.70～23.85
94	94	2423	〃	口縁部～頸部	にぶい黄褐色	B－4	〃	24.15～24.40
95	95	4464	〃	〃	黒褐色	B－11	〃	23.85～24.05
96	96	8571	〃	〃	にぶい黄褐色	C－7	〃	23.70～24.00
97	97	2575	〃	口縁部	赤褐色	B－5	〃	24.05～24.40
98	98	9998	〃	口縁部～胴部	黒褐色	C－11	〃	23.70～23.85
99	99	8582	〃	〃	にぶい黄褐色	C－7	〃	23.70～24.00
第19図-100	第29図版-100	2820	〃	口縁部	黄橙色	B－6	〃	24.00～24.25
101	101	9495	〃	〃	にぶい黄褐色	C－9	〃	23.70～23.90
102	102	9487	〃	〃	褐灰色	C－9	〃	〃

口唇部形態	口縁部形態	口縁部文様形態			口縁幅(mm)	文様幅(mm)	調整痕	備考
		上	中	下				
c	b		i	J	—	—	b, s	CO少量付着(内, 外)
c	c	a.3			22	8	b	
c	c	a.3			22	12	b, s	
c	c	a.2		a.1	22	22	b	
e	d	a.4			24	14	b	CO微量付着(外)
c	c	a.2			22	8	b	CO付着(内)
a	c	a.2	c		28	28	b, s	
e	c	a.3	f		22	22	b	
b	c	a.3	c, d		22	22	b, s	
c	b	a.3	j	a.2	29	29	b, s	CO少量付着(内)
e	c	a.3	j		26	26	b, s	
c	c	a.3	j	a.1	27	27	b, s	
b	b	a.2	e	O	29	29	b	
c	d	a.3	d	C	22	22	b, s	
d	c	a.3	f	G	27	27	b, s	
c	c	a.2	f, n	G	22	22	b, s	
d	d	a.3	e	C	28	28	b	
d	d	a.3	e	A	16	16	b, s	
d	d	a.4	j	G	30	30	b, s	
d	c	a.2	e	a.2, G	22	22	b, s	
d	c	D	b, d		22	22	b, s	
c	c	a.3	e	a.1, C	23	23	b	CO微量付着(口唇外周)
c	c	a.2, C	e	a.2, C	23	23	b	
a	c	a.1, D	b, d, h		22	22	b, s	
	d	N	e		—	—	b, s	
c	b	a.3	j		29	29	b, s	
c	c	a.4, A	e		28	28	b, s	
d	d	a.4, J	g		35	35	b	
d	d	a.3, A	e		32	32	b, s	CO少量付着(内, 外)
d	d	a.4, F	e		33	33	b, s	
d	d	a.4, I	e	a.2, G	35	35	b, s	
e	a	a.2	D		25	25	b	
b	a	a.2		G	23	23	b, s	
e	b	a.3		M	20	20	b, s	

図番号	図版番号	遺物番号	器形	部位	色調	出土区	層位	出土レベル(m)
第19図-103	第29図版-103	2303	台付浅鉢	口縁部～口頸部	灰黄褐色	B－3	Ⅲ	24.20～24.45
104	104	15511	〃	口縁部	褐灰色	D－9	〃	23.50～23.70
105	105	9055	〃	口縁部～胴部	にぶい黄橙色	C－8	〃	23.70～23.95
106	106	15974	〃	口縁部	橙色	D－11	〃	23.50～23.70
107	107	4904	〃	〃	褐灰色	B－12	〃	23.85～24.00
108	108	13181	〃	口縁部～胴部	にぶい黄橙色	D－6	〃	23.55～23.75
109	109	16140	〃	口縁部	黒褐色	D－12	〃	23.55～23.70

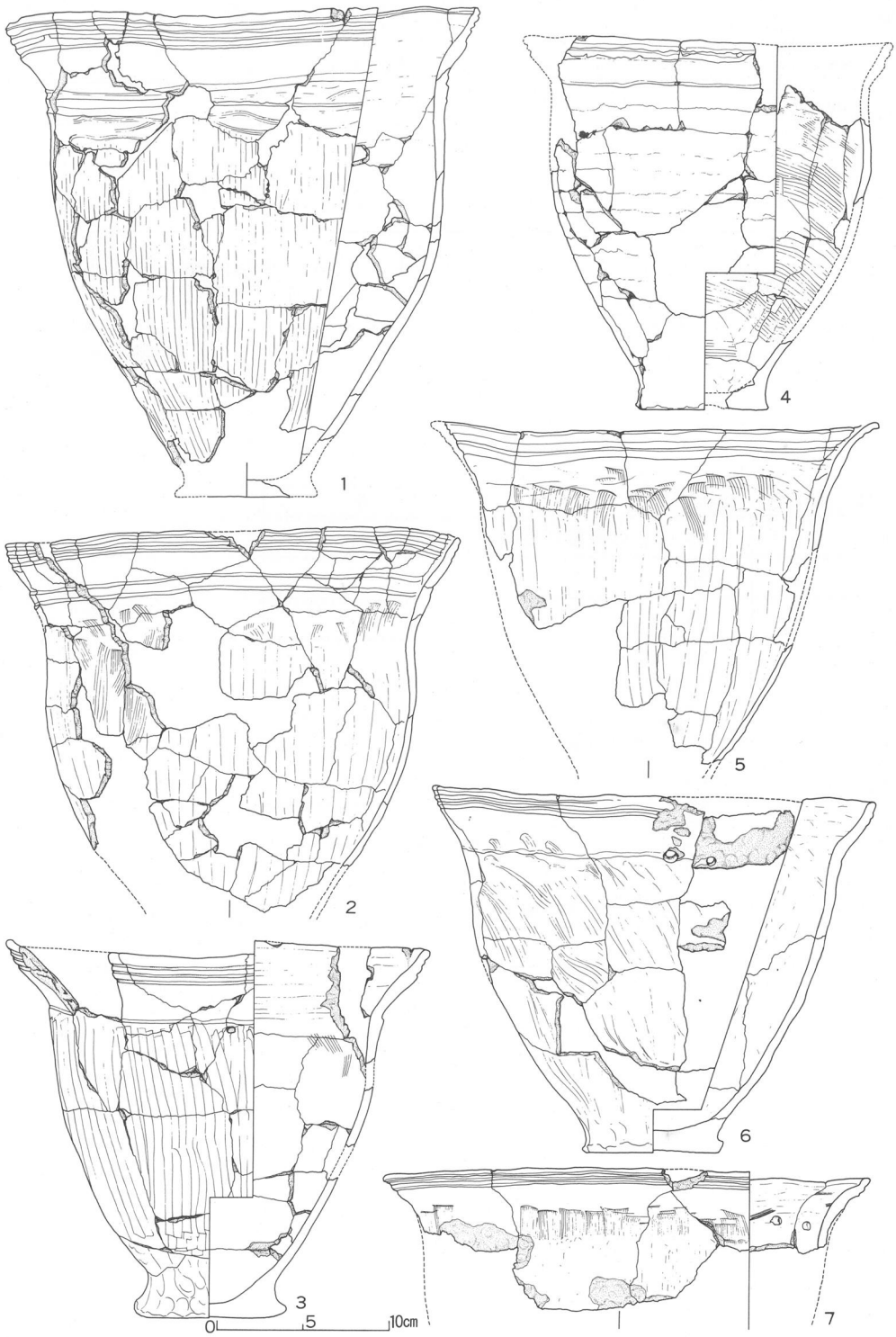
第3表　刻印土器(底部)一覧表

図番号	図版番号	遺物番号	器形	部位	色調	出土区	層位	出土レベル(m)
第19図-110	第29図版-110	16119	台付浅鉢	底部	にぶい赤橙色	D－11	Ⅲ	23.50～23.70
111	111	16123	〃	〃	黒褐色	－	〃	〃
112	112	3583	〃	〃	にぶい黄橙色	B－7	〃	24.00～24.20
113	113	4279	〃	〃	黄灰色	B－9	〃	23.90～24.10
114	114	165	〃	〃	にぶい黄橙色	A－1	〃	24.60～24.85
115	115	5779	〃	〃	灰黄褐色	C－N	〃	24.05～24.45
116	116	2811	〃	〃	にぶい黄橙色	B－5	〃	24.05～24.40
117	117	4865	〃	〃	〃	B－11	〃	23.85～24.05
118	118	4272	〃	〃	明黄褐色	B－9	〃	23.90～24.10
119	119	2301	〃	胴下部～底部	にぶい黄橙色	B－2	〃	24.20～24.45
120	120	1808	〃	底部	褐灰色	B－1	〃	24.40～24.60
121	121	11102	〃	〃	黒褐色	C－12	〃	23.70～23.85
122	122	6377	〃	〃	にぶい黄橙色	C－2	〃	24.05～24.30
123	123	7935	〃	〃	褐灰色	C－5	〃	23.80～24.15
124	124	9424	〃	〃	にぶい黄褐色	C－8	〃	23.70～23.95
125	125	15757	〃	〃	にぶい黄橙色	D－9	〃	23.50～23.70
126	126	9948	〃	〃	褐灰色	C－10	〃	23.70～23.85
127	127	16309	〃	胴下部～底部	黒褐色	E－1	〃	23.80
128	128	1606	〃	〃	にぶい黄橙色	B－N	〃	24.45～24.65

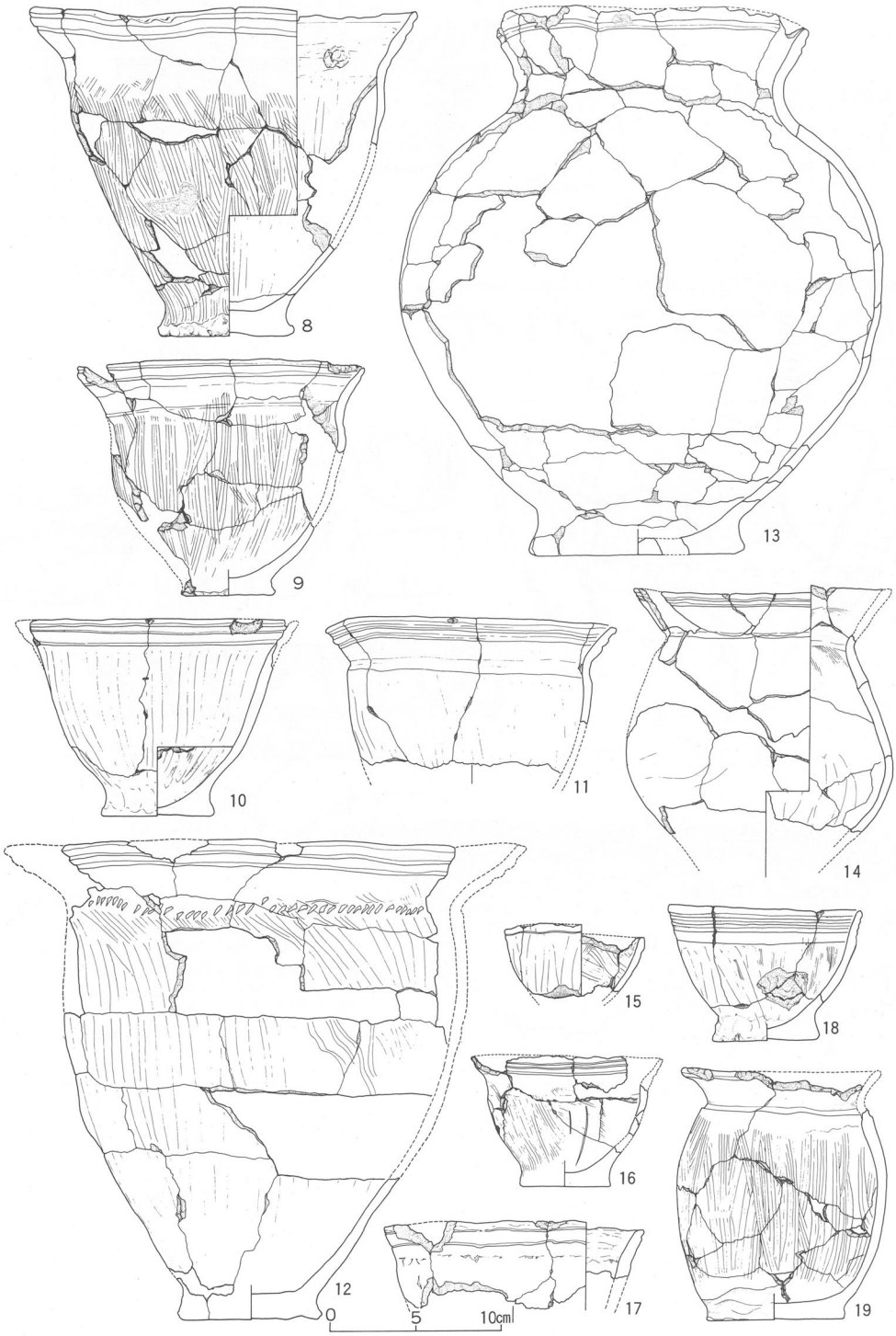
口唇部形態	口縁部形態	口縁部文様形態			口縁幅(mm)	文様幅(mm)	調整痕	備考
		上	中	下				
c	c	a・4，A			25	25	b，s	
c	b	a・3，E		a2，G	22	22	b	
e	b	G		G	20	20	b，s	
b	c		I	I	27	27	b，s	ＣＯ付着(内)
e	c		L	L	22	22	b，s	
b	b	K		K	24	24	b，s	ＣＯ微量付着(口唇外周)
b	c	a・3，A		F，I	28	28	b	

(調整痕d＝ハケ ，s＝ヘラ)

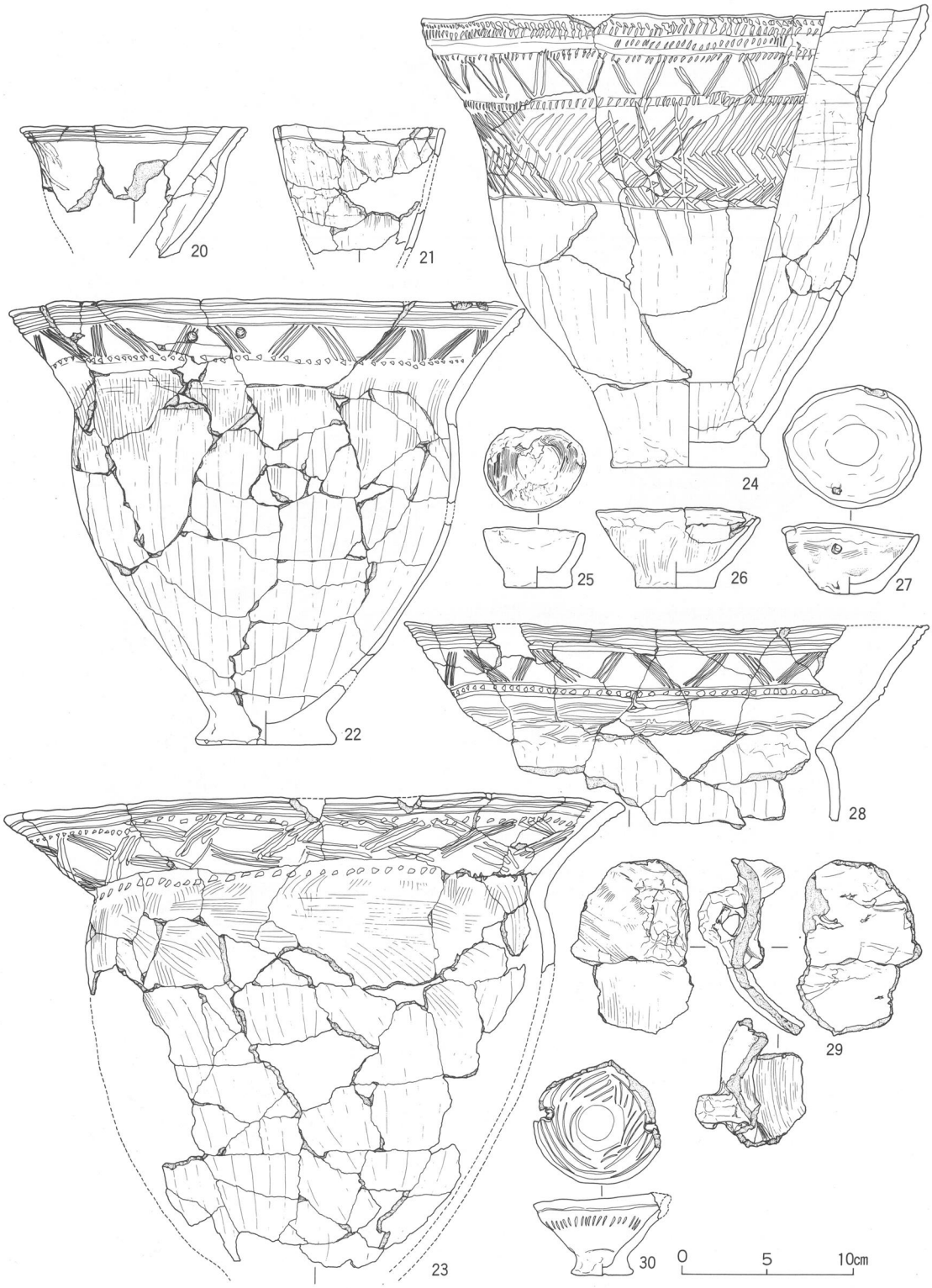
底部形態	刻印	調整痕	底形(mm)	備考
ＡⅠ	a	s	45	ＣＯ微量付着(内)
ＡⅠ	a	s	55	
ＣⅠ	b	s	44	
ＡⅡ	b	s	54	
ＢⅢ	b	s	53	
ＣⅡ	b	s	60	鉄滓付着
ＣⅡ	b	s	60	
ＡⅢ	b	s	55	
ＢⅢ	b	s	62	
ＣⅢ	b	s	62	ＣＯ微量付着(内)
ＢⅢ	b	s	—	
ＢⅡ	b	s	—	
ＢⅢ	c	s	53	
ＡⅡ	d	s	50	
ＢⅢ	—	s	—	
ＣⅢ	e	s	59	
ＣⅢ	c	s	58	
ＣⅡ	g	s	60	
ＣⅢ	i	s	—	



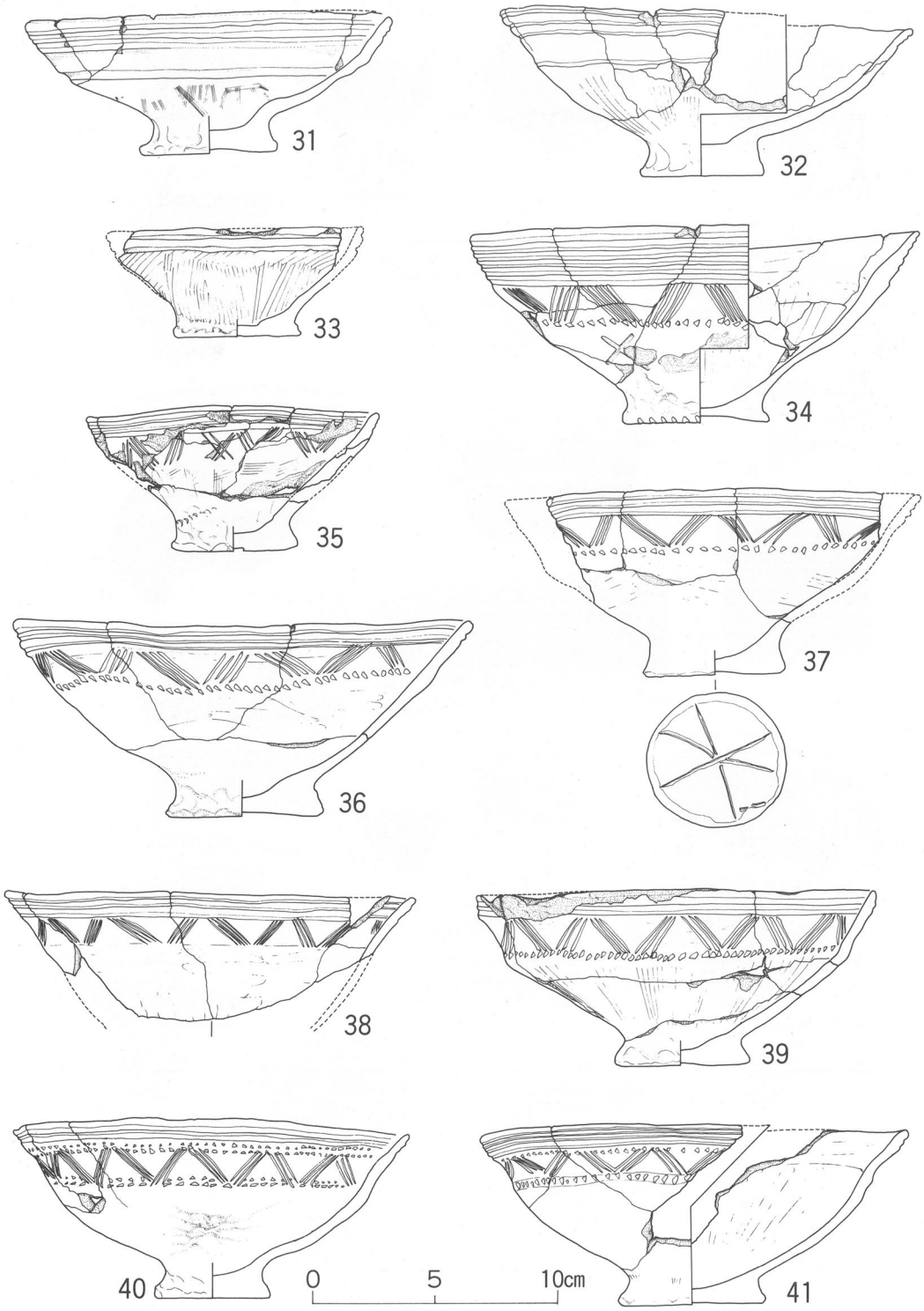
第11図　出土遺物　第１文化層の土器（1）実測図



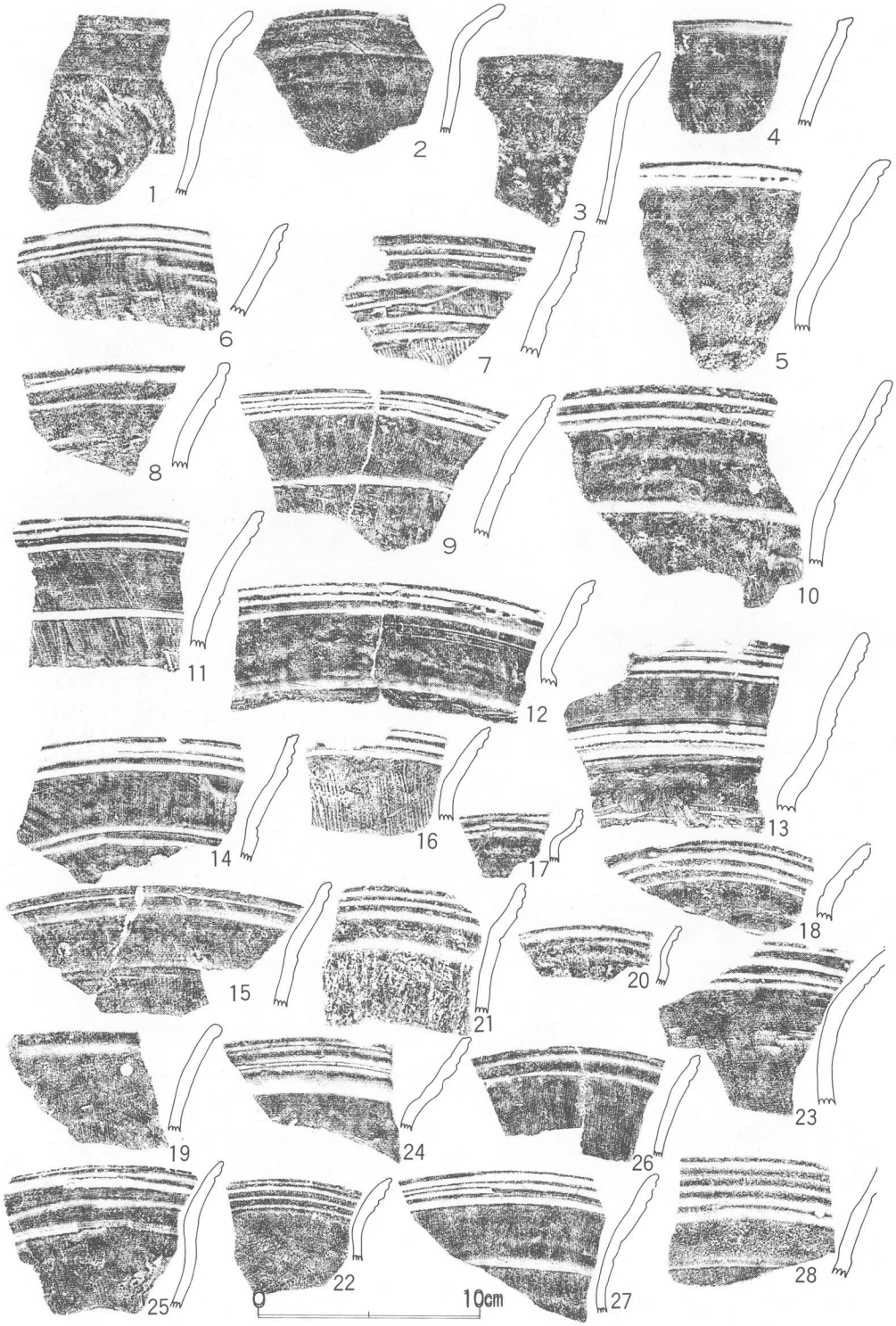
第12図　出土遺物　第１文化層の土器（2）　実測図



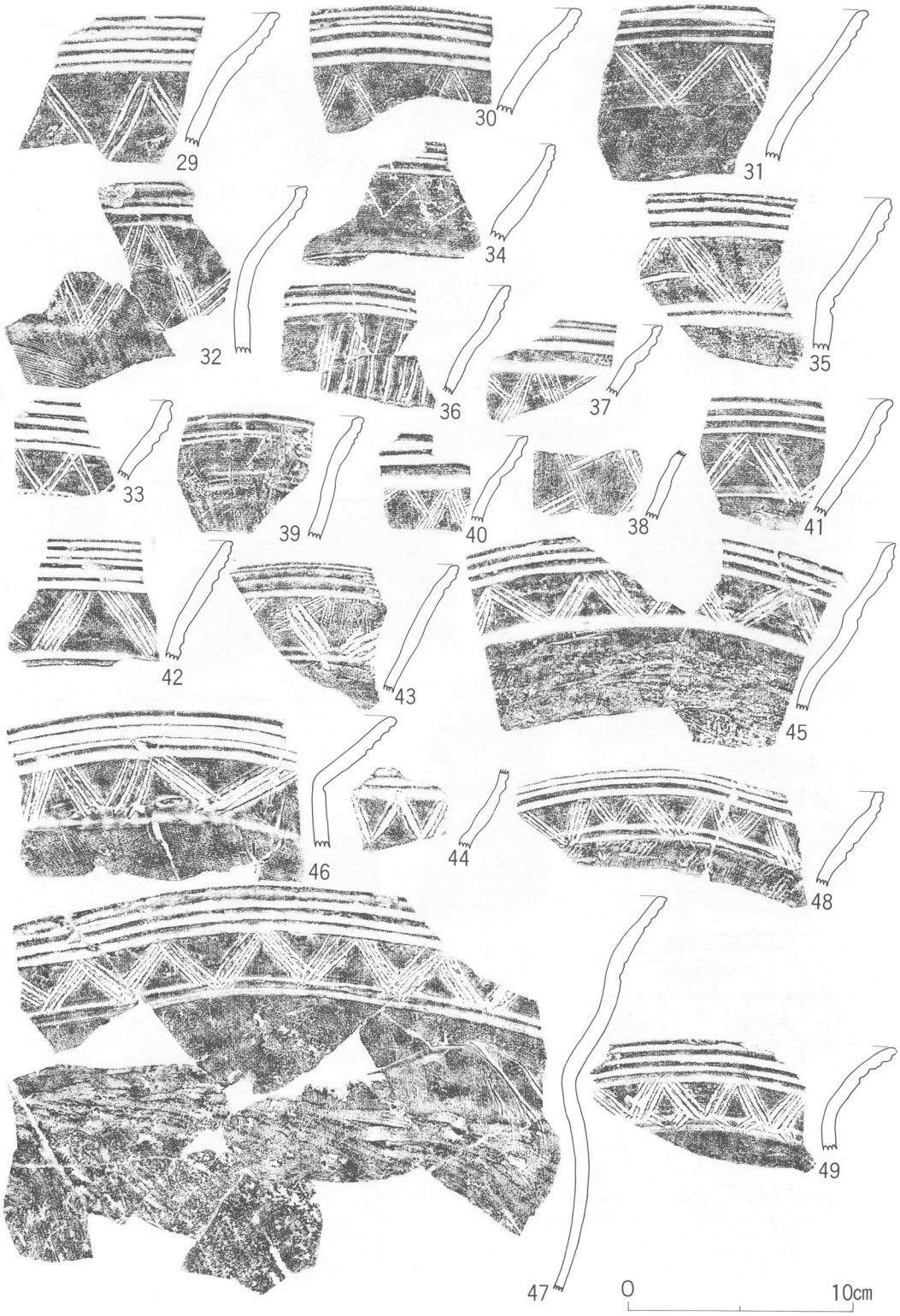
第13図　出土遺物　第１文化層の土器（3）実測図



第14図　出土遺物　第１文化層の土器 (4) 実測図



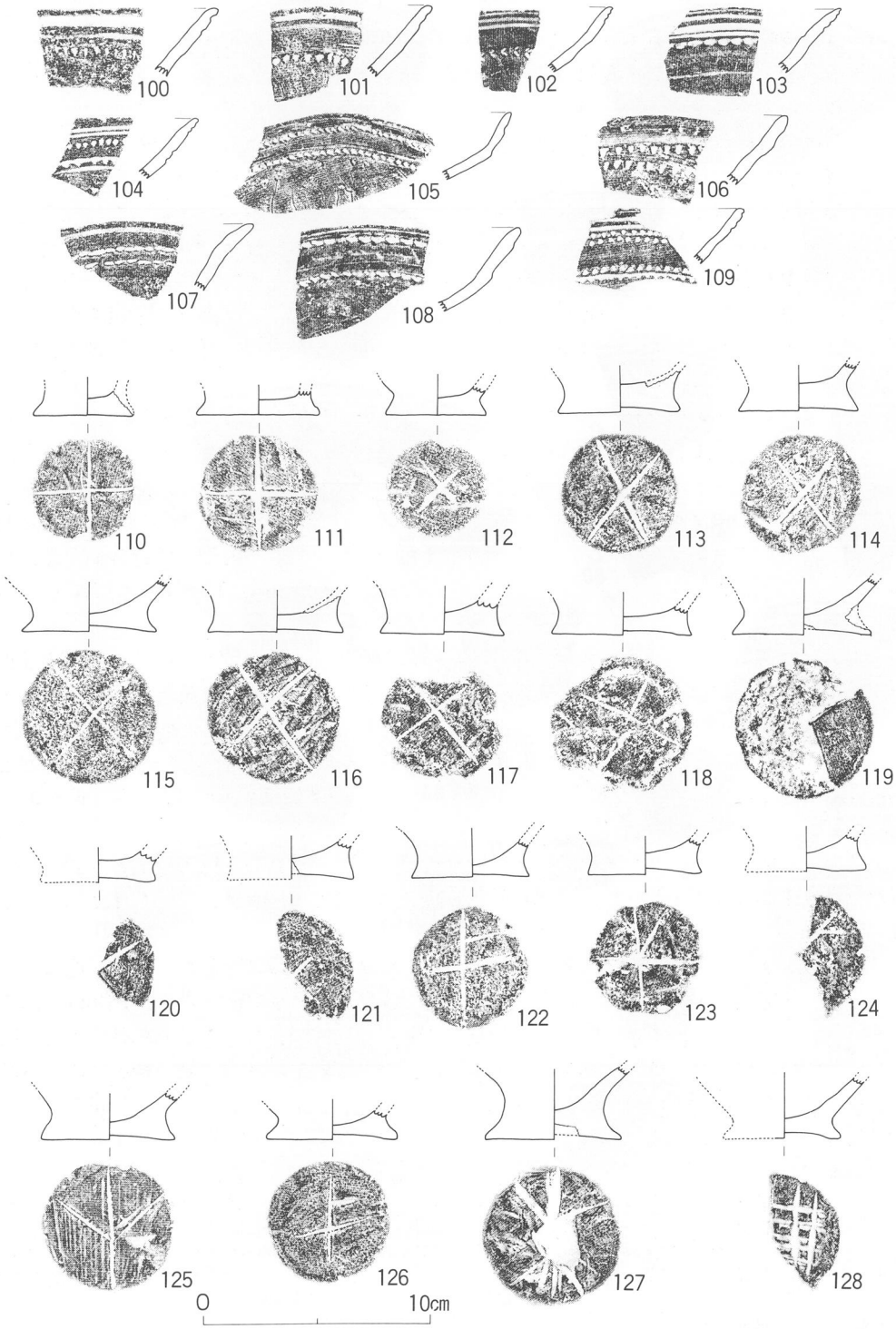
第15図　出土遺物　第１文化層の土器　(5)　拓影図



第16図　出土遺物　第１文化層の土器（6）拓影図

第17図　出土遺物　第１文化層の土器（7）拓影図

第18図　出土遺物　第１文化層の土器（8）拓影図



第19図　出土遺物　第１文化層の土器（8,9）　拓影図

2） 土製品および石製品

土製品では模造品と見られる土製鏡，有孔円板，内耳あるいは外耳の把手，甑類のものと思われる把手，管状短柄，羽口があり，石製品に勾玉の模造品がある。

1．土 製 鏡

C・D－1区の石組み遺構に隣接するB－2区，C－2区とCN区から2例の破損品が出土した。第20図1は¼の大きさに接合できたもので，直径は推定67mm，現存中心高12mm，体部の厚さ6mm～3mmで，外周に向って薄くなる。周縁は若干丸味を帯び，鏡面部は平滑で黒色を呈する。紐孔の痕跡を残すが上部を欠く。色調は灰橙色である。2は½ほどの大きさに接合できたもので，直径の推定は81mm，現存中心高14mm，体部の厚さ8mmで，外周近くで5mmと薄くなる。周縁はやや丸味を帯び，鏡面部は平滑で黒色を呈する。紐孔の痕跡を認めるが上部を欠く。色調は灰茶褐色である。両例とも撮みの基部に「ヘラ」による調整がなされている。（第20図・第30図版1・2）

2．有孔円版

第20図3はC－4区から出土した。一部を欠くが，ほぼ完形に近い。直径65mm，厚さ18mm，孔径5mm，正面に篦磨きによる調整痕と背面に指頭圧痕がみられる。側縁は丸味をもつ。色調は茶褐色で堅牢な焼成である。6はC－9区の出土で⅓ほど残存する。直径は推定58mm，孔径は痕跡を認めるが計測できない。正面は灰褐色，背面は黒色である。7はD－4区より出土したもので¼が残存する。正面が剝落している。背面は暗灰褐色で円滑に調整されている。直径は推定74mm，孔径9mmである。（第20図・第30図版3・6・7）

3．把　　手

第20図4・5は共にC－1区の出土で，内耳あるいは外耳土器の把手であろう。8は甑の把手と思われる。指頭による成形痕がある。長さ50mm強，基部の径18mm，先細りで角形に反る。C－3区より出土した。9はD－10区の出土で管状の土製品である。外径23mm，内径7mmで，孔は貫通していない。短柄としたが，どのような土器に付くのか分らない[1]。10はC－8区の出土で，外耳がとれた体部の瘤状の部分である。（第20図・第30図版4・5・8・9・10）

4．丸　　玉[2]

第20図15はCN区から出土したナツメの実に似た土製玉である。孔は楕円の頂点より穿たれている。表面に篦様工具による調整痕がある。茶褐色を呈す。長径19mm，短径16mm，孔径2mm。

5．鞴 羽 口

第20図12はD－9区出土の粘土製吹子口である。火戸に接した先端の一部で，溶解状態になっている。13はA－2区の出土。先端に近い部分の残片で，現存する長さ65mm，推定外径40mm，内径23mmである。14はEN区より出土した吹子口の先端部である。火戸に面したところが長楕円形に圧し潰された状態になっており，外面は溶融し，スラグが付着している。一端の破損断面に細い盲縞が見られる。粘土をブロック状に切り取り，刳いたものか，泥岩を穿ったものらしい。現存する長さ50mm，口部外径44mm×65mm，内径30mm。（第20図・第30図版12・13・14）

6．勾　　玉

第20図11はC－9区から出土したシルト岩製の大型勾玉で，先端が折損している。弧線や先端部に鋭利なもので削った整形痕がある。紐孔は直径3mm×4mmで自然孔らしいが，両面から大きく面取りしている。長さ67mm，幅27mm。（第20図・第30図版11）

3） 鉄器および鉄製品

鉄器としての形態を窺えるものは刀子，腰刀，紡錘車の3種で，他は不定形の鉄製品である

1. 刀子および腰刀[3)]

第21図1はE－2区から出土した芽の葉状の鋒先である。2，3はB－6区出土で同一個体である。平棟で反りがなく，茎長は刃長に比して長い。茎部の断面は長方形で，棟区の区切りは浅く，刃区の区切は深い。茎に木肌が残っている。全長143mm，刃長80mm，茎長63mm，鋒先19mm，先幅13mm，mm，元幅16mm，重量20g。4はD－1区，5，6はC－区の出土で同一個体のものであるが，部位の異なる断片で接合はできない。棟区，刃区の幅6mmほどに木皮が巻かれている。平棟である。茎長90mm，元幅32mm，重量97g。（第21図・第31図版1・2・3・4・5・6）

2. 紡錘車[4)]

第20図18はB－12区の出土で，円板の中央に鉄の心棒を通したものである。この種のものは青苗貝塚，山本台地投棄溝より各1例出土している。この3例の計測値は大同小異で，円板の片面縁の一箇所に瘤状の腐蝕塊のあることでも共通している。円板径65mm，厚さ7mm，心棒径5mm，重量39g。（第21図・第31図版18）

3. 不定形鉄製品

7. 断面が1型をした楔状のもの。C－3区出土。長さ39mm・幅25mm・厚さ7mm・重さ16g
8. 長方形で板状のもの。C－8区出土。長さ44mm・幅12mm・厚さ3mm・重さ5g。
9. 薄い小鉄片。E－9区出土。長さ38mm・幅17mm・厚さ3mm・重さ3g。
10. 断面がV状をなすもの。刀子の一部？。D－8区出土。長さ38mm・幅20mm・厚さ4mm・重さ10g
11. 長方形で札状のもの。E－3区出土。長さ57mm・幅25mm・厚さ3mm・重さ13g。
12. 長方形で板状のものと，断面が正方形で空洞の鉄塊が融合したもの。C－1区出土。長さ54mm・幅34mm・厚さ19g。
13. 小鉄板。C－4区出土。長さ44mm・幅33mm・厚さ2mm・重さ8g。
14. 不定形の鉄板。C－3区出土。長さ65mm・幅54mm・厚さ3mm・重さ16g。
15. 円状鉄板の一部。E－3区出土。長さ54mm・幅30mm・厚さ3mm・重さ12g。
16. 方形でやや厚い鉄板。D－4区出土。長さ50mm・幅48mm・厚さ7mm・重さ44g。
17. 三角形状の薄い鉄板。B－3区出土。長さ76mm・幅29mm・厚さ3mm・重さ10g。

（第21図・第31図版）

4）鉄　　滓

発掘区から出土した鉄滓の出土量は280g，溶滓2253g，総量5113gである。先きにも述べたように，2ヶ所に集中して出土しているが，爪大の溶滓を含めると，全グリッドから出土すると云ってもよい。鉄滓としたものは，椀形または球状面を一部にもっものである。また，ここに溶滓としたものは，粗い気泡のある軽いスラッグと，粘土と溶滓が融合した，比較的重いものをいう。便宜上の区分である。

出土した鉄滓には2つのタイプがある。内面が飴状で光沢があり，製錬時の気泡孔が，幾つか見られる。外面は，炉壁と山土との焼結面が，ネガティブになっている。この種のものは断面が，椀形を呈するものと異なり，内面が，外面のカーブに即して窪むものである。肉厚が10mm前後と薄く，体積に対して重量の軽いのが特徴である。第22図・第32図版16・14がその例で，重量は180g，90gである。

もう1つのタイプは，上面が飴状になっているが，前例のように光沢がない。断面に小豆大から針穴大の気泡孔が見られる。断面の形態は，いわゆる椀形とまではいかないが，上面の窪みはない。外面の形態は，土器底部の内面と似る。最後の残留物と見られ，鉄分を多く含有し重い。第22図17・第32図版17はB－9区の出土で335gある。同図・図版4は90g，8は120g，この種の砕片である。

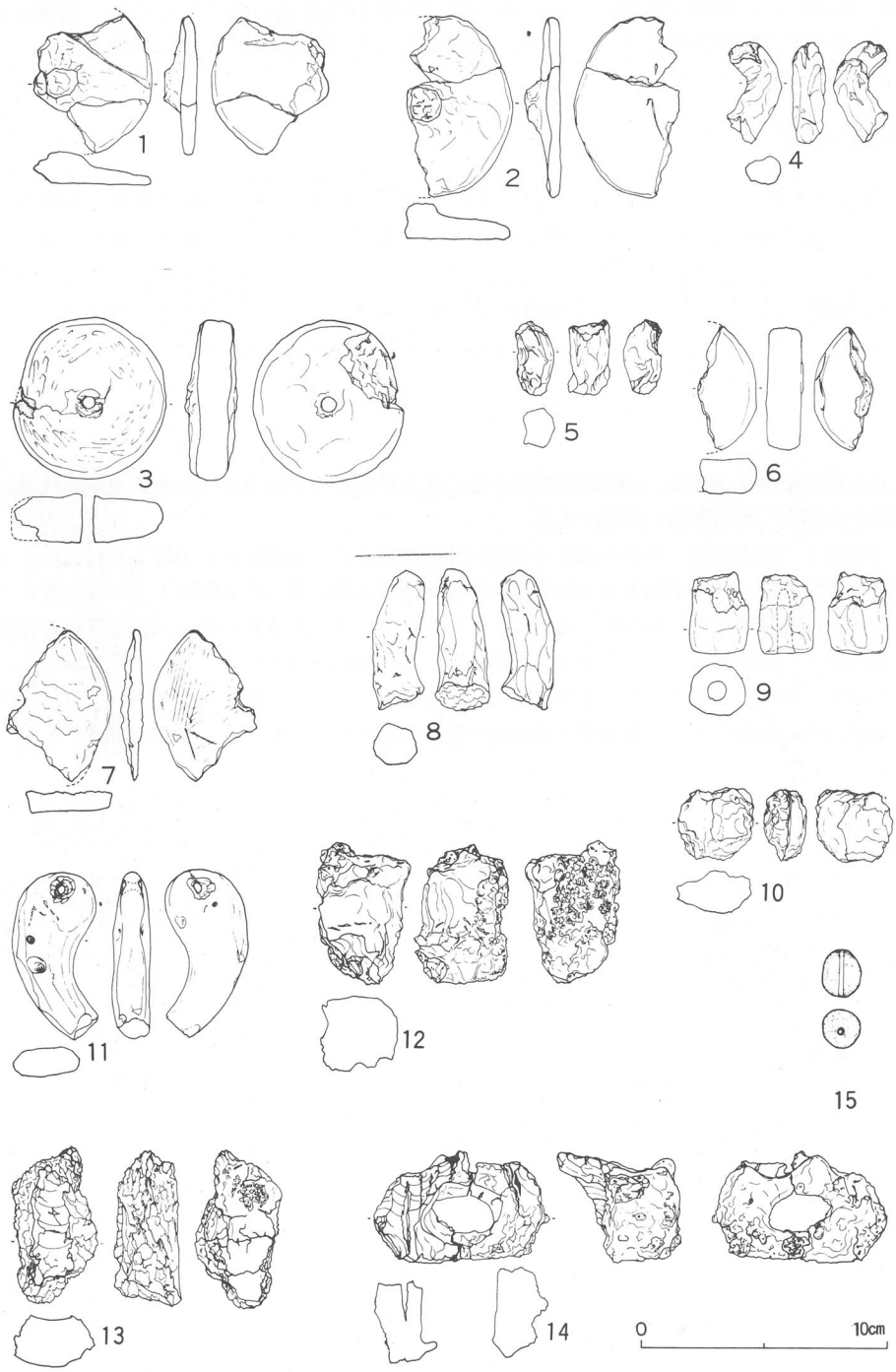
青苗遺跡の前回の調査で，椀形鉄滓の典形的なものが６点出土しており，重量は400ｇ～890ｇで，１点平均675ｇである。これからみて，Ｂ－９区出土のものは，一部を欠くが最小の部類に入る。また，鉄滓の形状から，製錬が行われたか，或いは，小鍛治程度のものであったか，遺構が焼土だけであり，貝塚台地の製錬遺構をもってのみ，判断することは困難である。この問題については後日，稿を起したいと思う。（佐藤忠雄）

5） 動物遺体

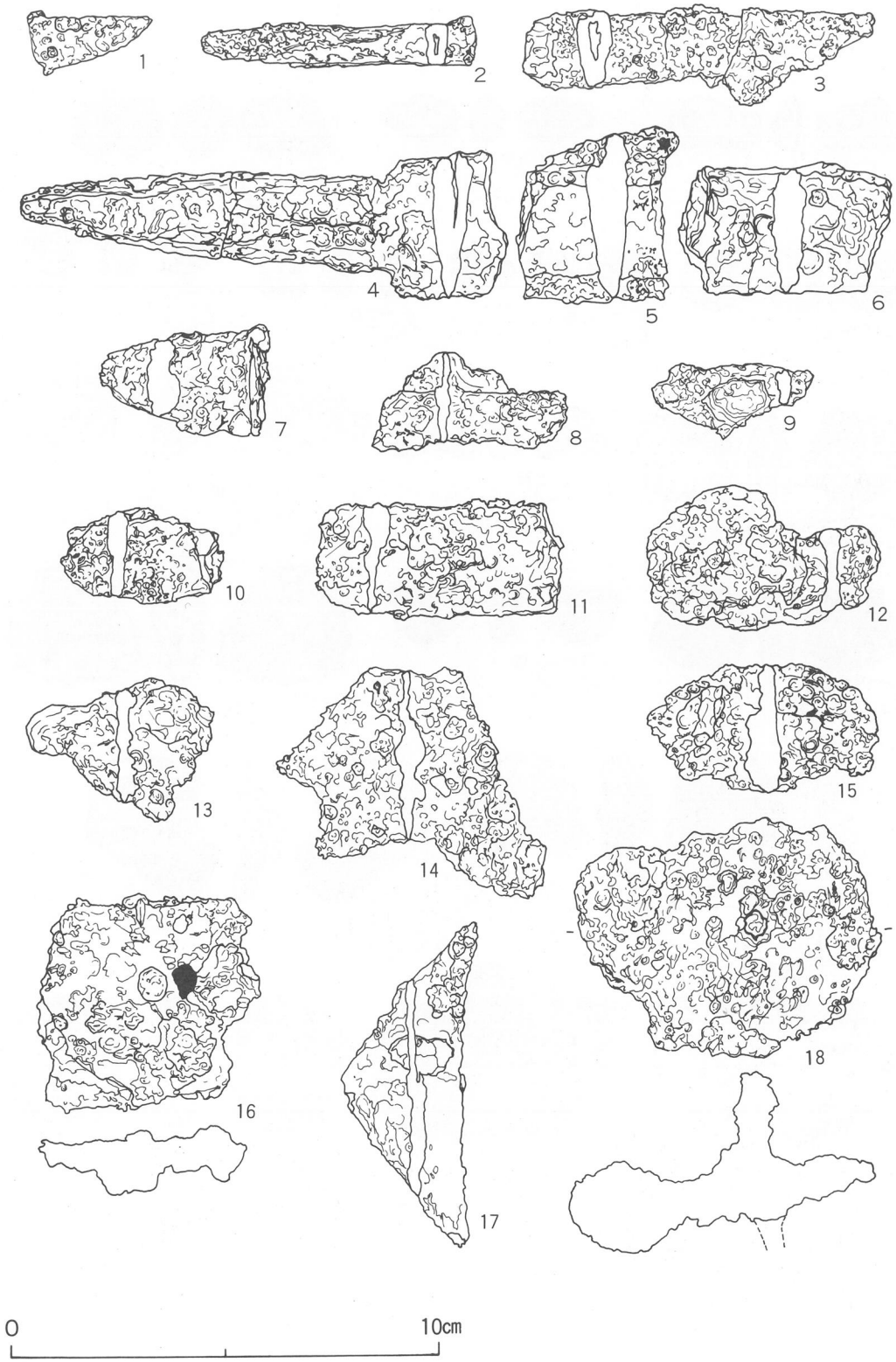
すべて，第１文化層出土のものである。Ｄ－区の石組み下から，アシカ類の椎骨と四肢骨が検出された。（第33図版１・２）Ｃ－８区の焼土付近の，灰黄色をした硬い土壌に，刺さり込んだ状態で，第34図版１のマグロ類の歯骨（右）１点，２・３・４・５・６の椎骨５点，７のカジキ類椎骨１点，８の海獣類肋骨片，９のクジラ類製骨角器の黒く焼けた折損品？の９点が出土した。５の椎骨には，鋭い切痕がある。Ｂ－12区出土の第34図版12のアシカ類の上腕骨は，保存の状態が悪かった。11・12はアシカ類の椎骨である。（佐藤芳子）

註

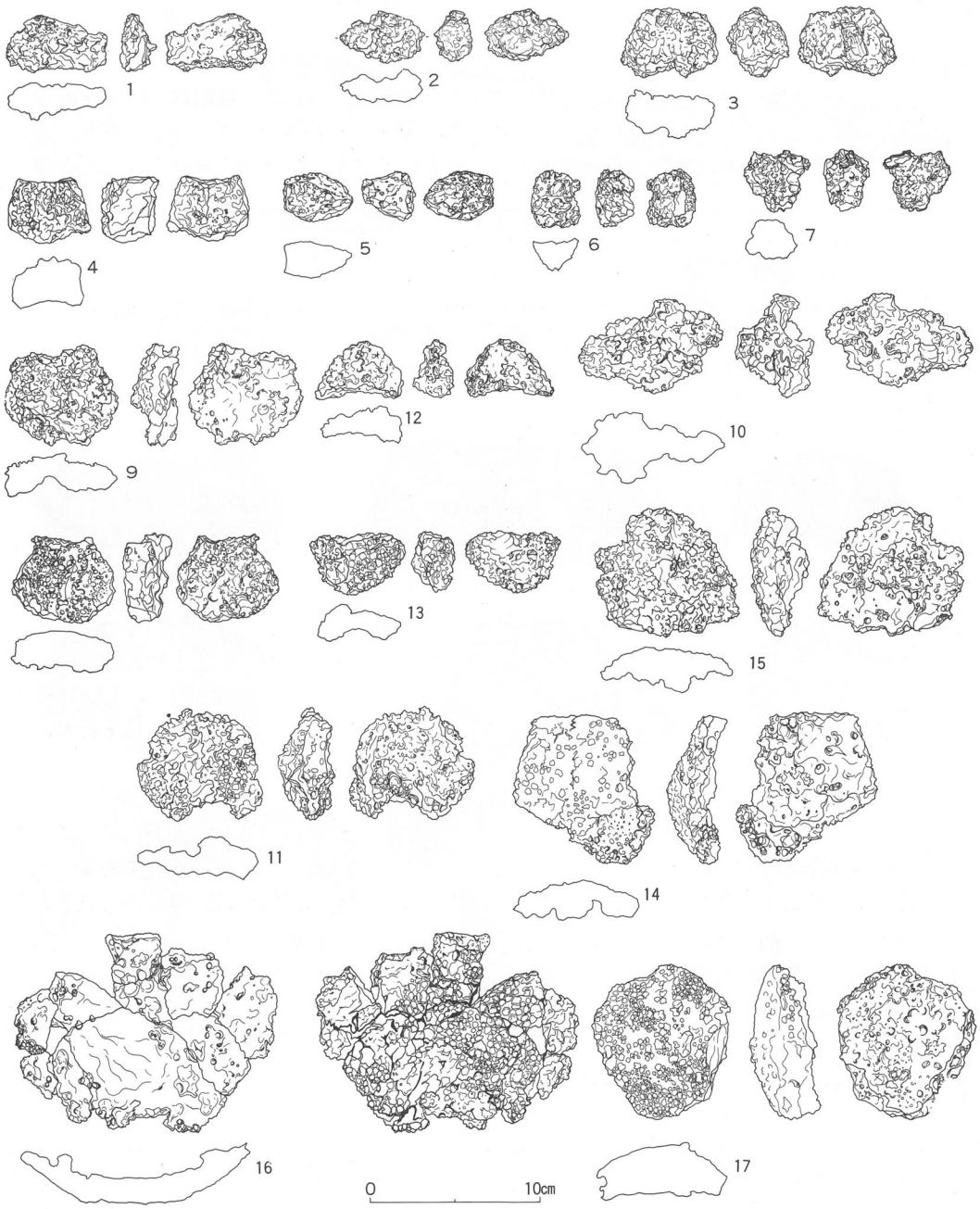
1) この種の把手は須恵器，土師器の椀形土器に見られるものであるが，青森県大館森林遺跡の住居址から出土した須恵器に類例がある。
2) 土製玉は千歳市祝梅三角山Ｄ遺跡４号竪穴住居址近くの一定箇所から土製玉と共に出土したのが最も多い例で，恵庭市柏木川では墳墓から古い擦文土器に伴った３個の土玉が報告されており，また江別市後藤遺跡でも散点的に出土したといわれている。本遺跡の例は土製勾玉（前回調査の投棄溝出土）の出土もあり，千歳市のものに近く，時期的に接近しているものと思われる。
3) 石井昌国　1965　『蕨手刀』を参考に腰刀としたが，大刀子に分類されるものかも知れない。
4) 鉄製紡錘車は同型のものが青森県古館遺跡で多量に出土したと聞くが，未だ未確認である。



第20図　出土遺物　第１文化層の土製品，石製品実測図



第21図　出土遺物　第１文化層の鉄器，鉄製品実測図



第22図　出土遺物　第１文化層の鉄滓実測図

2. 第２文化層の出土遺物

1）土　　器

第１群土器

本群は，無文の土器をＡ類，貝殻文を主体とする土器をＢ類，撚糸文，隆起線文，縄文を中心とする土器をＣ類として分類した。ただし，本遺跡から出土した資料は全て土器破片であり，各破片に見出せる文様を一つの単位としたため，あるものは一つの類型，種型の一部分を成している可能性は十分考えられる。

Ａ類：（第23図・第35図版２・３，第24図・第36図版71・72・73・75・76）

２・３は山形波状部をもつ口縁部である。71・72は乳房状の尖底部であり，73は砲弾形である。75は平底土器の底部で，内面に器面調整によると思われる条痕がみられる。76は底部から胴部にかけて外反する平底土器である。

Ｂ類：本類は貝殻条痕文，貝殻圧痕文を施したもので，沈線，刺突の組み合せにより，ａ～ｆの６種に分けた。

ａ種：貝殻条痕文のみが施された土器。

ｂ種：貝殻条痕文＋刺突が施された土器。

ｃ種：貝殻圧痕文のみが施された土器。

ｄ種：貝殻圧痕文＋沈線が施された土器。

ｅ種：貝殻圧痕文＋刺突が施された土器。

ｆ種：貝殻圧痕文＋沈線＋刺突が施された土器。

ａ種（第23図・第35図版１・４・５・７・８・11・16・28，第24図・第36図版40）

１・７・８は山形波状口縁部を有する土器である。１．口縁部が緩やかに外反し，口唇部は内面と鋭角をなし波頂部は角をもつ。わずかに横方向の条痕を残す。７．ほぼ直立する口縁部で，やや細い条痕が横走する。８．内面，外面，口唇部に条痕がみられ，波頂部は丸味をおびる。４・５・11・28・16は平縁の土器である。４．緩やかに外反する口縁部で，口唇部から口縁部にかけて内外面に斜行する条痕を施し，外面は横走する条痕がつづく。28．４の同一個体と思われる。５．外面に横走，斜行する条痕が認められる。11．口縁部は内弯し，内外面に横走する条痕を施す。16．口唇部から口縁上部に斜行する条痕，その下部は横走する条痕を施し，内面には横走する条痕が認められる。40．やや幅広の条痕が横走し，器面調整と思われる条痕が斜行する。

ｂ種（第23図・第35図版６・25）

６．山形波状部をもつ口縁部破片である。内外面とも横走する細い条痕を施し，口唇部に刺突の烈点を施す。25．口唇に沿って２列の刺突，口縁部に２列の刺突で三角形を上下に対称させ，地文様は縦走する条痕を施す。内面は上部に縦走する条痕がみられる。

ｃ種（第23図，第35図版９・10・12・14・20・30・34～38．第24図，第36図版41・42・44）

９．腹縁圧痕文が口縁上部に斜方向に施され，下部は横方向に施されている。内面は横走する条痕が残る。10．口唇は内面と鋭角をなし，口唇部から全体に横方向の腹縁圧痕文が施されている。12．横方向の腹縁圧痕文が見られる。14．丸味をおびた口唇部で，腹縁圧痕文が縦横に交差する。20．腹縁圧痕文が斜方向に施されている。30．口唇は肥厚し，縦方向の腹縁圧痕文が口唇内外縁，胴部外面に施されている。34～37・41・42・44．腹縁圧痕文を横方向に施す。38．縦方向の腹縁圧痕文が施され，内面に横走する条痕が認められる。

ｄ種（第23図・第35図版17・19・21・22・39，第24図・第36図版46）

17．口唇直下に斜行する沈線を施し，口縁部は横走する２条の沈線に挟まれた腹縁圧痕文が等間

隔に２列施されている。19．17の山形波頂部である。21．平行する６条の沈線が斜行し，腹縁圧痕文がわずかに認められ，内面に横走する条痕が見られる。22．山形波状部を有する土器で，口唇外縁に沿って１条の沈線，口縁下部に平行する２条の波状沈線を配し，沈線間を縦方向の圧痕文で充塡している。39．縦方向に腹縁圧痕文を施し，数条の浅い沈線が横走する。46．斜行，横走する沈線を配し，腹縁圧痕文が羽状に施されている。

ｅ種（第23図・第35図版15・31，第24図・第36図版43・47・49・54）

15．口唇外縁に２列の刺突を施し，斜行する腹縁圧痕文が施される。31．口唇部直下に横方向の羽状の腹縁圧痕文，下部は縦方向の羽状の腹縁圧痕文を施し，縦行，斜行する不規則な刺突が見られる。43．横方向の腹縁圧痕文を施し，斜めから刺した２列の刺突が横走する。47．縦方向に腹縁押し引きが認められ，刺突が施される。49．縦走，斜行する腹縁圧痕文，斜めからの刺突が見られる。54．２条の腹縁圧痕文でＶ字型を２段重ね，Ｖ字の鋭角部に１点刺突を施し，段間に刺突列を配したもの。

ｆ種（第23図・第35図版18，第24図・第36図版48）

18．縦方向の腹縁圧痕文，横走する浅い平行沈線を施し，口唇外縁に沿って１列の刺突が施されている。48．３条の平行沈線を挟んで，上部に斜行する腹縁圧痕文，下部に数列の刺突を施す。

ｃ類：本類は撚糸文，絡条体圧痕文，縄文，綾絡文，隆起線文，組紐圧痕文，刺突文の単独あるいは数種の組み合せにより構成されており，その組み合せを摘出するとａ～ｊの10種に分かれる。

ａ種：撚糸文のみが施された土器。

ｂ種：絡条体圧痕文のみが施された土器。

ｃ種：縄文のみが施された土器。

ｄ種：綾絡文のみが施された土器。

ｅ種：撚糸文＋絡条体灰痕文が施された土器。

ｆ種：撚糸文＋綾絡文が施された土器。

ｇ種：絡条体圧痕文＋綾絡文が施された土器。

ｈ種：隆起線文＋撚糸文が施された土器。

ｉ種：隆起線文＋刺突文が施された土器。

ｊ種：組紐圧痕文のみが施された土器。

ａ種（第24図・第36図版56・57・60・62・63）

57．羽状の撚糸文が施された底部付近の破片である。62・63．羽状の撚糸文が施された胴部破片である。60．２本１組の撚糸文が施されている。56．横位の撚糸文が施されている。

ｂ種（第23図・第35図版27，第24図・第36図版55）

27．口縁上部に横位，下部に縦位の絡条体圧痕文が施されている。55．横位，縦位の絡条体圧痕文が施されている。

ｃ種（第23図・第35図版29，第24図・第36図版65～69・70・74）

29．平縁の土器で，口唇部から胴部にかけ羽状縄文が見られる。70・74．羽状縄文が施された底部破片である。65～69．いづれも底部破片である。張り出した底部を有し，張り出した部分に短縄圧痕文をめぐらし，68・69では上部に羽状縄文を施している。

ｄ種（第24図・第36図版45）

綾絡文を数段施した胴部破片。

ｅ種（第23図・第35図版23，第24図・第36図版58・61）

23．口縁部の破片で上部は羽状の撚糸文を施し，下部は横位の絡条体圧痕文を配している。58．撚糸文を挟んで６段の絡条体圧痕文を施す。61．数段の絡条体圧痕文を重ね，下部には羽状の撚糸

文が見られる。

f 種（第23図・第35図版13，第24図・第36図版50～52）

13．上部に羽状の撚糸文，下部に数段の綾絡文を施文した口縁部破片である。50．撚糸文を挟んで，4段の綾絡文を施文している。52．数段の綾絡文を重ね，1cm程の無文帯を残し，下部に2段の綾絡文，羽状の撚糸文を配している。

g 種（第24図・第36図版53）

横位の絡条体圧痕文を5段重ね，その上部と下部に綾絡文を施している。

h 種（第23図・第35図版26）

表面が磨滅しているが，隆起がわずかに認められる。横位，斜位の撚糸文が施されている。図に示していないが，曲線を描く隆起線文を有し，撚糸文を施したものがD－6区から出土している。

i 種（第23図・第35図版24）

口唇部に刺突の列点を配し，隆起線文に挟まれて斜めから刺した列点，縦に細い刺突列が数条施される。

j 種（第24図・第36図版64）

平組紐が斜位，横位に押捺されている。

第2群土器（第23図・第35図版32・33，第24図・第36図版59）

本群土器は円筒下層a式土器に対比されるもので，出土量は少なくここに示したもののほか，数片にすぎない。

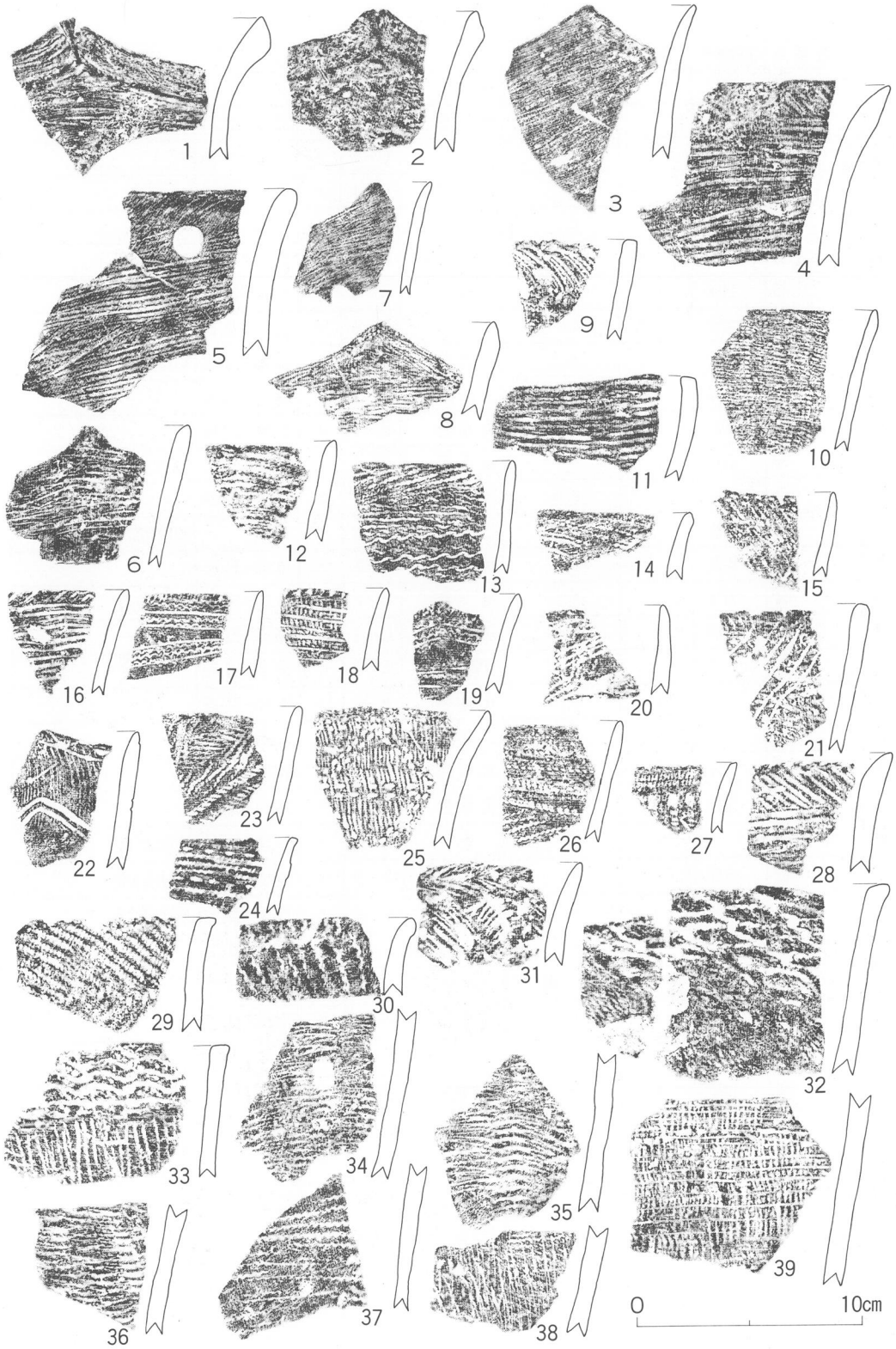
10．口縁部に網目状撚糸文が施されている。33．口縁部に不整な綾絡文が見られ，胴部は縦位の撚糸文が施文されている。59．網目状撚糸文が施された胴部破片である。

（山田　勝）

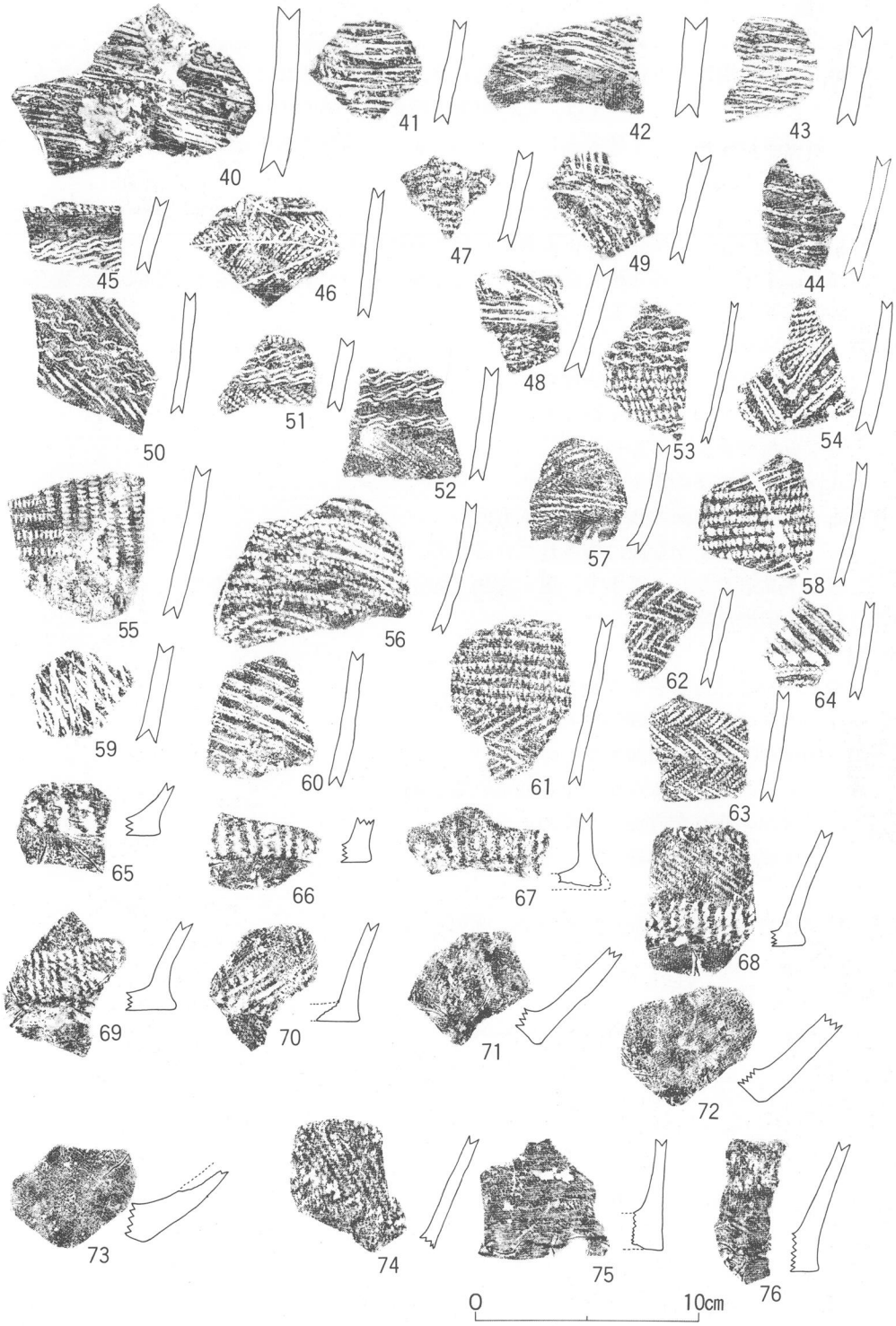
図番号	図版番号	遺物番号	器形	部位	色調	出土区	層位	レベル(m)	備考
第23図－1	第35図版－1	3590	波状口縁	口縁部	にぶい黄燈色	D－8	Ⅵ	23.25～23.50	CO付着(外)
2	2	3592	〃	〃	浅黄燈色	D－8	〃	〃	
3	3	2931	〃	口縁部～胴上部	灰褐色	D－6	〃	23.30～23.50	
4	4	2540	〃	〃	橙色	C－8	〃	23.50～23.80	
5	5	2933	〃	〃	黒褐色	D－6	〃	23.30～23.50	CO付着，補修孔径(外12mm 内4mm)
6	6	2915	波状口縁	〃	橙色	D－3	〃	23.50～23.70	
7	7	2929	〃	口縁部	灰褐色	D－3	〃	〃	
8	8	2542	〃	〃	〃	C－8	〃	23.50～23.80	
9	9	3297	〃	〃	〃	D－7	〃	23.25～23.50	
10	10	3779	〃	口縁部～胴部	〃	E－4	〃	23.30～23.45	
11	11	3299	〃	口縁部	にぶい赤褐色	D－7	〃	23.25～23.50	
12	12	3776	〃	〃	にぶい橙色	E－3	〃	23.40～23.50	
13	13	1553	〃	〃	黒褐色	B－6	〃	23.80～24.20	
14	14	3782	〃	〃	灰褐色	E－4	〃	23.30～23.45	
15	15	2459	〃	〃	黒褐色	C－7	〃	23.50～23.85	
16	16	2541	〃	〃	褐灰色	C－8	〃	23.50～23.80	
17	17	2548	〃	〃	〃	C－8	〃	〃	
18	18	3125	〃	〃	〃	D－6	〃	23.30～23.50	
19	19	3599	波状口縁	〃	〃	D－8	〃	23.25～23.50	
20	20	2462	〃	〃	〃	C－7	〃	23.50～23.85	
21	21	3165	〃	〃	〃	D－6	〃	23.30～23.50	
22	22	1148	波状口縁	口縁部～胴上部	明赤褐色	B－1	〃	24.25～24.60	
23	23	2212	〃	口縁部	黒褐色	C－1	〃	23.95～24.25	
24	24	2926	〃	〃	灰褐色	D－5	〃	23.25～23.35	
25	25	2925	〃	〃	にぶい赤褐色	D－3	〃	23.50～23.70	
26	26	2913	〃	〃	褐灰色	D－N	〃	23.70～23.95	
27	27	2211	〃	〃	黒褐色	C－1	〃	23.95～24.25	
28	28	2549	〃	〃	明赤褐色	C－8	〃	23.50～23.80	
29	29	2225	〃	〃	暗赤褐色	C－5	〃	23.45～23.85	
30	30	2170	〃	〃	〃	C－3	〃	23.65～24.00	
31	31	2931	〃	〃	橙色	D－5	〃	23.25～23.35	
32	32	2228	〃	口縁部～胴上部	褐灰色	C－6	〃	23.45～23.80	
33	33	2230	〃	〃	灰褐色	C－6	〃	〃	
34	34	3782	〃	胴部	にぶい橙色	E－3	〃	23.40～23.50	
35	35	2924	〃	〃	〃	D－4	〃	23.30～23.60	
36	36	2919	〃	〃	灰褐色	D－3	〃	23.50～23.70	
37	37	3576	〃	〃	にぶい橙色	D－7	〃	23.25～23.50	
38	38	3172	〃	〃	橙色	D－6	〃	23.30～23.50	

第３表　第２文化層の拓影土器一覧表

図版号	図版番号	遺物番号	器形	部位	色調	出土区	層位	レベル(m)	備考
第24図-39	第36図版-39	2918		胴部	褐灰色	D－3	Ⅵ	23.50～23.70	
40	40	2938		〃	橙色	D－6	〃	23.30～23.50	CO付着(内)
41	41	2464		〃	〃	C－7	〃	23.50～23.85	
42	42	2920		〃	にぶい橙色	D－4	〃	23.30～23.60	
43	43	3779		〃	〃	E－1	〃	23.55～23.70	
44	44	2916		〃	にぶい赤褐色	D－N	〃	23.70～23.95	
45	45	1498		〃	灰褐色	B－6	〃	23.80～24.20	CO多量付着
46	46	3590		〃	〃	D－8	〃	23.25～23.50	
47	47	2939		〃	黒褐色	D－6	〃	23.30～23.50	CO付着(外)
48	48	2914		〃	にぶい橙色	D－N	〃	23.70～23.95	
49	49	2921		〃	灰褐色	D－4	〃	23.30～23.60	
50	50	2219		〃	褐灰色	C－5	〃	23.45～23.85	CO付着(内)
51	51	1501		〃	灰褐色	B－6	〃	23.80～24.20	
52	52	1522		〃	にぶい赤褐色	B－6	〃	〃	CO付着(内・外)
53	53	2223		〃	灰褐色	C－5	〃	23.45～23.85	
54	54	3116		〃	橙色	D－6	〃	23.30～23.50	CO付着(内)
55	55	2169		〃	灰褐色	C－4	〃	23.55～23.85	
56	56	2		〃	浅黄橙色	A－2	〃	24.25～24.70	
57	57	375		〃	灰褐色	B－5	〃	23.85～24.25	
58	58	1701		〃	にぶい橙色	B－8	〃	23.75～24.05	
59	59	151		〃	赤褐色	B－3	〃	24.00～24.30	
60	60	2923		〃	黄橙色	D－5	〃	23.25～23.35	
61	61	1		〃	〃	A－1	〃	24.50～24.70	CO付着(内)
62	62	147		〃	橙色	B－1	〃	24.25～24.60	CO多量付着
63	63	2165		〃	黒褐色	C－2	〃	23.80～24.20	CO多量付着
64	64	377		〃	にぶい赤褐色	B－5	〃	23.85～24.25	
65	65	2930	平底	底部	〃	D－5	〃	23.25～23.35	
66	66	139	〃	〃	赤褐色	A－9	〃	23.85～24.20	
67	67	3779	〃	〃	にぶい赤褐色	E－1	〃	23.55～23.70	
68	68	1970	〃	〃	明赤褐色	B－8	〃	23.75～24.05	
69	69	152	〃	〃	橙色	B－3	〃	24.00～24.30	
70	70	146	〃	〃	褐灰色	B－N	〃	24.25～24.65	
71	71	3753	尖底	〃	灰褐色	D－8	〃	23.25～23.50	
72	72	2906	〃	〃	明赤褐色	D－4	〃	23.30～23.60	
73	73	3779	〃	〃	にぶい赤褐色	D－9	〃	23.30～23.50	
74	74	2213	平底	〃	にぶい褐色	C－4	〃	23.55～23.85	
75	75	1971	〃	〃	橙色	B－8	〃	23.75～24.05	
76	76	2856	〃	〃	〃	C－8	〃	23.50～23.80	



第23図　出土遺物　第２文化層の土器（1）拓影図



第24図　出土遺物　第２文化層の土器 (2) 拓影器

2) 石　器

昭和55年度において，本青苗遺跡三浦地点から出土した石器類は，総計102点あり，次のように石鏃，石槍，石匙，掻器，不定形石器類，打製石斧，石錘の8種類に大別することができる．なおそのうちとくに石鏃と石匙については，乙部町栄浜遺跡出土のものに近似するものが多く，これらについては同遺跡の調査報告を参考として，以下のような分類方法をとることにした。

石鏃分類法

石鏃の分類に当たっては，まず，時代別を「群」によって分け，次いで中分類で，A類：無柄のもの，B類：柄部の作りが明確でないもの，C類：有柄のものとし，「種」で示した細分類で，基部の形状により，a・b・cの3種を設け，さらに「種」の中で製作上違いが認められる場合について，a_1・b_1……のように分類することにした。

第I群（縄文早期）

A類：無柄で基部に抉り込みが作られているもの。

B類：柄部の作りが明確でないもの。

a種：五角形を呈するもの。

a_1～長径と短径の差が少ないもの。

a_2～第一次加工面の残されているもの。

a_3～第二次加工が全面に施されているもの。

b種：木葉形をなし，厚手で，第一次加工面が広く残されているもの。

第II群（縄文前期以降）

A類

a種：無柄で三角形を呈するもの。

a_1～体部の作りが直線的なもの。

a_2～体部の作りが曲線的なもの。

b種：基部に抉り込みが作り出されているもの。

b_1～体部の作りが直線的なもの。

b_2～体部の作りが曲線的なもの。

B類

a種：体部と柄部の区別が不明瞭で，菱形を呈するもの。

a_1～幅の広いもの。

a_2～幅の挟いもの。

b種：柳葉形で，第二次加工を全面に施されているもの。

c種：b種に類似するのが薄手で，最大幅が下位にあるもの。

c_1～両端が尖るもの。

c_2～下端がやや平担なもの。

C類

a種：体部と柄部が，明瞭に作り出されているもの。

a_1～体部が二第辺三角形を呈するもの。

a_2～体部が正三角形を呈するもの。

b種：体部と柄部との作り出しが，やや不明瞭なもの。

b_1～体部の側縁が彎曲して，柄部をなしているもの。

b_2～体部の側縁が，流線的に柄部に移行するもの。

石匙分類法

第Ⅰ群（縄文早期）

A類：体部が幅広で，先端が平担なもの。

B類：体部が先端に向かって，次第に細まるもの。

a種：先端が平担なもの。

b種：先端が斜傾するもの。

C類：体部の側縁が平行的なもの。

a種：先端が平担なもの。

b種：先端が斜傾するもの。

D類：体部の側縁が，先端の方向に広がるもの。

a種：先端が平担なもの。

b種：先端が斜傾するもの。

b_1～片面調整のもの。

b_2～両面調整のもの。

E類：体部が円型を呈するもの。

F類：横型のもの。

石鏃および石匙については，以上のような分類方法に従い，次に，本遺跡出土の石器類についての所見を述べることとする。

1．石鏃

第Ⅰ群

A類：本遺跡からは出土していない。

B類（第25図・第37図版1～5）：柄部の作りが明確でなく，形状が五角形を呈するものと木葉形のものとがある。

a種(1～5)：いずれも第一次加工面が僅かに残されている。1(a_1)は小形な石鏃で，体部の厚さが2～3mmと薄い。

第Ⅱ群

A類(第25図・第37図版25)：無柄の石鏃で，基部が直線的なものと抉り込みの作り出されているものとがある。

b種(25)：体部が直線的で，二等辺三角形を呈している。基部はあまり深く抉られていない。

B類(第25図・第37図版6～8，10～14，17，18，21～23，28)：体部と柄部の区別が不明瞭で，菱形を呈するもの，厚身で柳葉形のもの，柳葉形に類似しているが，薄身で最大幅が下位にあるものがある。

a種(17，22，23)：菱形を呈し，体部と柄部の区別が困難なもの。17(a_2)は片面に第一次加工面を多く残されている。

b種(28)：柳葉形をなし厚身で，全面に第二次加工わ施されている。

c種(6～8・10～14，18，21)：形状がb種と似ているが，体部は薄く，最大幅が下位にある。8・11～13は両端が尖るもので，11(c_1)・12(c_1)は他の石器に比べて，やや厚身である。下端がやや平担な6・8・10(各c_2)は小型で，全面に第二次加工が施されている。また，14は大きく，片面に第一次加工面が広く残されている。

C類(第25図・第37図版15，16)：有柄のもので，体部と柄部が明瞭に分けて作り出されている。

2．石槍(第25図・第37図版19，20，24，29，30)

19，20は魚形状を呈し，基部両端が外側に向かって突き出している。いずれも厚さが7mmと薄身で幅広である。また，全面に細密な第二次加工が施されている。なお，栄浜遺跡において，これと

同類のものが出土している。24は菱形を呈し，中央部に第一次加工面が僅かに残されている。29は短方形の先端を尖角化したもので，30は柳葉形をした細身のもの。ともに粗い作りである。

3．石匙

第Ⅰ群

A類：本遺跡では出土していない。

B類(第26図・第37図版32～35，40，47～50，52，55，56)：体部が先端に向かって細まるもので，先端が平担なものと斜傾しているものとがある。

a種(34，48，50，55)：34は右側面上位が丸味を帯び，比較的大きく，柄部のつまみが片方に寄っている。48も右側面に丸味をもつが，小形である。50は下位が破損している。55は小形である。

b種(32，33，35，40，47，52，56)：32は極めて大きく，側縁の中央部が外反している。33はやや小形のもので，右側縁が内反している。35，40は比較的大きめのもので，47，52，56は小形である。

C類(第26図・第37図版36～39，43，51，53，54)：体部の側縁が平行なもので，先端が角形のものと斜めなものとがある。

a種(51，53，54)：51はつまみが大きく，体幅が広い。53，54はつまみが小さく，小形である。

b種(36～39，43)：36～38はつまみが，やや左寄りに作られ，最大長が5.5～6cmの大きさである。39は小形で，43と同じくつまみが，真中に小さく作られている。

D類(第26図44，45)：体部側縁が先端に向かって広がるもので，先端が角形なものと斜めのものとがある。

b種(44，45)：先端が斜傾し，片面に第一次加工面が広く残されているもので，b_1タイプのもの。

E類(第26図・第37図版46)：体部が円形のものであるが，右側縁は直線的である。

F類(第26図・第37図版31)：先端が尖るもので，つまみのくびれ方が浅い。また，両側縁が外反しており，9cmと大形。

第Ⅱ群

A・B・D・E・F類は，本遺跡では出土していない。

C類(第26図・第37図版41，42)：先端部が尖るもので，体部側縁は直線的なものと彎曲するものと三角形を呈するものとがある。

b種(41，42)：体部が細目で，尖った先端が片方に寄き出している。

4．掻器(第27図・第37図版59～64)

6点出土している。60は全面に細かな第二次加工が施され，側縁が下位に向かって外反しており，また，先端部が丸味を帯びている。59は片面に第一次加工面が残されている。61，62は片面がほとんど第一次加工面のままである。また，62は上位に浅いくびれをもつ。63，64は先端部が尖り，やはり片面に第一次加工面が広く残されている。なお，60～62は両面加工のものであり，ナイフ類とすべきかもしれない。

5．不定形石器(第27図・第37図版57，第27図・第38図版65～70，72)

不定形な石器が9点出土している。57，65，66のように先端部が尖った小形のものと，67，68のように先端が丸味のあるものとがある。69，70，72は端部がやや角形に近いものである。

6．打製石斧(第29図・第38図版73，74)

大形のものであるが，薄身で第一次加工面が全体的に認められ，細かい剥離調整が側縁に僅かに施されている。

7．磨製石斧(第28図・第38図版75)

全面磨製品で，先端部は外反しており，刃部ははまぐり刃に作られている。

8．　石錘(第29図・第38図版76，77)
偏平な礫の両端に，打ち欠きを加えたもの。

なお，以上のほかにやや大形のフレィク（第28図・第38図版71）もある。

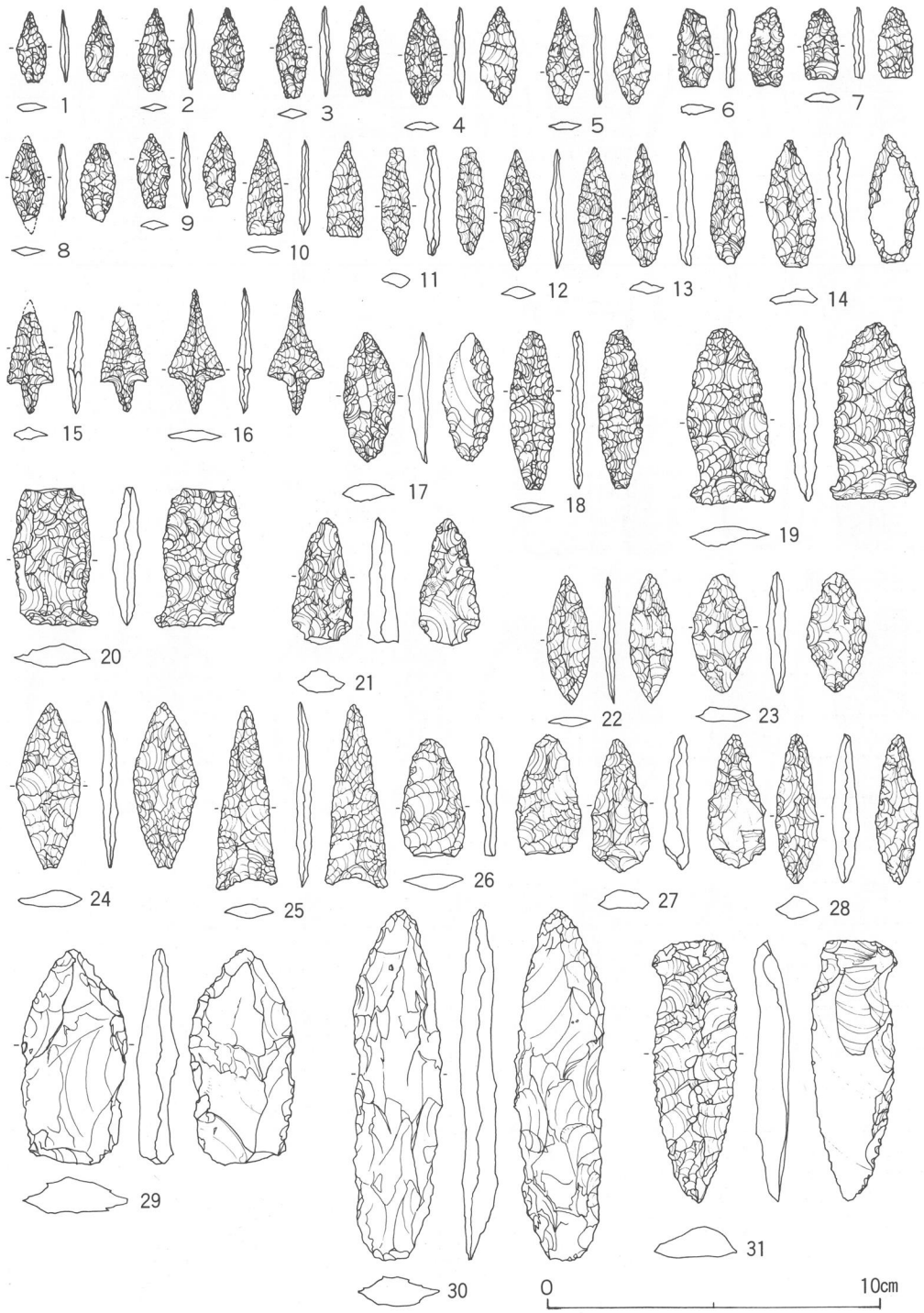
（岡山あけみ）

図番号	図版番号	遺物番号	名　称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　質	出土区	層位	出土レベル(m)	備　考
第25図−1	第37図版−1	2512	石　鏃	21.5	8.8	2.3	0.4	黒 耀石(A)	B−11	Ⅵ	23.60〜23.85	
2	2	451	〃	24.0	9.8	2.9	0.5	〃	D−2	〃	23.55〜23.90	
3	3	2530	〃	27.2	9.6	2.3	0.6	〃	B−11	〃	23.60〜23.85	
4	4	1316	〃	29.2	11.1	3.3	0.9	〃	B−5	〃	23.85〜24.25	
5	5	1083	〃	29.0	11.0	2.6	0.6	〃	C−4	〃	23.55〜23.85	
6	6	761	〃	(28.8)	11.0	2.5	0.7	〃	A−3	〃	24.30〜24.65	
7	7	2370	〃	(20.6)	(10.7)	3.2	0.7	〃	B−10	〃	23.60〜23.85	
8	8	1036	〃	(23.2)	11.0	2.7	0.5	〃 (B)	B−4	〃	23.90〜24.30	黒耀石.2種あり.
9	9	1048	〃	22.8	10.1	3.0	0.6	珪 質 頁 岩	B−4	〃	〃	
10	10	349	〃	28.5	11.0	2.9	1.0	〃	B−2	〃	24.05〜24.45	
11	11	1855	〃	33.1	9.5	5.0	1.5	〃	C−7	〃	23.50〜23.85	
12	12	1153	〃	36.0	10.6	4.1	1.3	〃	E−N	〃	23.65〜23.70	
13	13	1096	〃	36.9	11.2	4.8	1.8	〃	C−4	〃	23.55〜23.85	
14	14	1041	〃	38.2	15.5	6.0	3.3	〃	B−4	〃	23.90〜24.30	
15	15	1651	〃	(30.5)	13.8	4.7	1.3	〃	D−6	〃	23.30〜23.50	
16	16	1346	〃	37.5	16.9	3.8	1.2	〃	B−5	〃	23.85〜24.25	
17	17	1322	〃	39.2	15.9	5.5	2.8	黒 耀石(A)	B−5	〃	〃	
18	18	848	〃	(47.5)	19.4	4.0	2.4	〃	B−3	〃	24.00〜24.30	
19	19	1355	石　槍	53.2	24.3	7.0	8.4	〃 (B)	C−5	〃	23.45〜23.85	
20	20	1337	〃	(41.5)	22.8	7.8	7.2	〃	D−6	〃	23.30〜23.50	
21	21	252	石　鏃	37.8	18.7	10.2	5.7	〃 (A)	D−1	〃	23.55〜23.95	
22	22	977	〃	38.8	13.8	2.8	1.3	珪 質 頁 岩	D−3	〃	23.50〜23.70	
23	23	308	〃	35.7	17.9	5.4	3.1	〃	B−2	〃	24.05〜24.45	
24	24	326	石　槍	50.0	19.2	5.1	3.6	〃	B−2	〃	〃	
25	25	2130	石　鏃	54.2	17.8	4.9	3.7	〃	D−8	〃	23.25〜23.50	
26	26	1125	〃	35.4	19.4	5.0	3.8	〃	C−4	〃	23.55〜23.85	
27	27	229	〃	39.8	17.3	7.9	5.1	〃	C−1	〃	23.95〜24.25	
28	28	710	〃	44.6	13.2	8.1	4.5	〃	E−2	〃	23.59〜23.55	火山岩
29	29	1422	石　槍	64.3	32.4	11.8	23.2	砂質珪質頁岩	D−5	〃	23.25〜23.35	〃
30	30	1415	〃	105.6	26.8	10.5	34.4	〃	D−5	〃	〃	
31	31	965	石　匙	79.0	24.7	9.4	20.8	珪 質 頁 岩	D−3	〃	23.50〜23.70	
第26図−32	32	346	〃	104.0	30.2	7.0	23.2	〃	B−2	〃	24.05〜24.45	
33	33	291	〃	73.2	24.2	6.2	11.4	〃	A−2	〃	24.25〜24.70	
34	34	478	〃	64.2	33.8	6.2	9.1	〃	D−2	〃	24.05〜24.45	

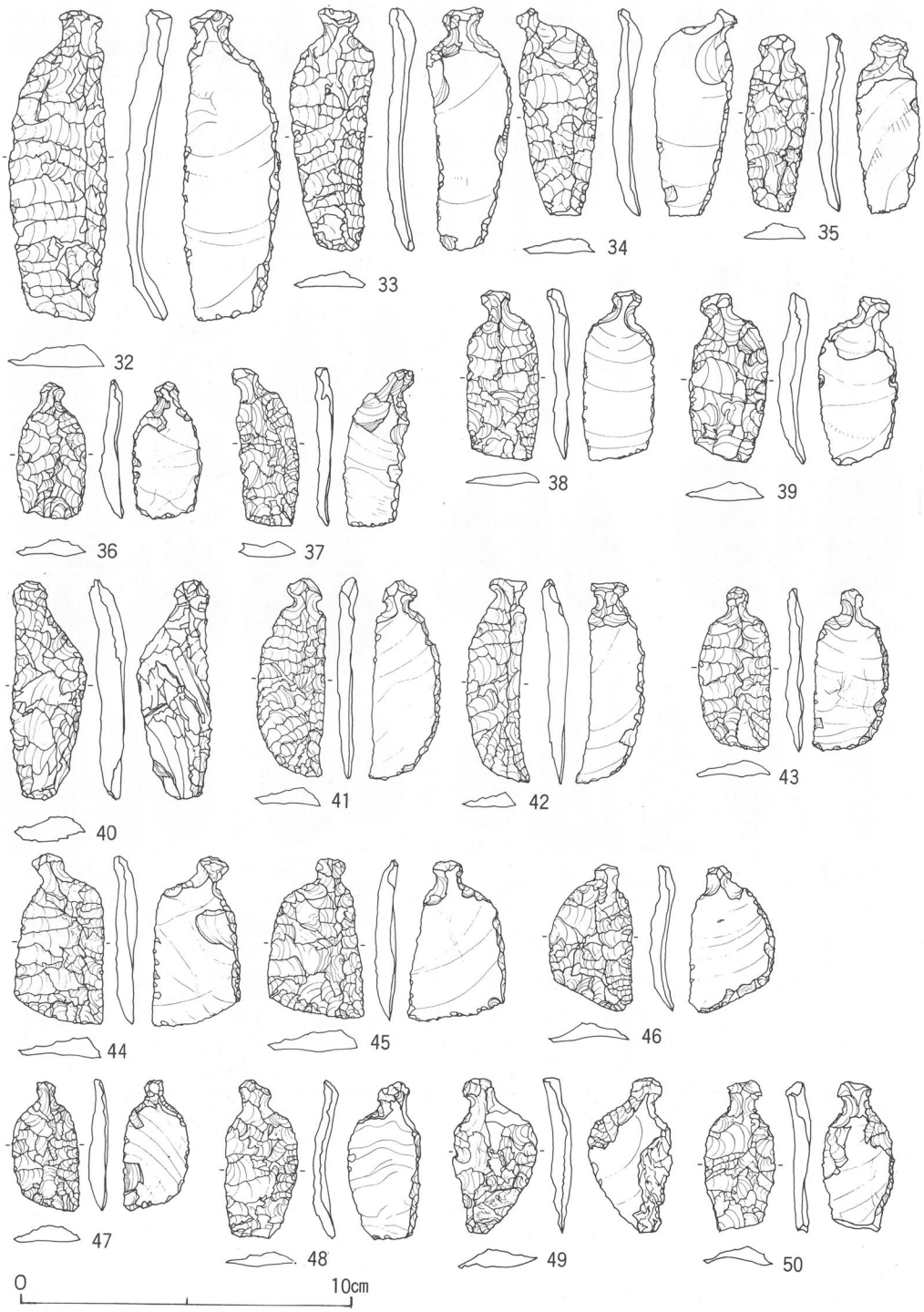
第４表　第２文化層の実測石器一覧表

図番号	図版番号	遺物番号	名　称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　質	出土区	層位	出土レベル(m)	備　考
第26図-35	第37図版—35	329	石　匙	53.3	18.6	5.0	5.8	珪質頁岩	B－2	Ⅵ	24.05～24.45	
36	36	851	〃	49.3	17.9	5.2	5.1	〃	B－3	〃	24.00～24.30	
37	37	903	〃	52.2)	21.8	4.5	5.5	〃	C－3	〃	23.65～24.00	
38	38	1642	〃	52.0)	23.3	6.7	7.6	〃	D－6	〃	23.30～23.50	
39	39	274	〃	41.0)	20.5	5.0	4.6	〃	A－2	〃	24.25～24.70	
40	40	1428	〃	67.1)	22.0	8.8	11.7	珪化木	D－5	〃	23.25～23.35	
41	41	583	〃	60.5)	20.4	4.3	6.0	珪質頁岩	D－2	〃	23.55～23.90	
42	42	2044	〃	62.4)	16.2	5.4	5.7	〃	C－8	〃	23.50～23.80	
43	43	856	〃	49.7)	21.6	4.5	5.2	〃	B－3	〃	24.00～24.30	
44	44	2640	〃	53.2)	27.4	6.0	8.8	〃	C－8	〃	23.50～23.80	
45	45	243	〃	48.4)	28.6	6.0	8.6	〃	D－1	〃	23.55～23.95	
46	46	1866	〃	43.3)	25.1	5.3	5.5	〃	C－7	〃	23.50～23.85	
47	47	1414	〃	40.0)	20.0	4.3	3.6	〃	D－5	〃	23.25～23.35	
48	48	341	〃	48.0)	22.4	3.4	4.7	〃	B－2	〃	24.05～24.25	
49	49	219	〃	56.7)	25.1	5.6	5.7	〃	C－1	〃	23.95～24.35	
50	50	286	〃	(44.1)	21.4	5.5	5.0	〃	A－2	〃	24.25～24.70	
第27図—51	51	340	〃	(49.0)	29.5	7.4	11.5	〃	B－2	〃	24.05～24.45	
52	52	1058	〃	(47.2)	26.8	8.5	11.4	〃	B－4	〃	23.90～24.30	
53	53	691	〃	44.5)	23.0	5.5	5.9	〃	E－2	〃	23.50～23.55	
54	54	1695	〃	43.2)	24.0	6.2	6.5	〃	D－6	〃	23.30～23.50	
55	55	285	〃	39.3)	20.0	4.6	3.9	〃	A－2	〃	24.25～24.70	
56	56	1742	〃	35.3)	15.1	3.3	1.7	〃	A－7	〃	24.10～24.30	
57	57	991	不定形石器	52.2)	35.0	19.6	22.9	〃	E－3	〃	23.40～23.50	
58	58		〃	32.4)	18.6	8.7	5.4	黒耀石(A)	?	〃	—	
69	59	1146	掻　器	(28.6)	21.9	5.5	3.8	珪質頁岩	C－4	〃	23.55～23.85	
60	60	413	〃	39.4)	18.2	7.0	6.0	〃	C－2	〃	23.80～24.20	
61	61	1413	〃	(58.1)	28.5	8.0	13.8	〃	D－5	〃	23.25～23.35	
62	62	916	〃	74.3)	26.4	7.8	21.6	〃	C－3	〃	23.65～24.00	
63	63	333	〃	65.6)	38.3	12.2	31.1	〃	B－2	〃	24.05～24.45	
64	64	327	〃	74.7)	56.1	16.0	54.2	〃	B－2	〃	〃	
第28図—65	第38図版—65	177	不定形石器	46.0)	20.3	12.8	11.8	〃	A－1	〃	24.50～24.70	
66	66	305	〃	55.7)	35.9	15.6	26.5	〃	B－2	〃	24.05～24.45	
67	67	181	〃	62.3)	50.2	12.0	38.4	〃	B－1	〃	24.25～24.60	
68	68	514	〃	(38.0)	50.3	15.0	31.5	〃	D－2	〃	23.55～23.90	

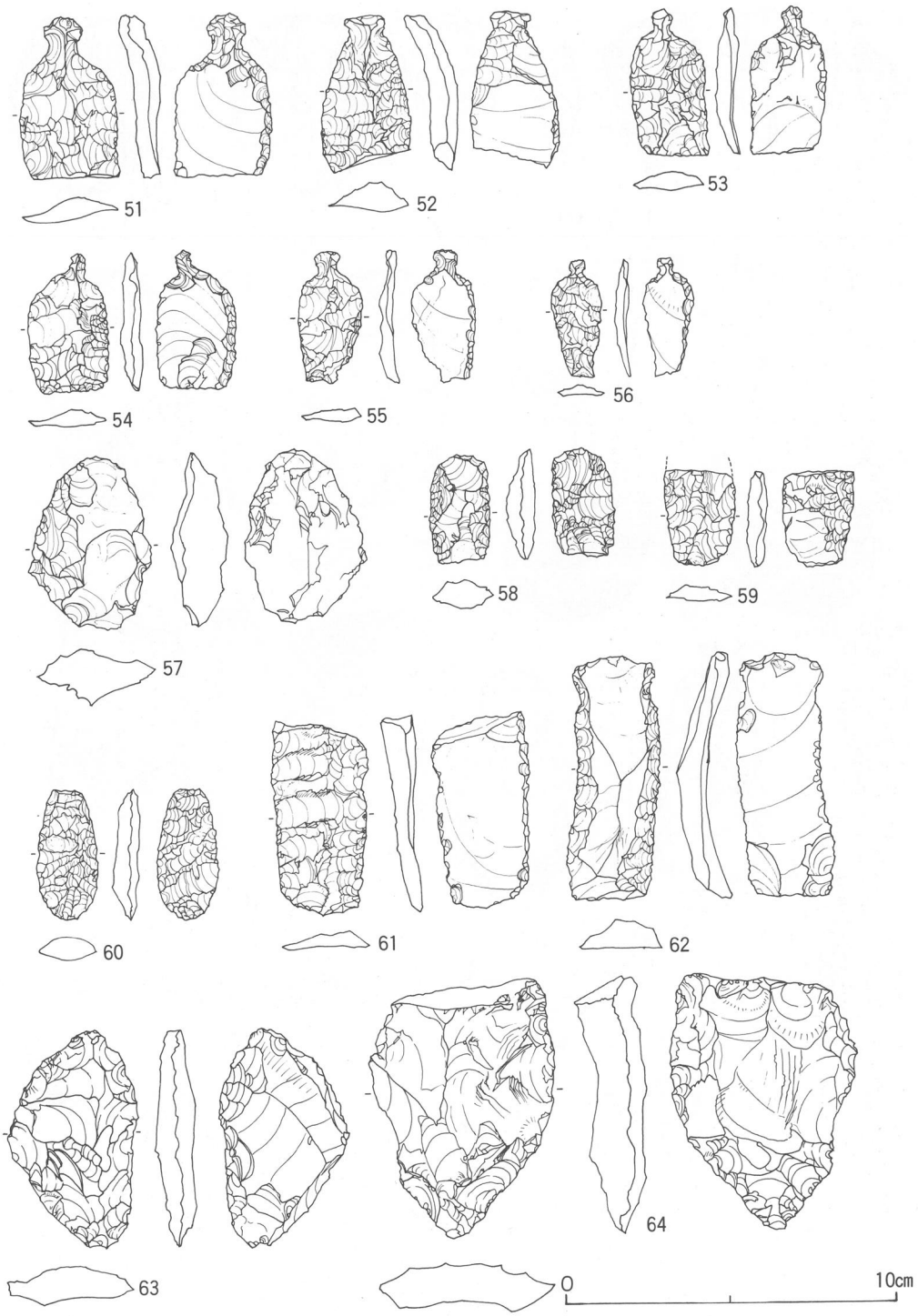
図番号	図版番号	遺物番号	名　称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　質	出土区	層位	出土レベル(m)	備　考
第28図—69	第38図版—69	370	不定形石器	76.1	37.2	11.2	37.2	珪質頁岩	C−2	Ⅵ	23.80〜24.20	
70	70	662	〃	55.3	44.7	15.0	36.7	〃	D−3	Ⅵ	23.50〜23.70	
71	71	177	フレイク	82.0	122.0	37.0	245.0	〃	A−1	〃	24.50〜24.70	
72	72	2088	不定形石器	82.4	47.9	21.3	84.6	〃	D−8	〃	23.25〜23.50	火山岩?
73	73	1604	打製石斧	200.5	67.8	35.2	370.0	〃	C−6	〃	23.45〜23.80	
74	74	1883	〃	211.0	96.6	24.7	520.0	珪質砂質頁岩	D−7	〃	23.25〜23.50	
75	75	1396	磨製石斧	82.0	48.2	18.0	105.0	蛇紋岩 ?	C−5	〃	23.45〜23.85	
76	76	208	石　錘	66.4	64.0	22.7	150.0	輝 緑 岩	B−1	〃	24.25〜24.60	
77	77	567	〃	51.3	56.0	10.7	39.1	安 山 岩	D−2	〃	23.55〜23.90	
—	—	1240	石　槍	(25.5)	17.7	4.5	1.4	黒耀石(A)	E−4	〃	23.30〜23.45	
—	—	1066	〃	(25.4)	17.0	4.7	2.1	〃	B−4	〃	23.90〜24.30	
—	—	332	石　匙	25.0	12.1	3.7	1.0	メノウ・石英脈	B−2	〃	24.05〜24.45	
—	—	1771	〃	43.4	28.0	7.4	7.5	珪質頁岩	A−7	〃	24.10〜24.30	
—	—	366	掻　器	(24.8)	22.2	5.1	2.0	ジャスパー	C−2	〃	23.80〜24.20	
—	—	815	〃	(25.0)	27.0	5.4	2.8	珪質頁岩	B−3	〃	24.00〜24.30	
—	—	987	〃	(54.0)	23.1	11.3	15.7	〃	E−3	〃	23.40〜23.50	
—	—	286	〃	61.8	35.7	6.0	12.9	〃	A−2	〃	24.25〜24.70	
—	—	321	〃	60.6	20.8	5.7	7.3	〃	B−2	〃	24.05〜24.45	
—	—	276	〃	(38.1)	24.6	5.5	5.1	〃	A−2	〃	24.25〜24.70	
—	—	396	〃	57.9	21.1	7.2	8.6	〃	C−2	〃	23.80〜24.20	
—	—	196	〃	47.2	21.8	9.4	8.7	〃	B−1	〃	24.25〜24.60	
—	—	216	〃	39.0	29.5	4.3	5.2	〃	D−8	〃	23.25〜23.50	
—	—	613	〃	37.0	25.0	5.5	5.5	〃	D−2	〃	23.55〜23.90	
—	—	1669	〃	(32.0)	27.4	4.9	2.7	ジャスパー(トラ石)	D−6	〃	23.30〜23.50	
—	—	2155	〃	(25.1)	29.0	7.3	6.4	珪質頁岩	E−8	〃	23.25〜23.30	
—	—	169	〃	(30.0)	28.0	5.0	4.0	黒耀石(A)	A−1	〃	24.50〜24.70	
—	—	216	〃	(41.1)	29.0	6.0	6.6	珪質頁岩	C−1	〃	23.95〜24.25	
—	—	2365	〃	(30.0)	25.0	5.7	5.5	〃	B−10	〃	23.60〜23.85	
—	—	2054	〃	57.1	27.9	10.5	16.1	〃	C−8	〃	23.50〜23.80	
—	—	1426	〃	71.4	25.2	7.0	12.6	〃	D−5	〃	23.25〜23.35	
—	—	1387	〃	79.2	35.1	6.6	20.4	珪質砂質頁岩	C−5	〃	23.45〜23.85	火山岩?
—	—	311	〃	72.5	33.9	11.4	29.0	珪 質 頁 岩	B−2	〃	24.05〜24.45	
—	—	338	〃	53.0	47.9	26.6	42.0	〃	B−2	〃	〃	
—	—	1624	〃	73.1	46.6	16.2	44.4	〃	C−6	〃	23.45〜23.80	



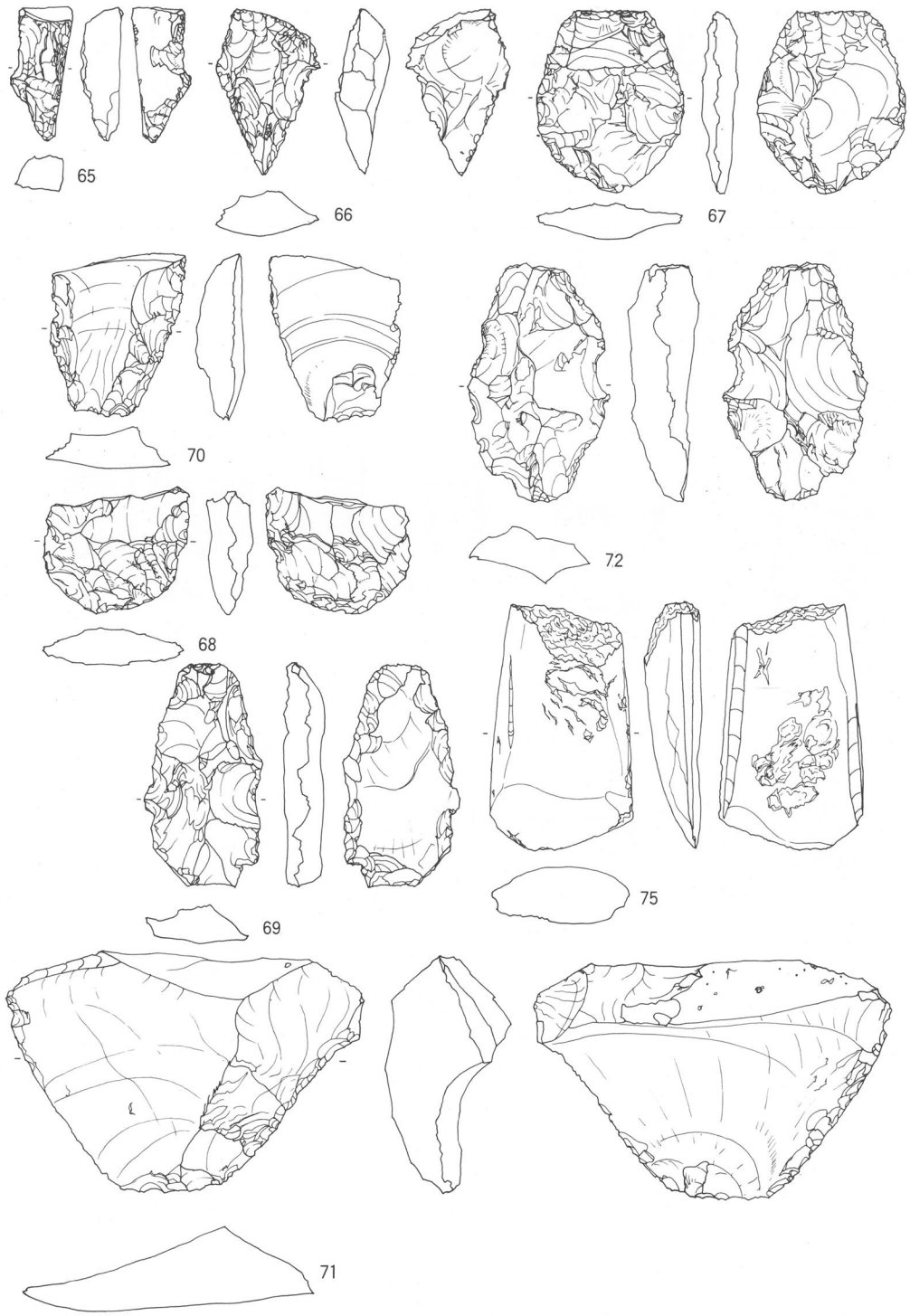
第25図　出土遺物　第２文化層の石器（1）実測図



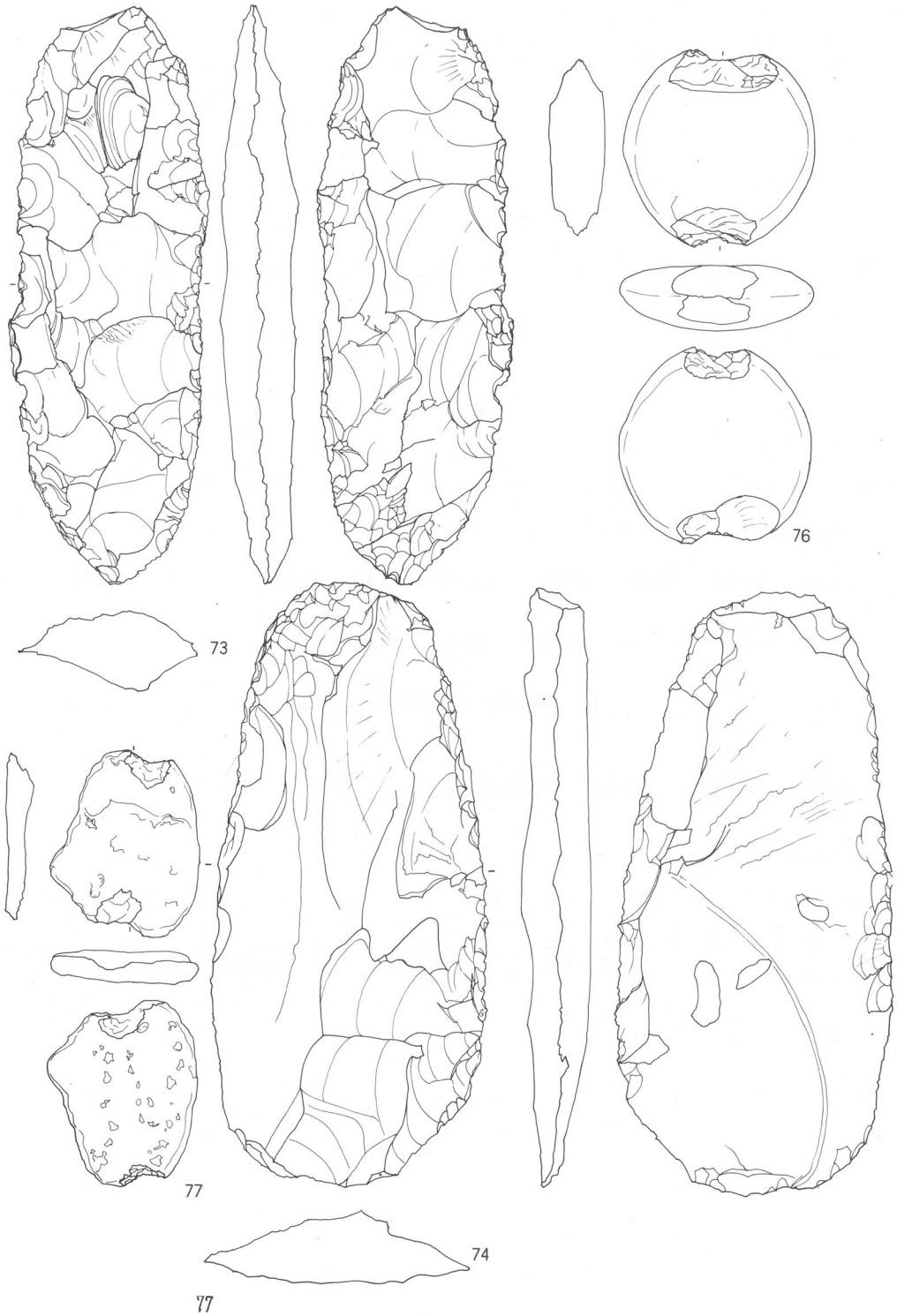
第26図　出土遺物　第２文化層の石器 (2) 実測図



第27図　出土遺物　第２文化層の石器 (3) 実測図



第28図　出土遺物　第２文化層の石器（4）実測図

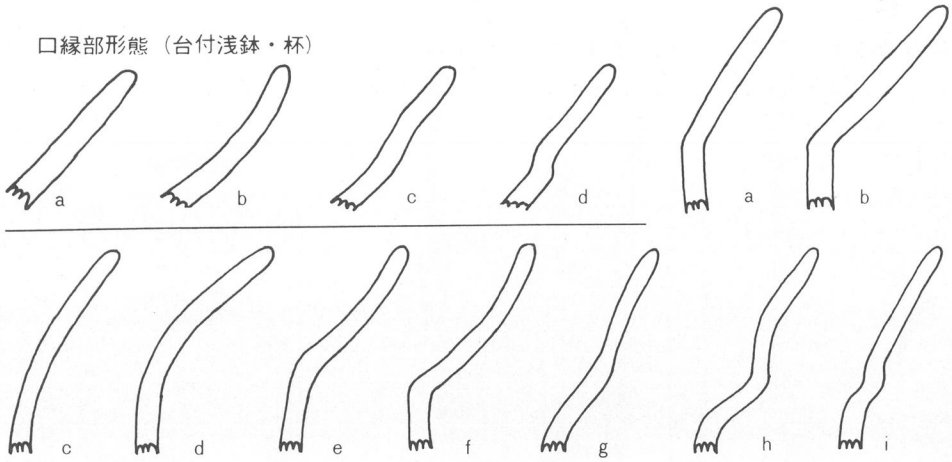


第29図　出土遺物　第２文化層の石器 (5) 実測図

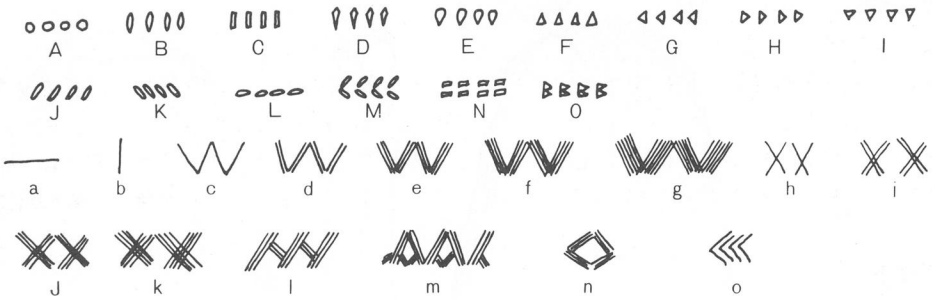
口唇部形態

口縁部形態（深鉢）

口縁部形態（台付浅鉢・杯）

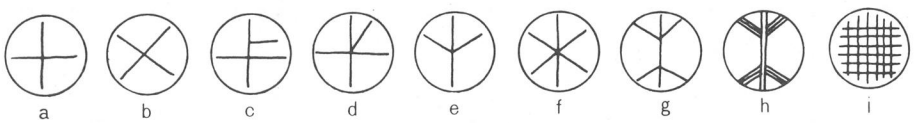


文様形態



底部形態

底部刻印



注　(1)平行沈線の記号a 右の数字は条数を表わす。（a・3＝3条の平行沈線）
(2)文様形態B,C,Dは同一施文具を凸,凹,平坦の各部位に施文した場合の変化と思われるが，土器面に表われた形態で分類した。

第30図　擦文土器の文様，形態分類模式図

V. 花粉分析

1. 試　料

試料は青苗遺跡のＣＮ区，乙部層直下の渡島大島ｂ層(Osb層)から採取された２点の土壌試料と，Ｃ－11区から発掘された擦文式土器内を充顚していた土壌試料の計３点で，いずれも擦文式土器文化の遺物包含層から採取されたものである。尚，Osb層から採取された試料の1点中には骨の細片が多く含まれており，塩酸を使用した際に反応し発泡する現象が見られた。

2. 処理方法

処理にあたっては他試料の混入がないように注意し，試料約500gを１ℓ用ビーカーにとり分析に供した。

アルカリ処理(10%KOH液に約24時間浸す)→水洗(上澄液が透明になるまで約２週間)→混酸処理(HCl：HNO_3：H_2Oの等量混液を加え湯煎約２分)→水洗(遠心分離で脱水後，約３回)→アルカリ処理(５%KOHを加え湯煎約２分)→水洗(３回)→比重分離($ZnCl_2$，比重2.0液を加え1,000r.p.m.で約60分)→比重液に浮いた部分を水洗→アセトリシス処理(CH_3COOH で脱水後，H_2SO_4：$(CH_3CO)_2O$の１：９液を加え約２分間湯煎し，遠心分離後に CH_3COOH で洗う)→水洗→HF処理(室温で24時間)→水洗の順に行い，グリセリンゼリーで封入し，マニキュア液でシールし各５～６枚のプレパラートを作成した。

検鏡は通常400倍で行ない，粒径の測定，写真撮影は600倍で行った。

樹木花粉を 200 個数えるまでに出現した花粉・胞子を無作為に同定，計数したが，樹木花粉の含有率が低かったことから全プレパラートを観察して樹木花粉200個を計数することができた。

表示にあたっては，樹木花粉は樹木花粉総数を基数とした百分率で，草木花粉・胞子については総花粉・胞子を基数とした百分率で表示した。又，樹木・草本花粉，胞子の出現比も百分率で表示した。

3. 分析結果

分析の結果，樹木花粉20属１科，草本花粉２属13科，胞子２科の22属16科の花粉・胞子が検出された。

その内訳及び刻当すると考えられる母植物は下記の通りである。

樹木花粉：*Picea*(トウヒ属：エゾマツ)，*Abies*(モミ属：トドマツ)，*Pinus*(マツ属：ハイマツ，ゴヨウマツ)，*Alnus*(ハンノキ属：ハンノキ，ケヤマハンノキ等)，*Betula*(カバノキ属：シラカンバ，ウダイカンバ等)，*Fagus*(ブナ属：ブナ)，*Corylus*(ハシバミ属：ツノハシバミ等)，*Carpinus*(クマシデ属：サワシバ等)，*Quercus*(コナラ亜属：コナラ，ミズナラ，カシワ)，*Ulmus*(ニレ属：ハルニレ，オヒヨウニレ)，*Juglans*(オニグルミ属：オニグルミ)，*Fraxinus*(トネリコ属：ヤチダモ，アオダモ)，*Magnolia*(モクレン属：コブシ，ホオノキ)，*Tilia*(シナノキ属：シナノキ，オオバボダイジュ)，*Acer*(カエデ属：イタヤカエデ，ハウチワカエデ，クロビイタヤ等)，*Araliaceae*(ウコギ科：ハリギリ，コシアブラ，タラノキ等)，*Sorbus*(ナナカマド属：ナナカマド，アズキナシ等)，*Salix*(ヤナギ属：ヤナギ類)，*Phellodendron*(キハダ属：キハダ)，*Rhus*(ウルシ属：ヤマウルシ，ヌルデ，ツタウルシ等)，*Hydrangea*(アジサイ属：ノリウツギ，ツルアジサイ等)。

草本花粉：*Artemisia*(ヨモギ属：エゾヨモギ，ムカシヨモギ等)，Carduoideae(キク亜科：アキタブキ，チシマアザミ，ヤマハハコ等)，Cichorioideae(タンポポ亜科：エゾタンポポ等)，Chenopodiaceae(アカザ科：アカザ等)，Caryophyllaceae(ナデシコ科：カワラナデシコ，ミミナグサ，ハコベ等)，

Ranunculaceae(キンポウゲ科：ニリンソウ，エゾトリカブト，カラマツソウ等)，Polygonaceae(タデ科：オオイタドリ，ミゾソバ，イヌタデ，エゾノギシギシ等)，*Fagopyrum*(ソバ属：ソバ)，Cruciferae(アブラナ科：ナズナ，タネツケバナ等)，Leguminosae(マメ科：クズ，ハマエンドウ，ヌスビトハギ等)，Umbelliferae(セリ科：エゾニユウ，ヤブジラミ，ミヤマトウキ等)，Rosaceae(バラ科：ワレモコウ，ダイコンソウ，オニシモツケ等)，Plantaginaceae(オオバコ科：オオバコ)，Gramineae(イネ科：ススキ，エノコログサ，ササ等)，Cyperaceae(カヤツリグサ科：アブラガヤ，スゲ等)。

胞子：Osmundaceae(ゼンマイ科：ヤマドリゼンマイ，ゼンマイ等)，Monolate type Spore(シダ類オシダ，メシダ等)。

4. 考　察

このたび分析を行ったNo.1，2の2点の試料はいずれも擦文式土器包含層より採取され，No.3の試料は土器内を充顚した土壌である。No.1，2とNo.3の間には時間的に多少のズレが予想されるが，ほぼ同時期の堆積物と考えていいであろう。

花粉構成も前2者と後者の間で*Alnus*，*Betula*の出現状況に若干の変化が見られる。しかし，全般に*Quercus*，*Ulmus*，*Fagus*，*Acer*，*Araliaceae*，*Alnus*，*Salix*等の広葉樹と針葉樹の*Abies*が優勢で，*Quercus*，*Ulmus*が優占し，草本花粉・胞子では*Artemisia*とGramineaeが優勢で，次いでRanunculaceae：Polygonaceae，Monolate type sporeが多く出現する傾向が各試料で共通している。これらのことから，時間的に大きなズレは考えられない。

また，No.1の試料からは*Fagopyrum*が1％弱ではあるが検出された。

1）古植生について

花粉・胞子の出現状況から，ミズナラ，ブナ，ハリギリ，ハルニレにトドマツが混交したミズナラ－ブナ群集と，コナラ・カシワ－カエデ群集からなる森林の存在と，ヨモギ，イタドリ，ススキを主とした草原の存在が予想される。しかし，花粉ダイヤグラム末尾に示した樹木・草木花粉と胞子の出現比からみて，樹木花粉の出現率は10％前後と低く，遺跡周囲に濃密な森林があったとは考えられない。むしろ遺跡の周囲にはヨモギ，オオイタドリ等を主とした高茎草群落や，たびかさなる森林の伐採後や山火事後など，従来の植生にいく度となく人手が加えられた時に見られるススキ等を主としたススキ群落がひろがり，遺跡の周囲には林がみられなかったか，又はまばらな林しか存在しなかったのではなかろうか。

当遺跡からは鉄滓，ふいごの羽口，広範囲に分布する鍛冶址が発掘されている。鍛冶を行う為に使用する燃料として樹木が伐採された可能性も充分考えられる。

2）Fagopyrum花粉について

No.1のOsb層から*Fagopyrum*(ソバ属)花粉が1％弱ではあるが検出された。

これまでに，天塩町天塩川口遺跡[1]，名寄市智東H遺跡[2]，千歳市三角山D遺跡[3]の擦文時代の住居址床面からソバ属の花粉が検出されている。また，擦文時代の豊富町豊富遺跡からはアワ，緑豆[4]が、根室市西月ケ丘遺跡からはモロコシ[5]，浦幌町若月遺跡からはオオムギ，アワ[6]がそれぞれ炭化した状態で出土している。その他に，鎌，U字形鍬先等の鉄製農耕具も各地の遺跡で発掘されている。

農耕作物の種子が出土するのは，多くの場合火災等で焼失した住居址内からである。これまでに発掘された擦文時代の住居址の数や，その中で焼失した住居址がどれほどの数になるかは知らないが，確率としては低いものであろう。その焼けた住居址の中から農耕作物の種子が炭化した状態で出土するという事実は，農耕作物が広く普及していたが，火災をうけない住居址中のものは土壌中で腐蝕してしまい，たまたま火災をうけ炭化したもののみが残っていたとは考えられないであろうか。

これまで報告された資料等を含めて考えた場合，ソバの種子こそ未だ発見されていないが，アワ，モロコシ，オオムギ，緑豆とともにソバが栽培されていた可能性が強いのである。

Osb層からは1％弱の *Fagopyrum* が確認されただけであるが，*Fagopyrum* は虫媒花で花粉の生産量が少なく，あまり遠くまで花粉が飛散しないこと，畑地雑草として主に耕作地で多く確認されるアカザ，ハコベ等の花粉が検出されていることなどから，遺跡の近くでソバが栽培されていたと考えられる。

日本で知られているソバには栽培種の *F. esculentum*（食用ソバ）と *F. cymosum*（シャチクリソバ）があるだけである。その他に野生のソバがあったとか，沖積層の古い頃の自然地層から *Fagopyrum* 花粉が検出されたという報告はいまのところない。擦文時代の遺跡から検出される *Fagopyrum* 花粉は先に述べた2種のソバのうちいずれかのソバの花粉と考えられるが，現在のところ栽培種の *F. esculentum* の可能性が強い。

奥尻町内では当遺跡の他に，東風泊遺跡の縄文時代晩期及び続縄文時代恵山文化期の遺物包含層から *Fagopyrum* 花粉が検出されており，日本海に浮び，対島海流がぶつかる奥尻島には縄文時代の終り頃にすでにソバが渡り，栽培されていたようである。

しかし，その栽培形態，規模については現在のところ不明である。

参　考　文　献

1）　山田悟郎(1975)：天塩川口遺跡の花粉分析，天塩川口遺跡，天塩町教育委員会。

2）　————(1977)：名寄市智東遺跡の花粉分析，名寄市文化財調査報告書，名寄市教育委員会。

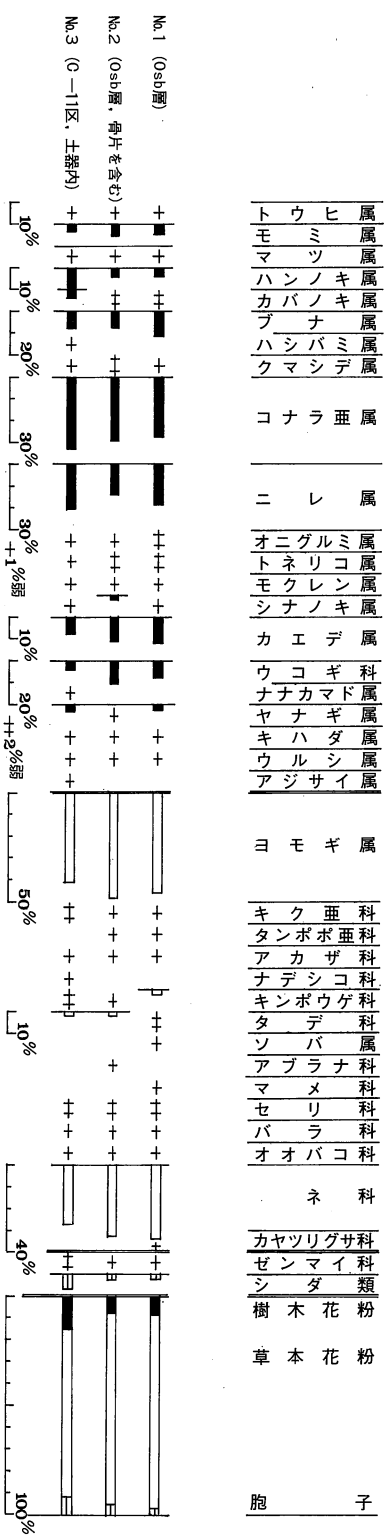
3）　————(1978)：住居址内から検出された花粉について，千歳市文化財調査報告書Ⅲ，千歳市教育委員会。

4）　河野広道(1959)：北海道出土の大形U字形鉄器について，北海道教育大学考古学研究会連絡紙，19号。

5）　八幡一郎他(1966)：北海道根室の先史遺跡，根室市教育委員会。

6）　後藤秀彦(1974)：十勝太若月，第二次発掘調査，浦幌町

7）　山田悟郎(現在印刷中，奥尻町東風泊遺跡の分析結果)



第5表　花粉分析表

1. *Picea*（トウヒ属）　No. 1
2. *Abies*（モミ属）　No. 1
3. *Alnus*（ハンノキ属）　No. 1
4. *Alnus*（ハンノキ属）　No. 3
5. *Betula*（カバノキ属）　No. 3
6. *Betula*（カバノキ属）　No. 1
7. *Fagus*（ブナ属）　No. 2
8. *Fagus*（ブナ属）　No. 2
9. *Juglans*（オニグルミ属）　No. 1
10. *Quercus*（コナラ亜属）　No. 1
11. *Quercus*（コナラ亜属）　No. 2
12. *Acer*（カエデ属）　No. 3
13. Araliaceae（ウコギ科）　No. 3
14. Araliaceae（ウコギ科）　No. 1
15. Caryophyllaceae（ナデシコ科）　No. 3
16. *Artemisia*（ヨモギ属）　No. 1
17. *Artemisia*（ヨモギ属）　No. 3
18. Umbelliferae（セリ科）　No. 3
19. Umbelliferae（セリ科）　No. 2
20. Ranunculaceae（キンポウゲ科）　No. 1
21. Ranunculaceae（キンポウゲ科）　No. 1
22. Polygonaceae（タデ科）　No. 2
23. Polygonaceae（タデ科）　No. 3
24. *Fagopyrum*（ソバ属）　No. 1
25. Chenopodiaceae（アカザ科）　No. 1
26. Gramineae（イネ科）　No. 3
27. Gramineae（イネ科）　No. 1
28. Monolate type Spore（草シダ類）　No. 1

No.1（乙部層下Osb層）
No.2（乙部層下骨片を含むOsb）
No.3（C-11区，土器内）

No. 1 ～ 2　約800倍
3 ～28　約600倍

Ⅳ．まとめ

発掘調査を実施した面積は840.5㎡，近年では小面積の部類に入るが，小人数のこともあり約2ヶ月余を要した。該地の重要性は前回調査で指適したように，いくつかの新知見がもたされた。以下に要約する。

1．焼土と配石を伴う遺構は，本調査以前のものを加えると，発掘区の西北150mの墓所前三叉路と北50mにある青苗貝塚および台地を結んだ，広い範囲に分布することになる。それが鍛治址なのか，小規模な製錬が行われたものなのか，即断することはできないが，多量の鉄滓，溶滓，鉄製品の出土は，そこに鉄に関する大規模な生産遺構が存在したことを意味している。

2．石組みと弧状溝の近くから，土製模造品である土製鏡，土製勾玉と石製模造品の勾玉が出土した。このなかで土製鏡は初見のものである。これらは葬祭儀礼，あるいはある種の目的をもった祭祀に使用されたものと看すことができるが，遺構とどのような形で結び付くのか，島嶼という立地条件も含めて，今後の類例に注目したい。

3．竪穴は1軒を確認したが，床面を水平にするのに，高い部分を削土したものと見られ，いわゆる掘立式のものであろう。柱穴はⅡ～Ⅳ層間で落ち込みを認めたものを，擦文期のものとして取扱ったが，Ⅵ層以下で検出された多数の柱穴群の中にも，擦文期のものが相当数混在しているものと推測される。

4．擦文土器の出土量は17187点，そのなかで31個体が完全復元，11個体が一部復元できた。これらの土器は出土状況から，つぎのようなグルーピングが可能である。

a．B－3区の住居址床面から出土した，第12図8，10，第13図22，27，第14図33図33，35，39の土器。

b．D－3区の焼土上面から出土した第11図5，7，第12図11，13，19，第13図29，第14図37，38の土器。

c．C－4区の不規則な楕円状のピット横から一括出土した，第13図23，30，第14図34，36の土器。

d．C－8区の弧状溝と焼土址との間に一括出土した，第11図，第12図9，第13図20，第14図41の土器。

e．C－10区弧状溝の内側で，焼土址との間から出土した，第11図1，第12図12の土器。

5グループのなかで，aは擦文土器の一般なセットであるが，bは外耳把手の付いた椀形土器，俵形の甕形土器，壺形土器など土師的色彩の強い異質のものが含まれている。c，d，eはaと同時期のものと見て大過ないだろう。

5．土器は基本的に1)横走沈線文のみを施したもの，2)横走沈線文または刺突列を復合したものに，鋸歯状文を配したものからなっている。これは青苗遺跡の擦文土器の典型的なコンポジションである。

a．文様帯，口縁幅を横走沈線文または刺突列，段括れで区画するものが多い。

b．施文は口縁部，あるいは口縁部上半に限定され，胴部に及ぶ例は殆んどない。（全調査を通じても10例に満たない。）

c．鋸歯状文は凡そ擦文全期に亘って見られるが，本遺跡での形状は，単純な類型のものが，文様の主体的構成員となっている。X状文についても同様である。

d．横走沈線文の形状は比較的太く，段状に近いもので青森県津軽地方で第三の土器と呼ばれているもの[1]，石狩低地帯で古い時期に編年されているものの沈線文と共通する。

6．台付浅鉢形底部の刻印は，糸切り底の土師器に見られる篦書記号と同じものもあるが，より変化に富んでいる。

7. 本遺跡（山本台地・三浦地点）の第１文化層・擦文土器の編年的位置は，宇田川編年[2]の前期～中期初葉にあたるものと考えられる[3]。また，第２文化層出土の土器は住吉町・中野Ⅰ群・Ⅴ群，東釧路Ⅲ，梁川町Ⅲ群２類，中茶路，東釧路Ⅳ，栄浜１郡C類等に相当する縄文早期～前期に属す

（佐藤忠雄）

註

1）　鈴木克彦　1974　「青森県の擦文文化」どるめんNo22

2）　擦文土器の編年に関しては藤本強，佐藤達夫，大井晴男，石附喜三男，菊池徹夫らによる発表があるが，宇田川洋　1977「北海道考古学講座７　擦文期」『北海道史研究』13で，宇田川自身の編年も加えて整理されている。

3）　青苗遺跡の擦文土器の編年については，時間的制約があり，詳しく述べることができなかった。佐藤忠雄編　1980『奥尻島青苗遺跡』（本文編）を参照されたい。

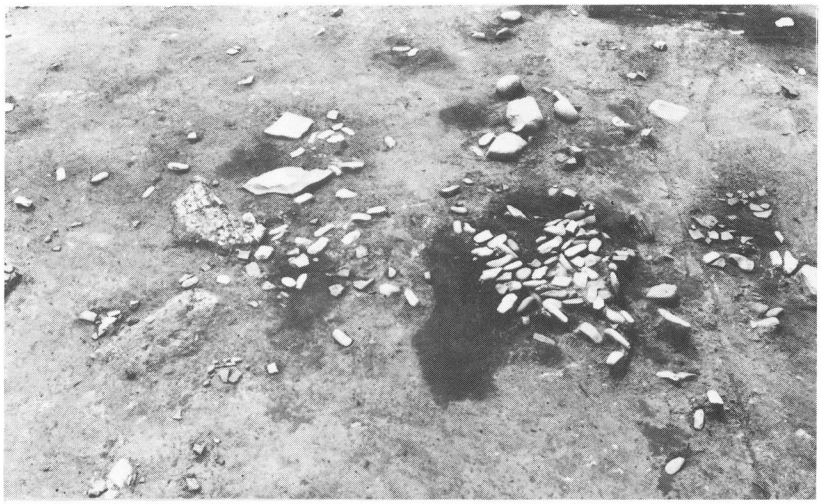
参考文献

穴沢義功　1975　「製鉄遺跡」『考古ジャーナル』No.105
石附喜三男　1968　「擦文式土器の初現的形態に関する研究」『札幌大学紀要教養部論集１』
　　1972　『伊茶仁遺跡』
伊藤玄三　1979　「土師器から擦文へ」『どるめん』No.22所収
上野秀一・羽賀憲二　1974　『札幌市文化財調査報告書』Ⅴ
氏家和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14
宇田川　洋　1977　「北海道考古学講座　7　擦文期」『北海道史研究』13
　　1977　『北海道の考古学２』北海道ライブラリー11
　　1979　「”70年代擦文文化の研究」『どるめん』No.22
浦幌町教育委員会　1973　『十勝太古川・若月遺跡発掘調査報告書』
大井晴男　1972　「北海道東部における古式の擦文式土器について」『常呂』
大谷敏三　1978　『祝梅三角山Ｄ遺跡における考古学的調査』
大沼忠春・佐藤隆広　1976　「江差町厚沢部河口遺跡の採集資料」『桧山考古学研究会会誌』５
大沼忠春・大沼あさ子　1977　「元和８遺跡の調査」『元和』（続）
大沼忠春　1979　「北海道中央部の擦文文化」『どるめん』No.22
大場利夫・棚瀬善一・金子有明　1963　『寿都遺跡』
大場利夫・石川徹　1966　『恵庭遺跡』
菊池徹夫　1970　「擦文式土器の形態分類と編年についての一試論」『物質文化』15
　　1972　「擦文式土器基本形態の形成」『北海道考古学』８輯
　　1979　「擦文文化の鉄器について」『どるめん』No.22
北林八州晴　1971　「津軽半島における擦文土器の新資料」『北海道考古学』７輯
窪田蔵郎　1973　『鉄の考古学』考古学選書９
　　1976　「発見鉄滓の考察」『考古ジャーナル』No.124
河野本道　1964　「天塩町河口基線遺跡の発掘調査資料報告」『アイヌモシリ』７・８
駒井和愛　1963　『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』上巻
　　1964　『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻
桜井清彦　1958　「北海道奥尻島青苗貝塚について」『古代』27
桜井清彦・山口敏・藤本英夫・三橋公平・山野秀二・菊地徹夫　1975　『烏棚舞』
斉藤忠・岩崎卓也　1966　「大館森山遺跡」『岩木山』所収
佐藤忠雄　1979　「北海道南西部の擦文文化」『どるめん』No.22
佐藤忠雄・山田忍　1974　『上島松遺跡』
　　1978　『青苗遺跡発掘調査概報』
佐藤達夫　1972　「擦文土器の変遷について」『常呂』
佐藤隆広　1980　『ホロナイポ遺跡』
杉原荘介・大塚初重　1974　『土師式土器集成』本編・図版１・２・３・４
鈴木克彦　1979　「青森県の擦文文化」『どるめん』No.22
高橋正勝　1971　『柏木川―擦文時代・縄文時代晩期の墳墓と縄文時代中期の住居址―』
竹田輝雄・大島和夫・木村利雄・関井保子　1963　「発足岩陰遺跡」『小樽市博物館紀要』第２号

橋　善光　1968　「青森県脇野沢村桂沢の擦文土器について」『考古ジャーナル』No.22
　　1973　「大間崎烏間遺跡の土器について」『北海道考古学』第9輯
　　1974　「北海道古代文化の本州北部への波及」『北海道史研究』3
戸沢　武　1966　「大館森山・大平野両製鉄址について」『岩木山』所収
名取武光・峰山巌　1962　「アヨロ遺跡」『北方文化研究報告』17
成田末五郎・小山連一　1966　「大館森山製鉄炉遺構」『岩木山』所収
平山久夫　1967　「津軽平野における土師器の低地遺跡」『考古ジャーナル』No.13
藤本　強　1972　「常呂川下流域の擦文土器について」『常呂』
　　1979　「道東・常呂川流域の擦文文化」『どるめん』No.22
藤本　強　宇田川　洋　1977　『岐阜第二遺跡』
北大解剖教室調査団　1963　「小幌洞窟遺跡」『北方文化研究報告』18
前田　潮　1977　「北海道の内耳鍋について」『古代・中世の社会と民族文化』
峰山巌・宮塚義人　『オピラウシュペツ遺跡』小平町文化財シリーズ1
峰山巌・金子浩昌・松下亘・竹田輝雄　1971　「天内山―続縄文・擦文・アイヌ文化の遺跡―」
宮下正司　1955　「桧山郡に存在する先史時代の遺跡―江差町―」『桧山南部の遺跡』

図　版

第１図版　青苗遺跡の遠景
第２図版　発掘区の全景



第３図版　Ｃ－７区
配石と遺物の
出土状態

第４図版　Ｂ－２区
配石と遺物の
出土状態

第５図版　Ｃ－４区
配石と遺物の
出土状態

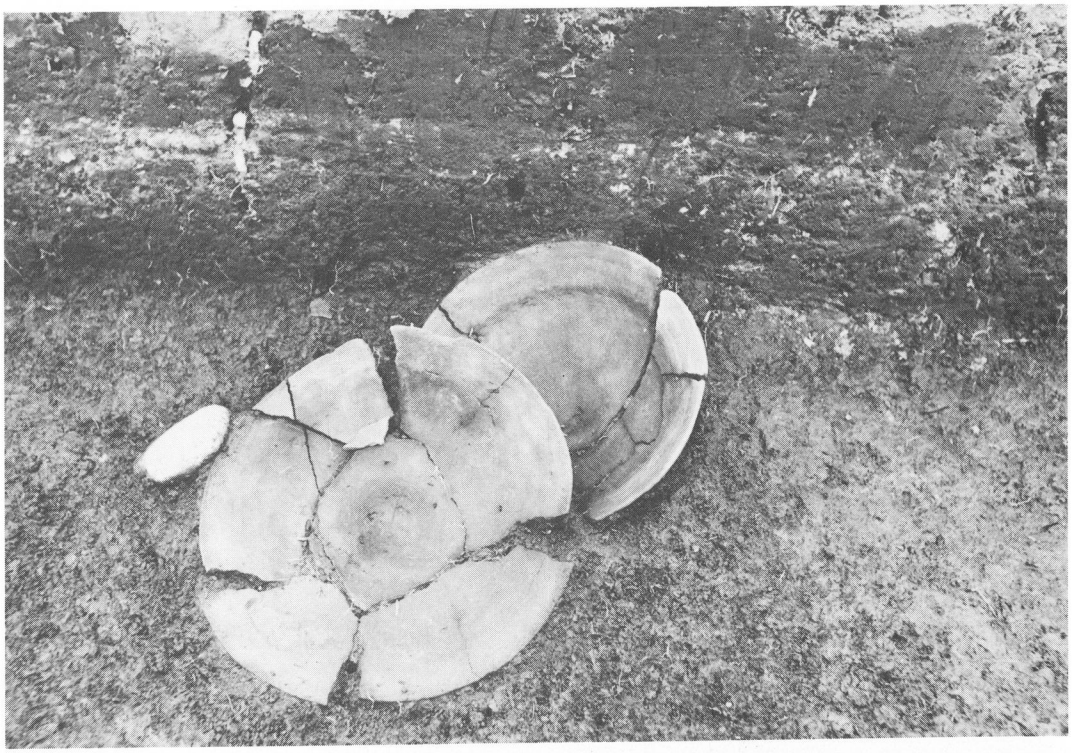
第６図版　Ｃ－３区
配石と遺構　(1)

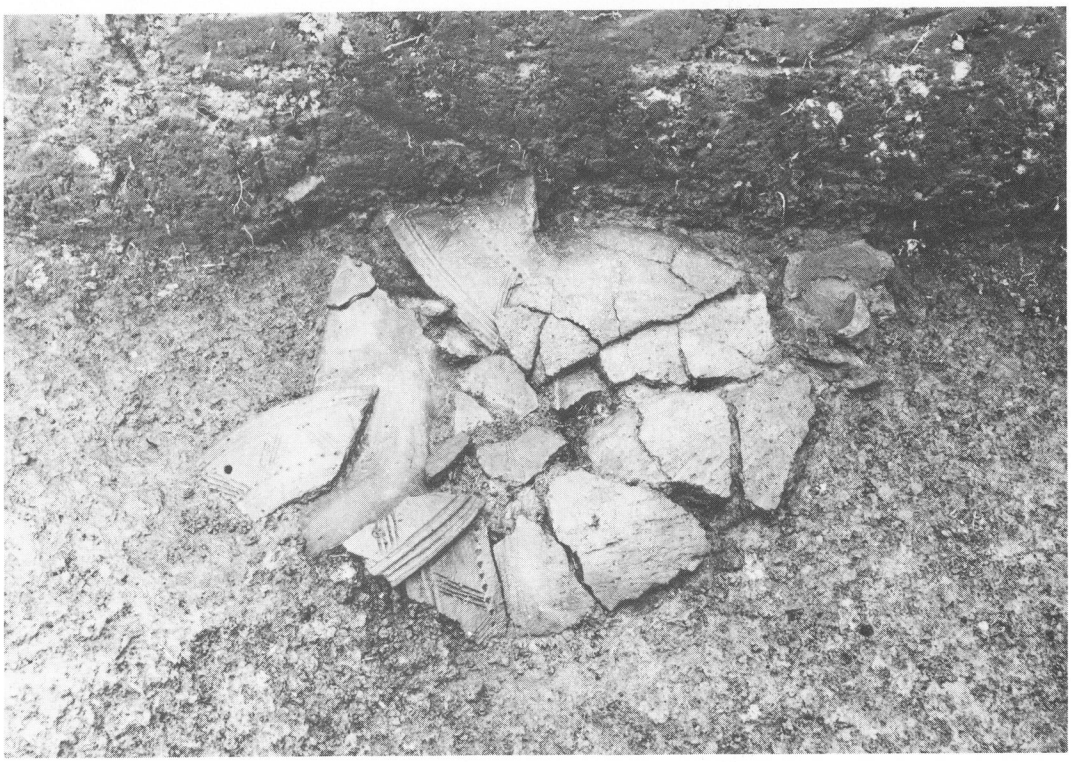
第７図版　Ｃ－７区
配石と遺構　(2)

第８図版　Ｃ－５区
配石と遺構

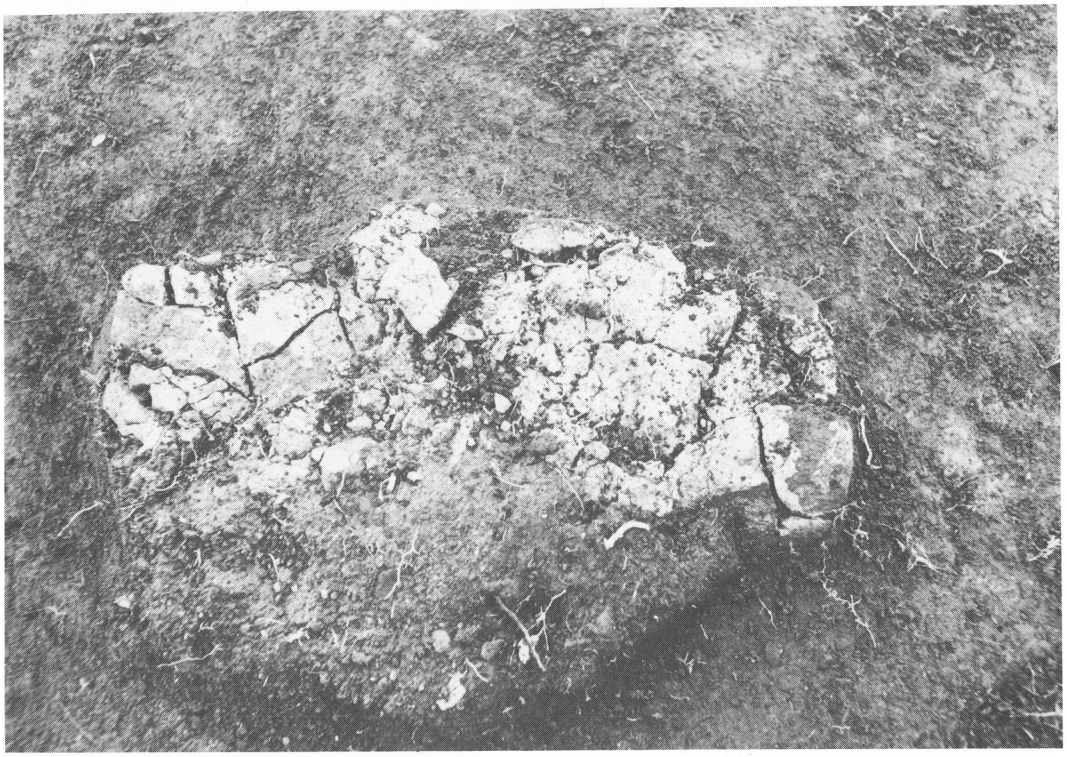
第９図版　Ｃ－３区　焼土址，遺物の出土状態
第10図版　Ｃ－３区　焼砂岩の出土状態

第11図版　C，D—１区　石組みの出土状態
第12図版　C，D—１区　南の石組み，遺物の出土状態

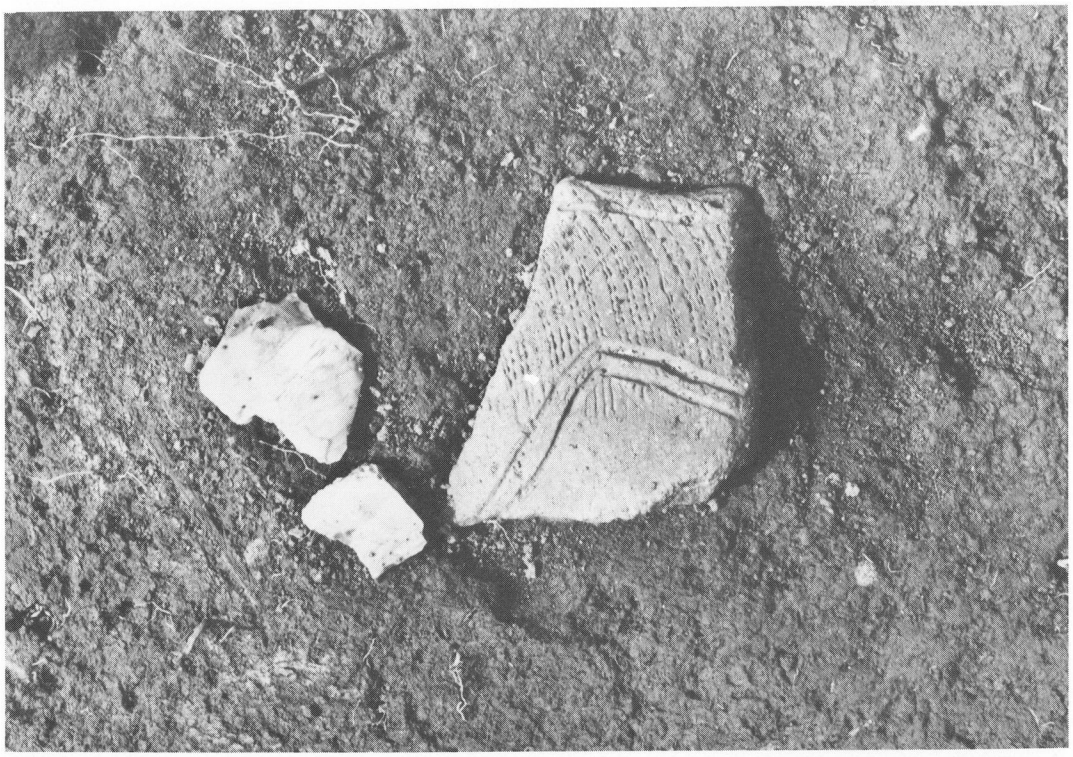




第13図版　Ｂ－３区　土器の出土状態　(1)
第14図版　Ｂ－３区　土器の出土状態　(2)

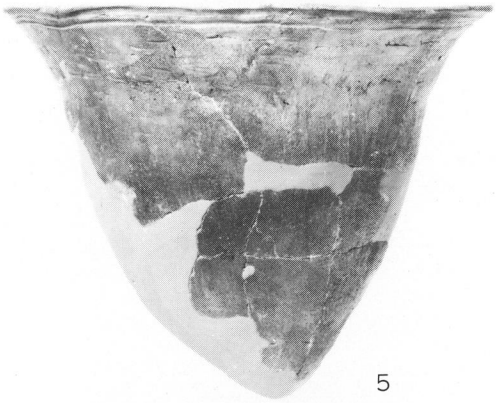


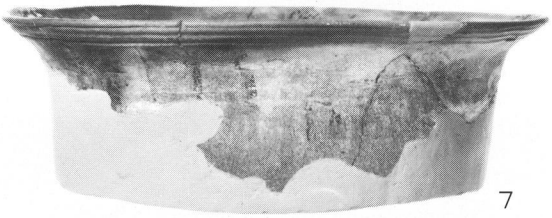
第15図版　ＥＮ区　鉄滓の出土状態
第16図版　Ｅ―６区　粘土塊の出土状態



第17図版　B—1区　奥尻ロームA層，遺物の出土状態
第18図版　B・C・D・E—3・4区，奥尻ロームB層検出の柱穴

第19図版　完掘後の発掘区と弧状溝　(1)
第20図版　完掘後の発掘区と弧状溝　(2)



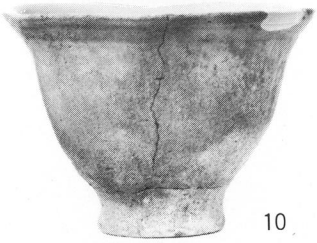


第21図版　出土遺物　第１文化層の土器（1）

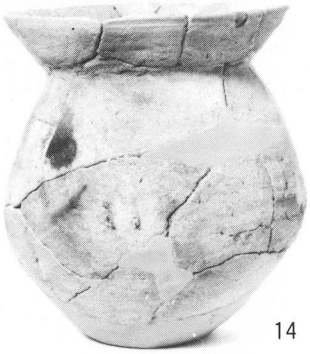
8

13

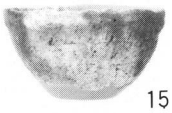
9


10

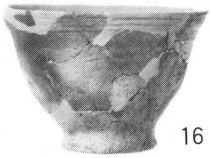
11


14

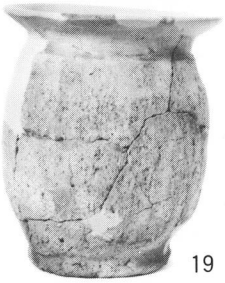
12


15

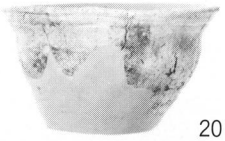
18


16

17


19

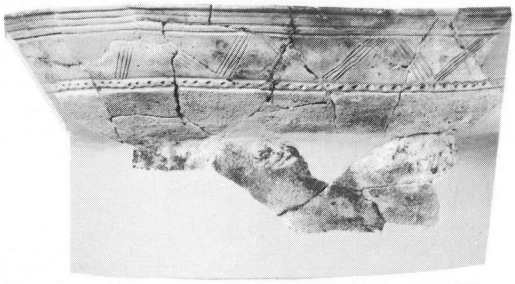
第22図版　出土遺物　第１文化層の土器　(2)



20

24

22



28

23

27

26

29a

29b

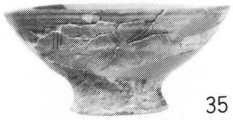
第23図版　出土遺物　第１文化層の土器　(3)

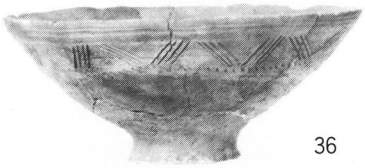
31

32

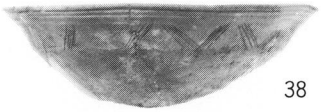
33

34


35


36

37


38

39

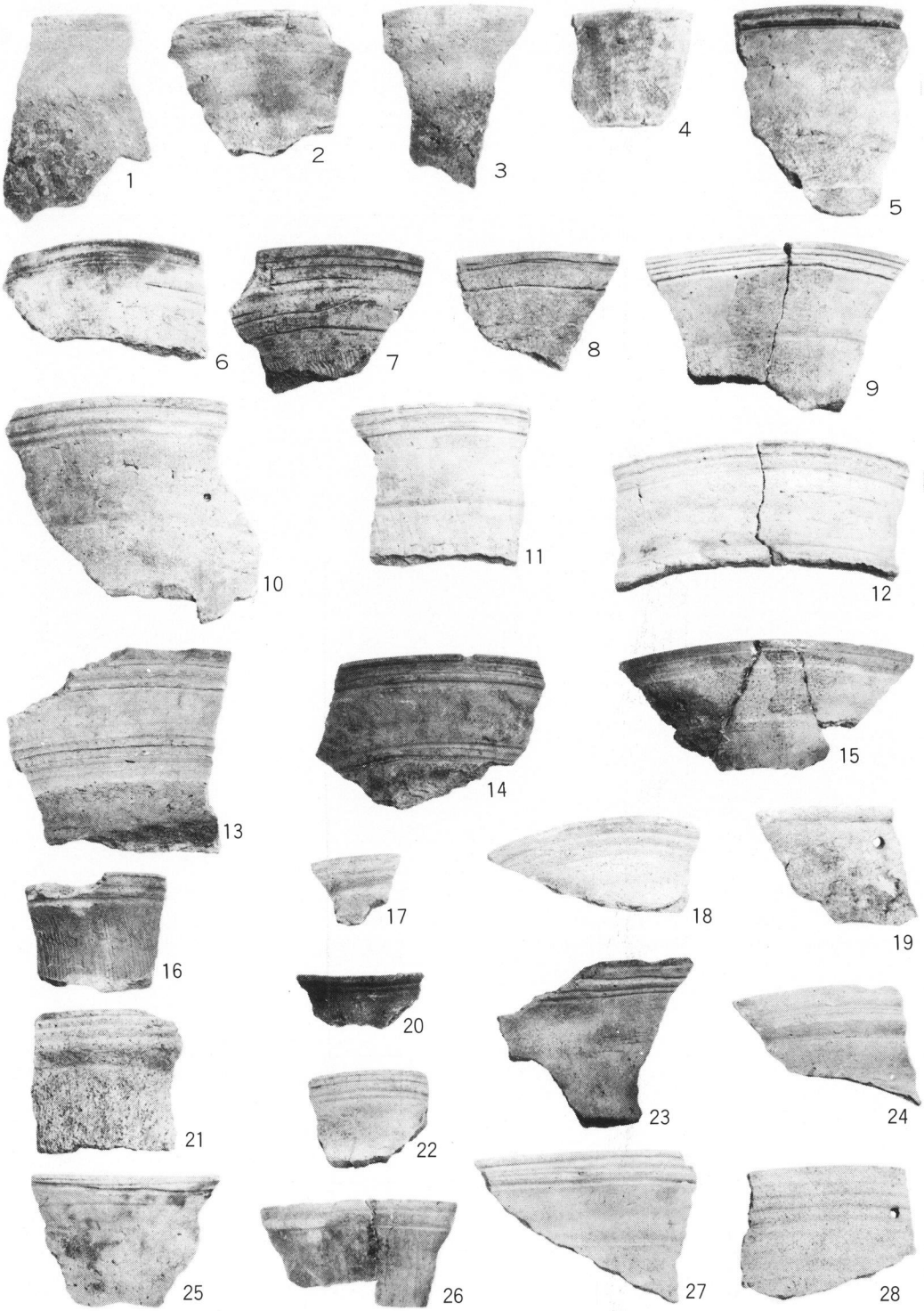
40

41

42a

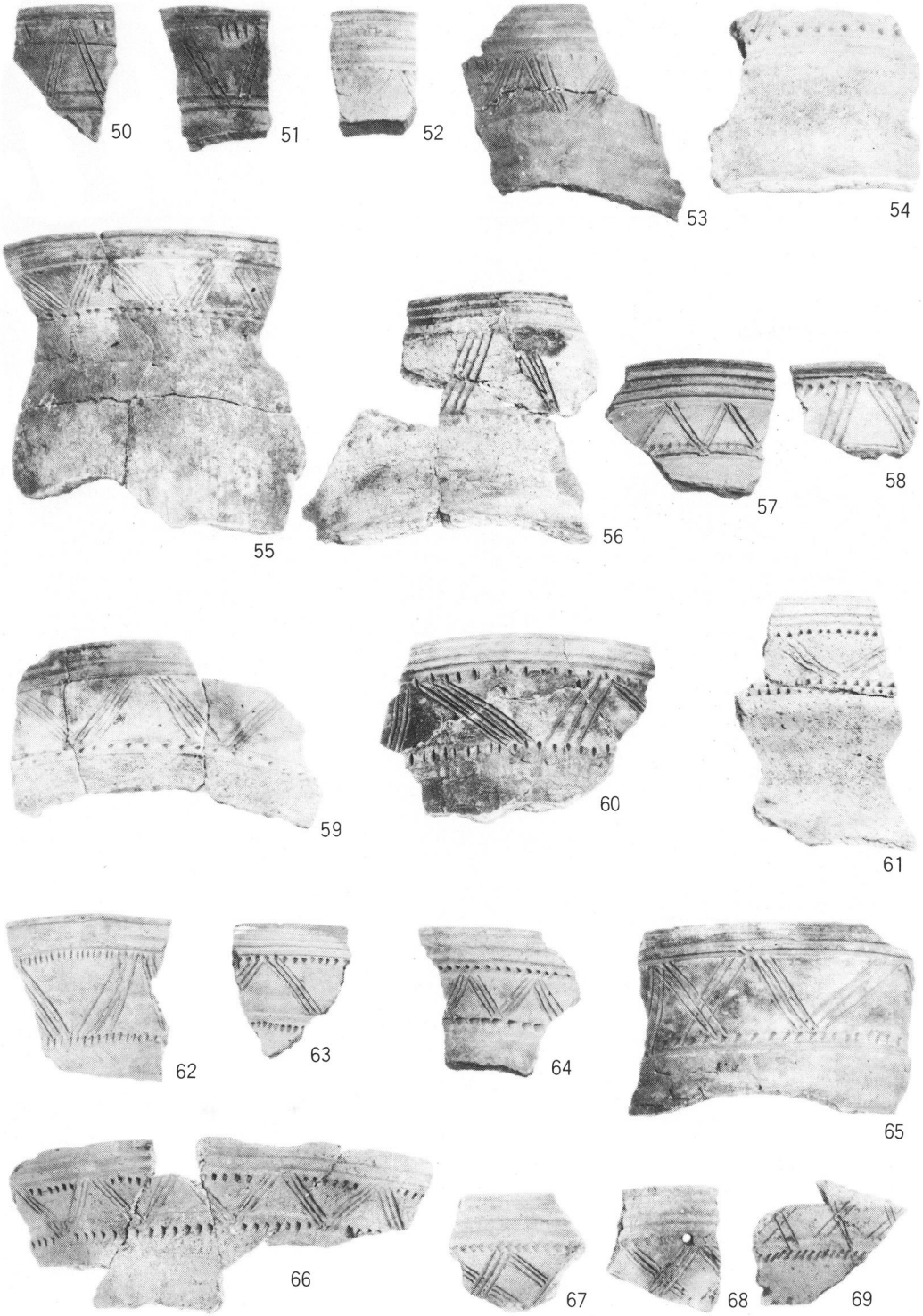
42b

第24図版　出土遺物　第１文化層の土器 (4)

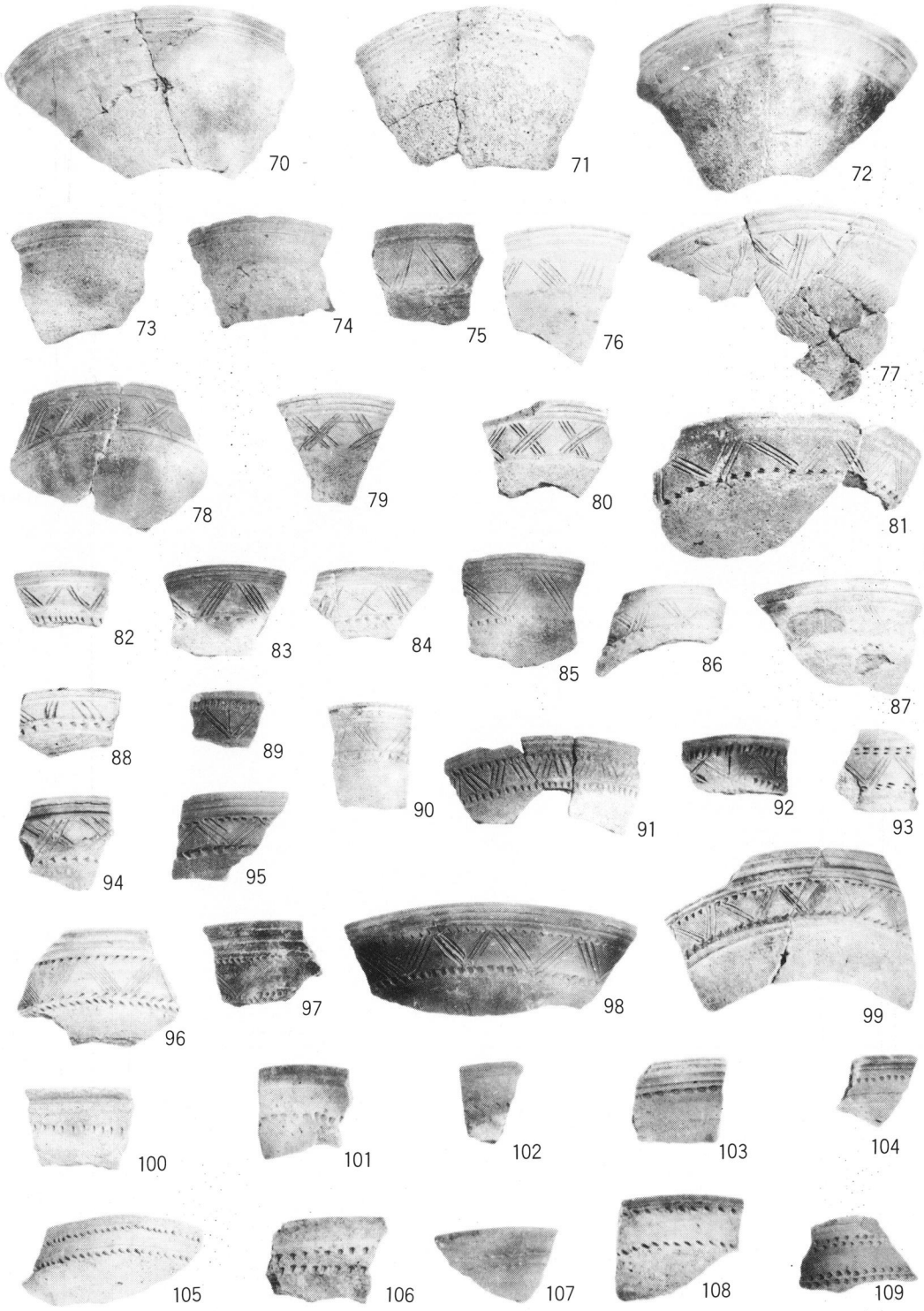


第25図版　出土遺物　第１文化層の土器 (5)

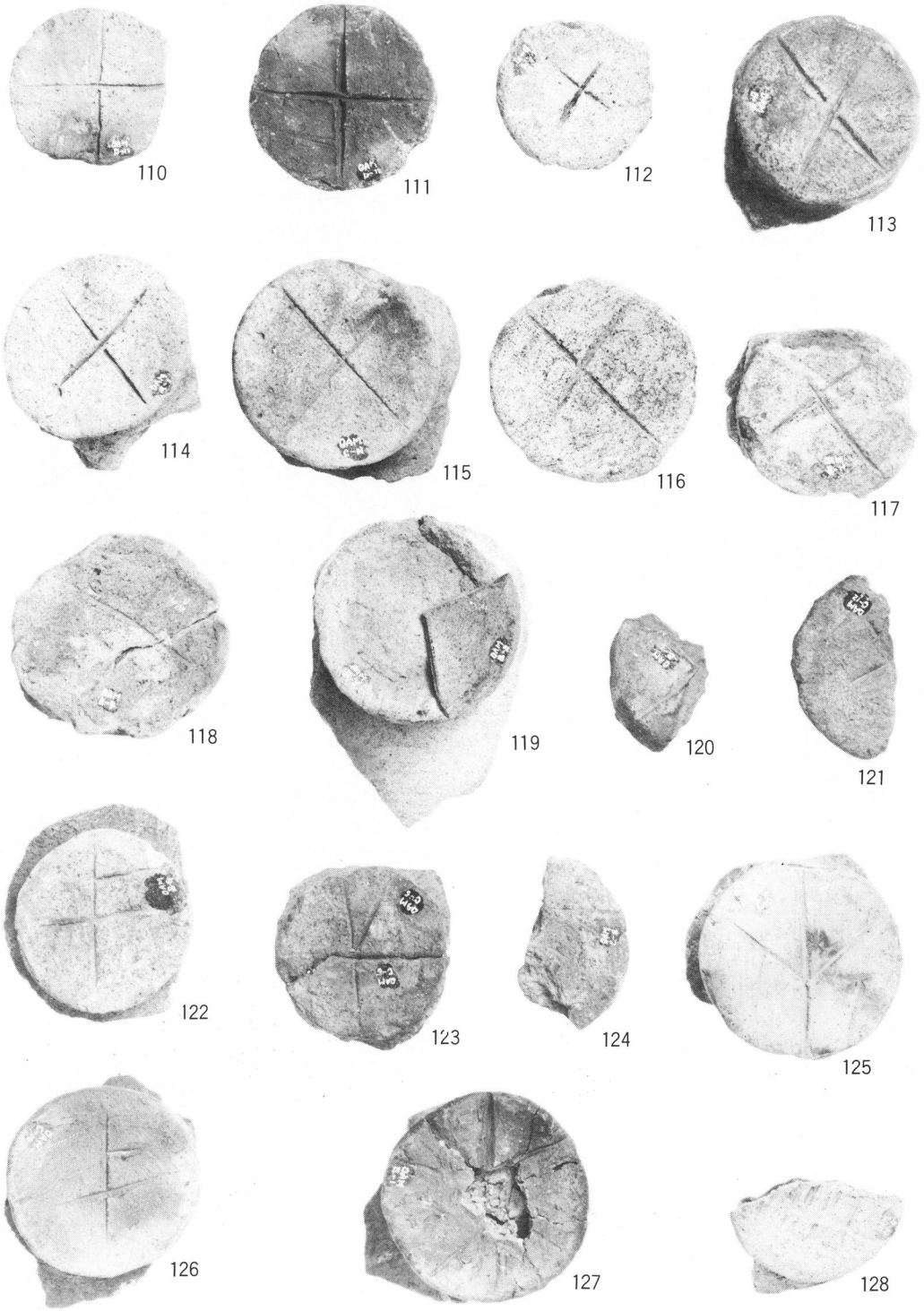
第26図版　出土遺物　第１文化層の土器　(6)



第27図版　出土遺物　第１文化層の土器　(7)

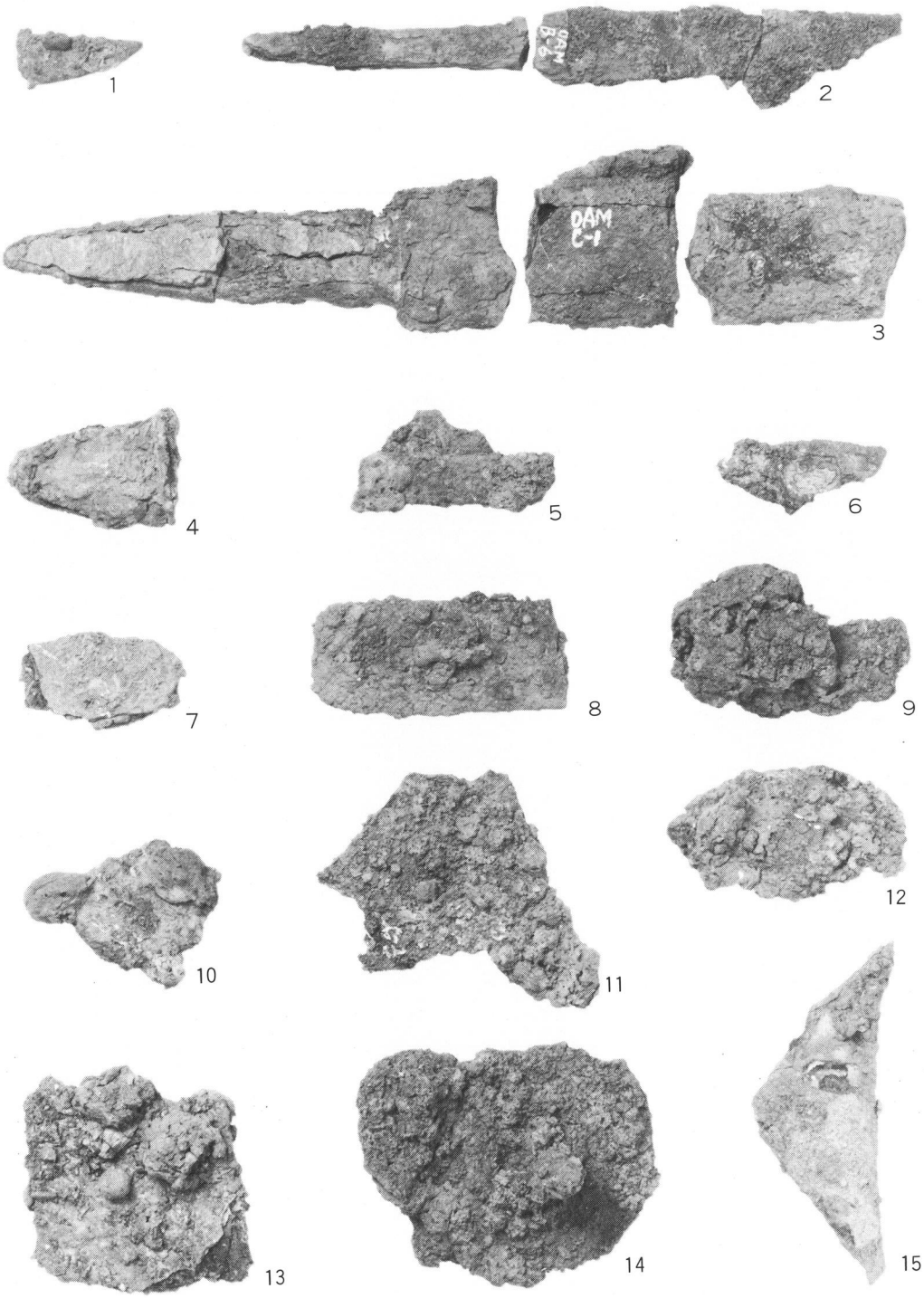


第28図版　出土遺物　第１文化層の土器　(8)

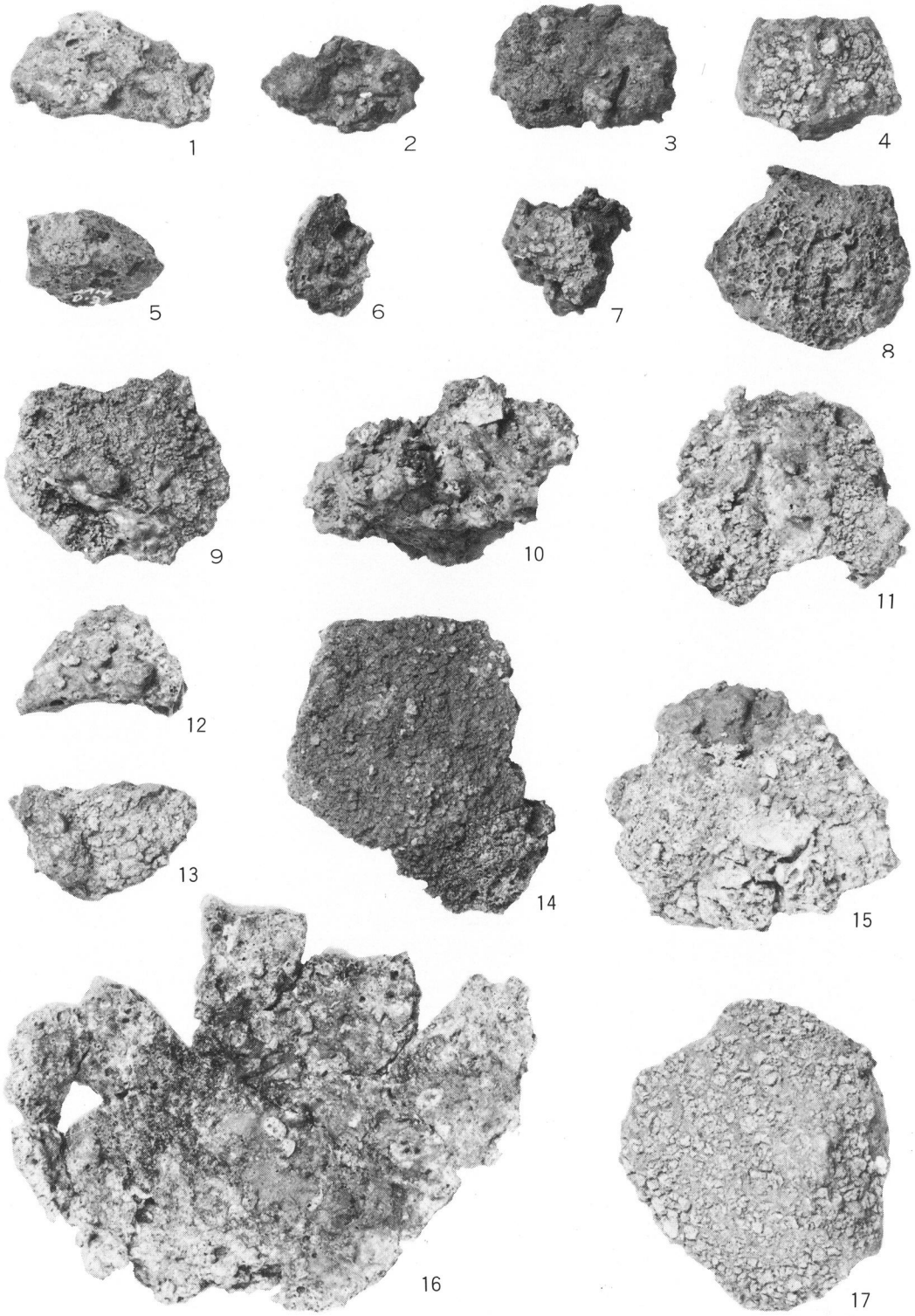


第29図版　出土遺物　第１文化層の土器（9）

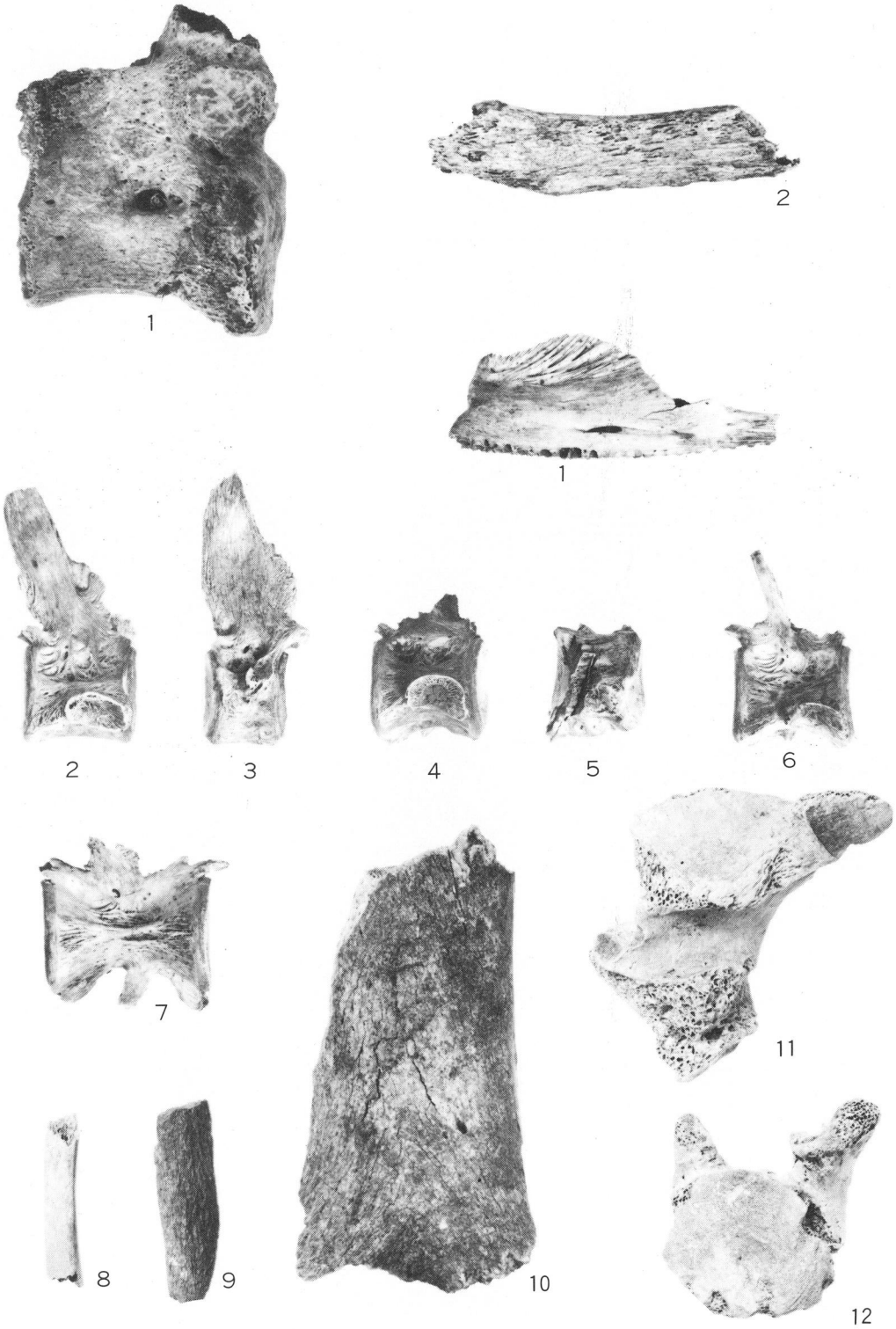
第30図版　出土遺物　第１文化層の土製品および石製品



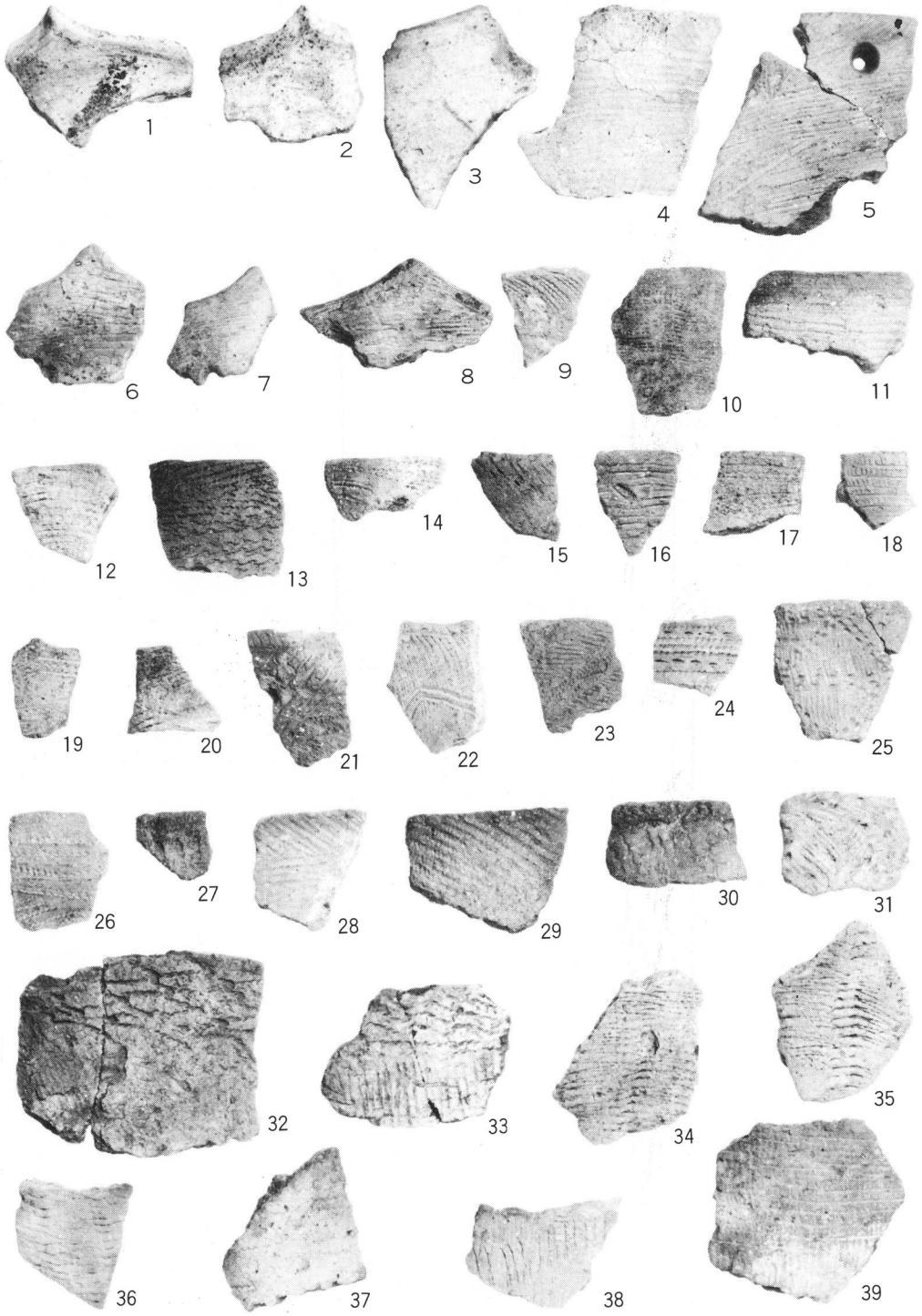
第31図版　出土遺物　第１文化層の鉄器および鉄製品



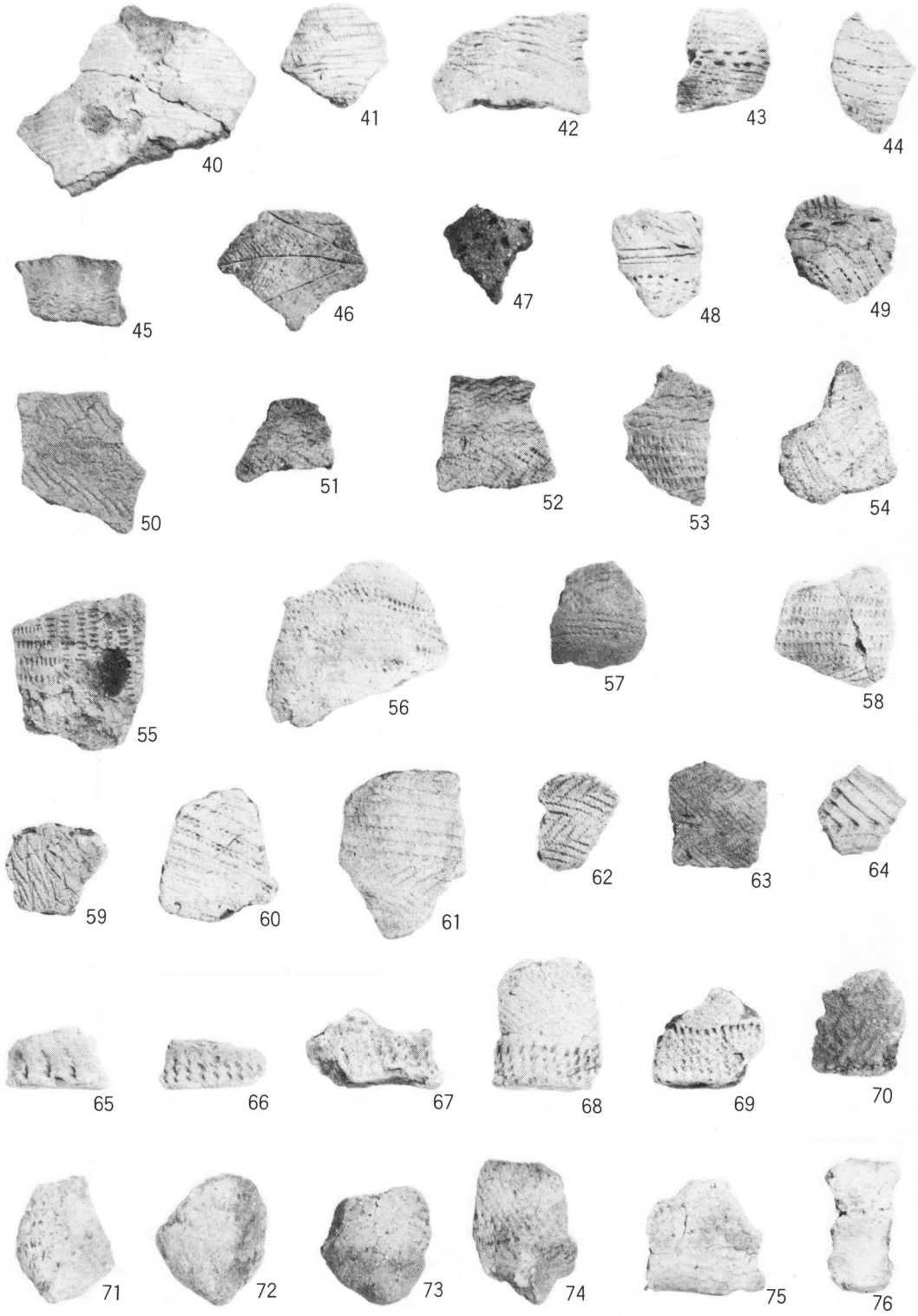
第32図版　出土遺物　第１文化層の鉄滓



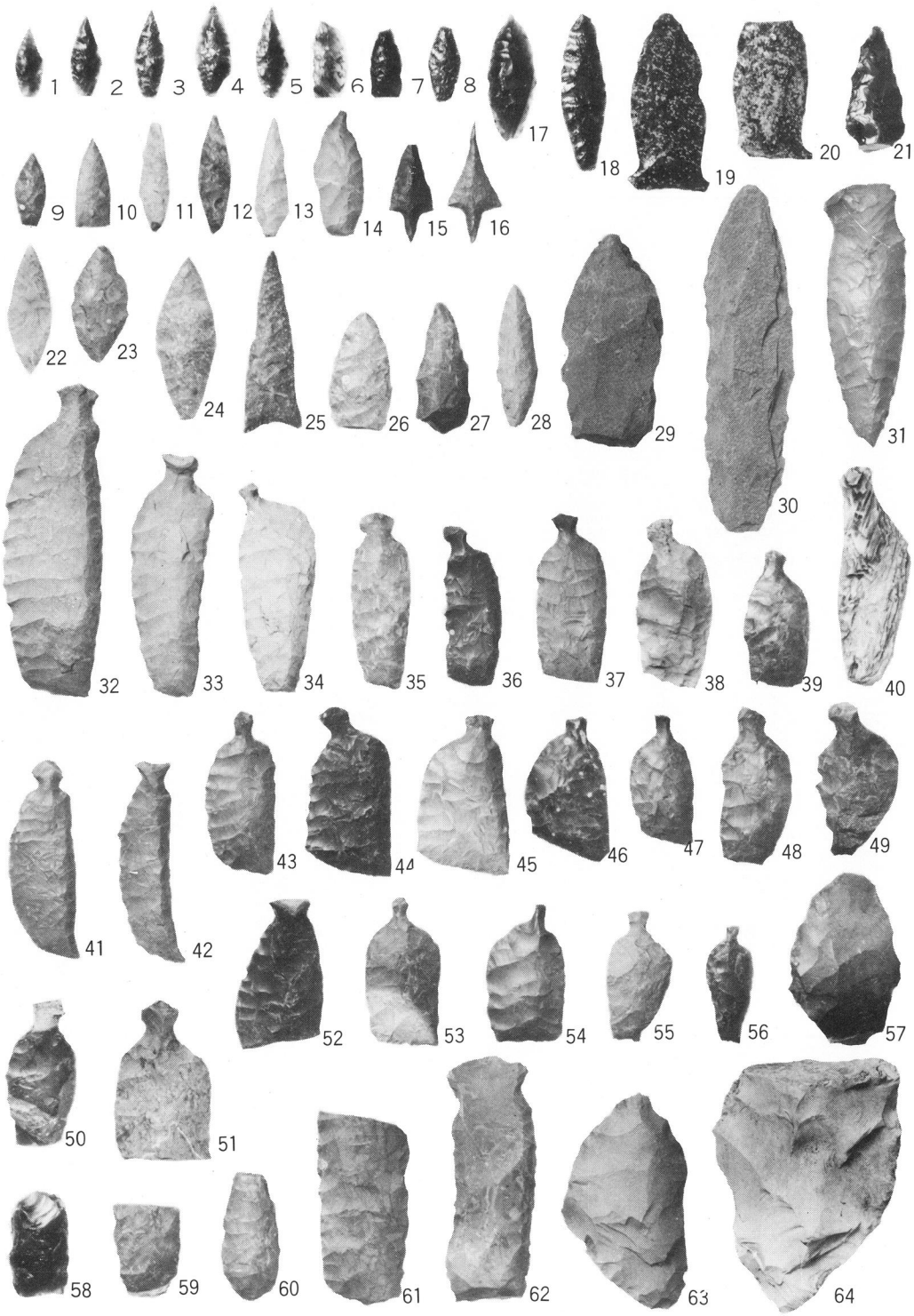
第33図版　出土遺物　第１文化層の石組みに伴う動物遺体
第34図版　出土遺物　第１文化層の動物遺体



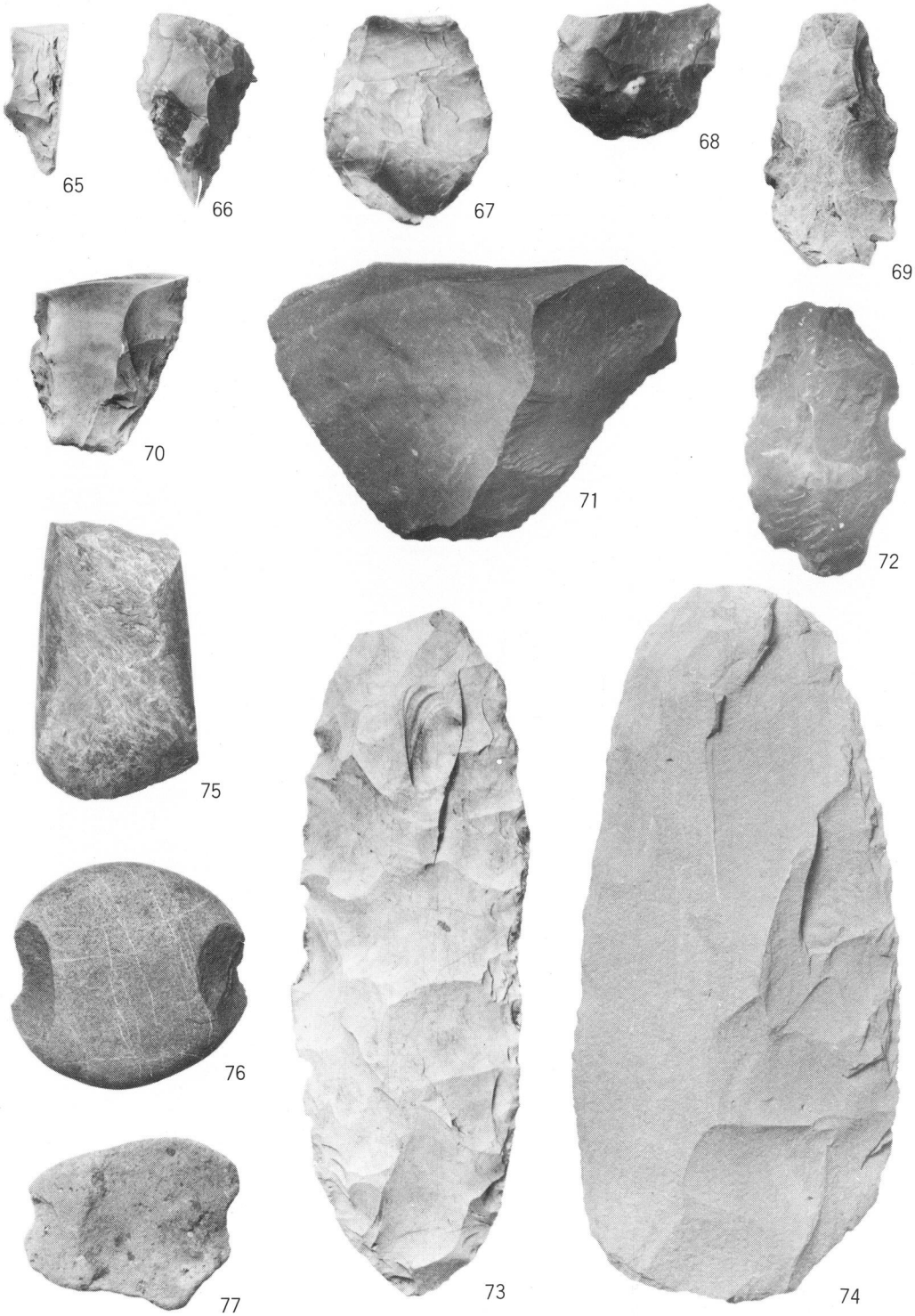
第35図版　出土遺物　第２文化層の土器　(1)



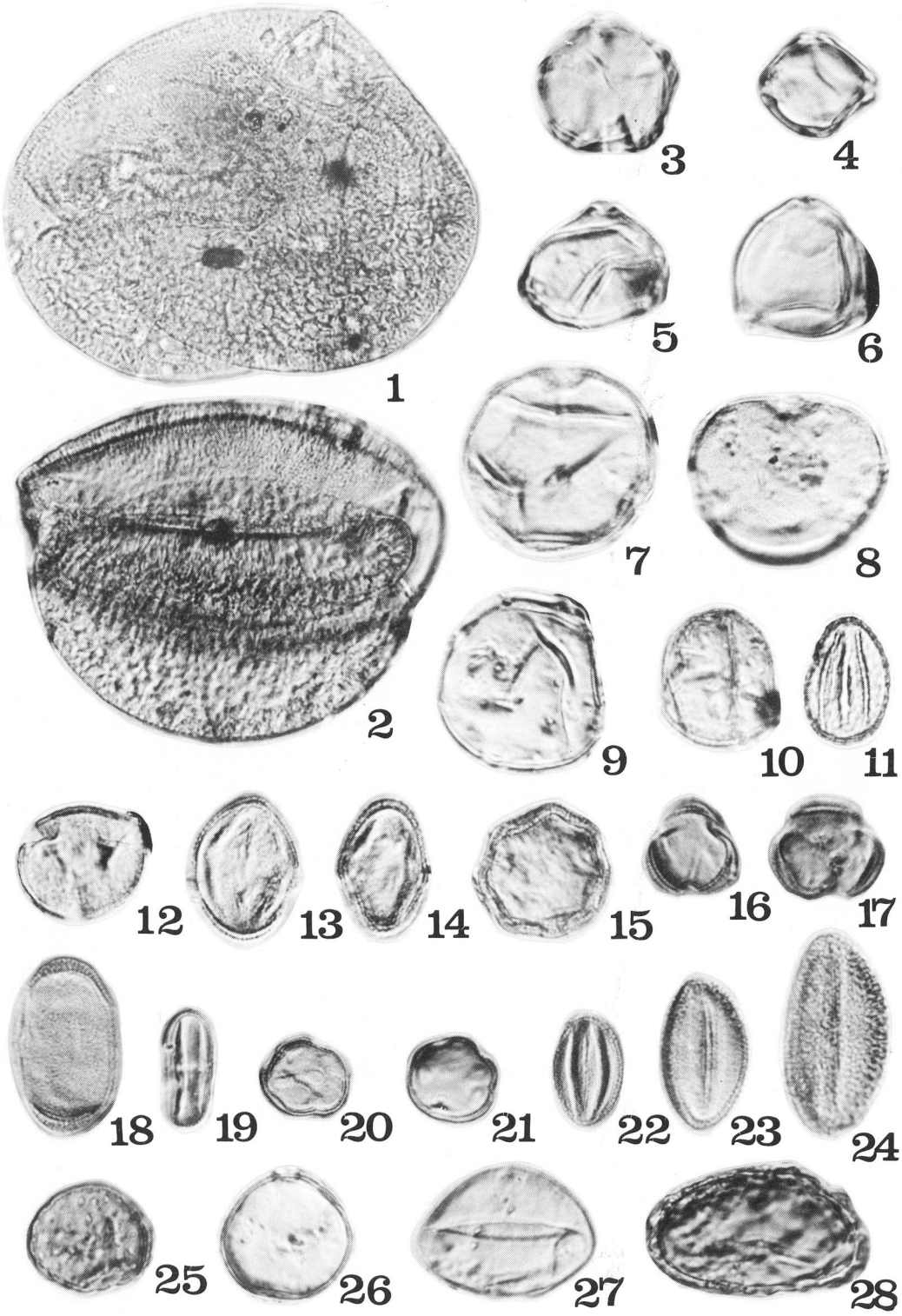
第36図版　出土遺物　第２文化層の土器　(2)



第37図版　出土遺物　第２文化層の石器（1）



第38図版　出土遺物　第２文化層の石器（2）



第39図版　発掘区から検出された花粉

奥尻島青苗遺跡

―山本台地・三浦地点の住宅建築に係わる記録保存の発掘調査報告―

発　行　　1981年3月

編著者　　佐　藤　忠　雄

発行者　　奥尻町教育委員会
　　北海道奥尻群奥尻町字奥尻

印刷所　　三栄プロセス株式会社
　　札幌市白石区菊水4条1丁目